H976
㋐

極秘

我が闘争 第一卷上

東亞研究所

閲 91

序文

今般我東亞研究所はヒットラー總統の有名な著書『マイン・カンプ』を完譯し、こゝにそれを刊行するに至つた。

何故當研究所がかゝる事に着手したかと云ふに、それは當所内の特別第一調査委員會に於て政策施設を研究する上に是非必要であるからで、『マイン・カンプ』を讀むことなしに現時のナチスの一切の政策を了解することは不可能である爲めである。

今日迄我國に於ても『マイン・カンプ』の飜譯は若干試みられたが、其の記述中日本に關する部分が今日の日獨關係上に面白からぬ點がある爲めに、其の完譯は世上に紹介されず、謂はゞ抄譯の程度に過ぎなかつた。素より日獨の良好なる關係を維持する爲めに如上の注意が必要であることは云ふ迄もなく、從つて

全譯を公刊することは避けねばならないが、さりとて此れを全譯して研究上の資料にすることは毫も差支ない許りか、さうする事が日獨兩國民の心からの理解提携に却つて役立つ事等が有る可きを自分は信ずるのである。

此の意味に於て當所はこゝに『マイン・カンプ』の完譯を遂げ、此れを非公表の刊行物として印刷に附した次第で、偶〻本書を手にする人の誤解なからんことを切望する次第である。

昭和十七年八月

東亞研究所　副總裁　大藏公望

凡例

『マイン・カンプ』全篇を第一卷上、下、第二卷上、下として逐次刊行する豫定であるが、本書第一卷上は一九三九年發行の第四十七版を參照しつゝ一九二五年發行の第一版に據つてこれを譯出した。初版と新版とでは單語、文章の構造等に於て若干の相違があるが、特に此の第一章乃至第六章の部分に於ける相違は譯文に現はさねばならぬほどのものでもないから、別に註記しなかつた。

註は總て譯者の附したものである。

飜譯の完全を期するため左の如き英、佛、伊各譯書をも參考とした。

英 Chamberlain, John, & c., trs.; Mein Kampf. Reynal & Hitchcock.

英 Lore, Ludwig, tr.; Mein Kampf. Stachpole Sons.

佛 R. G., tr.; Mein Kampf (Mon Combat), La Defense Française,

Hors Commerce.

伊 Reval, Bruno, tr.; La Mia Vita, La Mia Battaglia. 1940, V. Bompiani & co.

特別第一調査委員會

河　合　哲　雄

序言

一九二四年四月一日、自分は、ミュンヘン人民裁判所の判決によりレッヒ河畔ランツベルグに於て禁錮刑に服さねばならなくなつた。

多年不斷に活動して來た自分は、此の禁錮によつて初めて玆に年來の宿願を果し得る機會を與へられた。宿願とは、豫て多數の人々の要望してゐたところであり、また、自分でも我等の運動に有益なものと感じてゐたところの仕事のことである。そこで、前後二卷の書物によつて我等の運動の目的を闡明するのみならず、更にその發展の姿をも敍述しようと決心した。理論一點張りの論文よりも本書の如き述作の方が讀んで得る所が多からうと思つたからである。

尙ほ、これを機會に、本書の主旨を理解する上に必要であり、また、ユダヤ系の新聞が自分に關して拵へ上げた不快な傳說を打破する上に有用であると思はれる限りに於ての自分の經歷をも記述することにした。

本書は、我等と全然無縁の人々でなく、我等の運動に關係し、衷心よりこれに從事し、これを尙ほ深く理解せんと努力しつゝある人々に讀んで貰ひたいのである。

書かれた言葉よりも、話された言葉による方が大衆の了解を得るに易く、世界に於ける偉大なる運動が、すべてその成功を偉大なる著述家でなく、偉大なる演說家に負うてゐるといふことは自分もよく知つてゐるところである。

併し、如何なる敎義でも、それが永久不變に人心を支配し得んがためには、先づその原則が明瞭に說明せられ確立せられてあらねばならぬ。さういふ意味に於て、本書は我等同志の事業の礎石たるべきものである。

レッヒ河畔ランツベルグ要塞監獄に於て

著者

玆に掲ぐるは、一九二三年十一月九日午後零時三十分ミュンヘンの將軍會館前と陸軍省内庭とに於て、ドイツ國民の復興を確信しつゝ斃れた人々である。

フェリックス・アルファルト	商人	一九〇一年七月五日生
アンドレアス・バウリードル	帽子製造人	一八七九年五月四日生
テオドル・カゼラ	銀行員	一九〇〇年八月八日生
ウィルヘルム・エールリッヒ	銀行員	一八九四年八月十九日生
マルティン・ファウスト	銀行員	一九〇一年一月二十七日生
アントン・ヘッヘンベルガー	錠前師	一九〇二年九月二十八日生
オスカル・ケルナー	商人	一八七五年一月四日生
カール・クーン	給仕長	一八九七年七月二十六日生
カール・ラフォルチェ	工科學生	一九〇四年十月二十八日生
クルト・ノィバウアー	小使	一八九九年三月二十七日生
クラウス・フォン・パーペ	商人	一九〇四年八月十六日生
テオドル・フォン・デル・プフォルテン		

控訴院判事　一八七三年五月十四日生
ヨハン・リックメルス
退役騎兵大尉　一八八一年五月七日生
マックス・エルヴィン・フォン・ショイブナー＝リヒター
工學博士　一八八四年一月九日生
ローレンツ・リッター・フォン・シュトランスキー
技師　一八九九年三月十四日生
ウィルヘルム・ウォルフ
商人　一八九八年十月十九日生

僞而非國民政廳はこれ等の志士のために共同の墓碑を建立することを許さなかつた。

故に、自分は本書の第一卷を記念としてこれ等の志士に捧ぐるものである。願くは、志士よ、血盟の友として永へに我等同志の前途を照示せんことを。

一九二四年十月十六日

レッヒ河畔ランツベルグ要塞監獄に於て

アードルフ・ヒットラー

第一卷 上 目次

序文……一
凡例……三
序言……一
献辭……一
第一章 父母の家……一
父母の家(一)——餓鬼大將(六)——戰爭の感激(七)——職業の選擇(九)——官吏は御免(一一)——畫家志望(一三)——若き國民主義者(一六)——ドイツ人のオーストリア(一七)——ドイツ民族の鬪爭(一八)——歷史教育(二二)——好きな科目、歷史(二五)——歷史上の認識(二五)——ワグネル崇拜(二八)——父親の死(三〇)——ウィーンへ(三二)

第二章　ウィーン苦學時代……三四

建築家の才能(三四)——貧苦五年(三九)——世界觀の生成(四〇)——小市民的な眼隱しを除く(四三)——ウィーンの社會相(四三)——手傳ひ人夫(四六)——收入の不安(四八)——勞働者の運命(四九)——改良の方法(五五)——社會運動の本質(五六)——國民的矜持の缺如(五八)——勞働者の子供の苦難(六〇)——權威を侮蔑する子供(六二)——國民化の豫件(六五)——靈工(六五)——讀書法(六七)——社會民主黨(七二)——初めて出會つた社會民主主義者(七四)——初めて出會つた脅迫(七八)——社會民主黨の機關新聞(八〇)——大衆の心理(八二)——社會民主黨の戰術(八三)——ブルジョアの罪(八八)——勞働組合の問題(八九)——勞働組合の政治化(九四)——社會民主主義の祕密を解く鍵(九八)——ユダヤ人問題(一〇〇)——所謂世界的新聞(一〇四)——ウィルヘルム二世に對する批難(一〇五)——新聞のフランス禮讚(一〇七)——ユダヤ人排斥に轉向(一〇九)——社會民主黨の指導者はユダヤ人(一一九)——ユダヤ人の辯證法(一一四)——マルキシズムの本源(一一六)——文化を破壞するマルキシズム(一一九)

第三章　ウィーン時代批判……一三一

政客(一三二)——オーストリアの政治(一三五)——ウィーンの最後の繁榮(一三六)——オーストリアのドイツ人(一三八)——オーストリア國內諸民族の遠心力(一四

一)——血統を異にする結果(一四四)——ヨゼフ二世(一四六)——オーストリアの瓦解(一四八)——議會制度(一四九)——責任觀念の缺如(一五九)——指導者原理の破壞(一六一)——人材の排斥(一六三)——輿論(一七〇)——多數決主義(一七三)——墮落(一七七)——ユダヤ民族のデモクラシー(一八〇)——ゲルマン民族のデモクラシー(一八〇)——瓦解を免れぬオーストリア(一八二)——ハップスブルグ家とドイツ民族(一八四)——オーストリアのドイツ民族の奮起(一八八)——國權は國權のために存在せず(一八九)——人間の權利は國家の權利を破る(一九〇)——汎ドイツ運動(一九三)——シェーネレルとリューゲル(一九五)——シェーネレルの失敗の原因(二〇一)——汎ドイツ黨と議會(二〇四)——演說の力(二一一)——大衆の獲得(二一二)——ローマよりの離脫運動(二一七)——目標を一つに纏めよ(二三二)——基督敎社會黨の行き方(二三四)——宗敎上の理由によるユダヤ人排斥(二三五)——基督敎社會黨の皮相なユダヤ人排斥主義(二三七)——汎ドイツ黨と基督敎社會黨(二三九)——ハップスブルグ帝國に對する憎惡の增大(二四二)——古びた寄木細工オーストリア(二四四)——生きた學校ウィーン(二四七)

第四章　ミュンヘン

ドイツの誤れる同盟政策(二五一)——四つの政策(二六〇)——新領土の獲得(二七二)——イギリスと結んでロシアに當る(二七七)——ドイツ、オーストリア同盟の破棄(二八〇)——經濟的擴張政策(二八二)——ロシアと結んでイギリスに當る(二八

四）——平和な經濟政策による世界征服（二八四）——漫畫化せられたるイギリス人（二八七）——三國同盟の弱點（二八九）——一九一二年のルーデンドルフ建白書（二九一）——好餌オーストリア（二九二）——國家と經濟（二九七）——腐敗の素因（三〇六）——マルキシズムに對するドイツの態度（三〇七）

第五章　世界大戰……三一〇

近づく破局（三一二）——フェルディナンド太公の暗殺（三一三）——オーストリアの最後通牒（三一四）——ドイツの解放戰爭（三一九）——解放戰爭の意義（三二一）——バイエルンの聯隊に入る（三二四）——砲火の洗禮（三二六）——志願兵より古參兵に（三二七）——不滅の記念碑（三二九）——感激へ水を差す（三三〇）——マルキシズムに對する誤認（三三三）——なすべかりし事（三三五）——暴力の行使（三三八）——世界觀の攻擊（三四一）——ブルジョアの階級的政黨（三四四）——社會民主主義に代り得るもの（三四七）——政治活動志望（三四七）

第六章　戰時宣傳……三四九

宣傳は手段（三五一）——宣傳の目的（三五二）——宣傳の對手は大衆（三五五）——宣傳の任務（三五六）——宣傳心理學（三五八）——主觀的で一方的（三六一）——ドイツの客觀性（三六四）——根氣（三六六）——聯合國の戰時宣傳（三六八）

我が闘争

第一章　父母の家

自分はイン河畔のブラウナウに生れたが、今日から見ればこれは有り難い攝理であつたやうに考へられる。ドイツとオーストリアとは何れもドイツ民族の國家であつて、この二つの國家を再び結合することは、少くとも我等にとつては、あらゆる手段を盡して成し遂げなければならぬ一生の任務と思はれるのである。そして、ブラウナウはこの兩國の國境に位する町である。

ドイツ人のオーストリアはその母國たる大ドイツに復歸しなければならぬ。かく言ふのも決して經濟上の考慮によるのではない。否、否、經濟上の考慮からすればどうでもよく、寧ろ有害でさへあるかも知れない。それにも拘らず、兩國の結合は行はれなければならぬのである。血を同じくする者は國をも同じくせねばならぬ。ドイツ民族は、先づその子等を共同の國家に收容しなければ

ならぬ。さもなくば植民地を要求し得る道德的權利はない。ドイツの國境以內にドイツ人を一人も殘さず收容し、そして、これに對して最早や扶養の保證を與へ得なくなつた時に初めて、自國民の危殆といふことから他國の土地を要求し得る道德的權利が生れるのである。その時には、鋤を劍として戰ふべく、血と涙とによつて子孫のために每日の糧をつくり出すべきである。かやうに考へると、この國境の町は、小さしと雖も一大任務の象徵たるかの如くに思はれるのである。

ブラウナウに就いては尙ほ一つ忘れてならぬことがある。見すぼらしい小さな町ではあるが、ブラウナウは百餘年前に全ドイツ國民の心を搖り動かす悲劇の舞臺となり、少くともドイツの歷史に不滅の名を留むるに至つた所である。我が祖國が屈辱の極にあつた頃のことであるが、ニュルンベルグの書籍商人で熱心な『國民主義者』であり、反フランス主義者でもあつたヨハンネス・パルム（註1）が悲慘な境遇にあつてすら尙ほ熱愛してやまなかつたドイツのために

この町で斃れたのである。かのレオ・シュラーゲター（註2）もさうであつたが、バルムも共犯者等の、否、主犯者等の姓名を口外することを飽くまでも拒絶し、やはりシュラーゲターと同じにドイツの官憲によつてフランス側へ引き渡されたのであつた。アウグスブルグの警察署長はかくの如く淺ましい手柄を立てたが、ゼーヴェリングを内務大臣とするドイツ政府の役人がシュラーゲターをあのやうに處分したのもこれを手本にしたのであらう。

前世紀八十年代の終り頃、血統でいふとバイエルン人であり、國籍でいふとオーストリア人である自分の兩親が、ドイツ魂の莊嚴な殉國の光に輝くこのイン河畔の田舍町に住んでゐたのである。父は律儀な官吏であり、母は家事に專念しながら何時も變らぬ慈愛を以て自分等を育てて呉れたのであつた。この頃のことはあまり記憶に殘つてゐないが、それは、父が數年ならずしてこの住みなれた國境の町からイン河の下流へ移り、パッサウで新しい地位に就かねばならなかつたからである。お蔭で自分等はドイツ本國に移り住むことになつた。

併し、その頃のオーストリアの税吏は殆んど一所に留まることがなく、宛ら『浮草』の如く絶えず移り動いてゐた。パッサウへ赴任した父も間も無くそこを引上げてリンツに移らなければならなかつた。結局、父はリンツで恩給生活をすることになつたが、この引退も父には『休息』を意味するものでなかつた。貧しい水呑百姓の伜として生れた父は、子供の時分から家の内にじつと落ち着いてゐることの出來ぬ人であつた。その昔、まだ十三歳になるかならぬ幼い身を以て荷物を肩に故郷のワルドフィーヤテルを飛び出し、『世故に長けた』村人の忠告をも肯かずにウィーンへ行き、そこで或る手仕事を習ひはじめたのである。それは前世紀五十年代のことであつた。僅か三盾の路銀をふところにして見も知らぬ世間へ飛び出したのはよくよくの決心に違ひない。四年たつて十七歳の時には既に一人前の職人になつてゐたが、さて職人になつて見るとまたそれで滿足が出來ず、長い間の貧乏生活に顧み、具さに嘗めた辛酸に稽へて、今度は、折角習ひ覺えた手仕事を捨てて何か『もつと高尚な者』にならうと思ひ、

役人にならうと肚を決めるに至つた。曾て村にゐた頃の貧しい少年には牧師が人間の望み得る最高の理想であるやうに思はれたが、都會に住んで大いに眼界が廣くなつて見ると、官吏こそ最高の榮位であるやうに思はれたのであらう。そこで、世間の荒波に揉まれて、少年でありながら既に『老成する』に至つた者に往々見らるゝ如き强靭な精神を以て、この十七歳の若者は新しい決心を貫き、たうとう官吏になつたのである。かうして目的を達したのは確か二十三年目であつたと聞いてゐる。曾て、此の貧しい少年は、何か一かどの者に成るまでは懐しい郷里へも歸るまいと誓つたのであつたが、どうやら此の誓ひを果し得るほどの者には成り得たやうに思はれる。

少年の志は遂に成つた。併し、故郷に歸つたところで村には往年の少年を記憶してゐる者はもう一人もゐないのである。父自身も最早や村に親しみを感じなくなつてゐた。

五十六歳で恩給生活に入りはしたものの、一日たりと雖も『無爲の人』とし

て暮すことは出來なかつたらしく、上オーストリアの小さな市場町ラムバッハの近郊に土地を買ひ求めて、これを耕作し始めた。かくして、父は長い苦しい生活を經て遂にまた父祖傳來の家業に還つたのである。

自分の心中に最初の理想のきざし始めたのも恐らくこの時分のことである。外でばかり遊んで家に歸らなかつたり、學校が遠くて途々惡戲をしたり、母に度々大變な心配をかけながら亂暴な子供等と遊んだりしてゐたから、自然に引込み思案の不精者とは緣の遠い者にならざるを得なかつた。從つて、その頃の自分はまだ將來の職業に就いて眞面目に考へてもゐなかつたが、それでも父の辿つて來たやうな經歷だけは何としても厭であつた。自分には辯舌の才能があつたらしく、友達仲間とよく議論めいたことをやつたものであるが、それがまた、この才能を鍛錬してくれたやうに思はれる。自分は何時の間にか餓鬼大將になつてゐた。學校では割合に物覺えもよく成績もよかつたが、學校以外ではかなり手に負へぬ代物であつた。暇があるとラムバッハの僧院に行つて唱歌を

習つた。だから、教會の莊嚴な儀式に陶醉し得る機會が多かつた。そこでまた、會て父にとつて村の牧師が最高の理想であつたと同じに、僧院長が自分にとつて渴仰すべき理想であるやうに思はれて來た。少くとも一時はさうであつた。これも自然なことであらう。併し、論爭好きな自分の辯才をそれほどにも認めず、自分の將來のためになるものとも思つてくれなかつた父には、僧院長にならうといふ少年らしい考へ方も分らなかつた。父は唯だ心配しながら志望の定まらぬ子供を見守つてゐたやうである。

僧院長にならうとする憧れは間もなく消えて、やがて自分の氣性にもつとよく似合つた望みが現はれて來た。父の藏書を搔き廻してゐると、戰爭に關した色々な書物が出て來たが、その中に一八七〇—七一年の普佛戰爭を書いた通俗本があつた。戰爭當時の刊行にかゝる二卷の繪本戰記であつたが、自分はやがてそれを飽かず愛讀するやうになり、戰爭の勇ましさに深く心をひかれてしまつた。それからといふものは、戰爭や軍人と何か關係のある事柄に對してだん

だんと熱中するやうになつたのである。

ところで、この戰爭物に熱中したといふことには今日から見て尙ほ一つ大切な意味があつた。戰記を耽讀してゐるうちに、一體、この普佛戰爭に參加せるドイツ人と然らざるドイツ人との間には何か區別があるのか、あればどんな區別があるのか、何故オーストリアはこの戰爭に參加しなかつたのか、そして何故自分の父も他のあらゆるオーストリア人もこれに參加しなかつたのか、といふ疑問がこゝに初めて——勿論、まだはつきりした形で現はれたのではなかつたが、兎に角、こゝに初めて——湧いて來たのである。

我等も他のあらゆるドイツ人と同じドイツ人ではないのか。我等はすべて元來一緒のものではないのか。

かういふ問題が初めて自分の小さな頭の中を搔き廻した。そして、このまだはつきりした形を取らぬ疑問に對して、必ずしもあらゆるドイツ人がビスマルクのドイツに屬し得る幸福を有するわけでないと聞かされて、內心羨望の念を

禁じ得なかつたが、自分にはどうも合點がゆかなかつた。

卐

さて、自分にも上の學校へ行く時が來た。

自分の人柄や、特に氣性から見て、父は文科系統の中學校は素質に合はぬものと決め、實科學校の方がよからうと考へてゐた。父の意見によると、オーストリアの中學校では圖畫を甚だ疎かにしてゐるが、自分は圖畫が好きで、その方の才能も確かに日常に現はれてゐたから、それから見ても中學校は駄目だといふのである。父が文科系統の教育を實際的でないとしてあまり尊重しなかつたのは、一つには恐らく父自身の苦勞に充ちた生活上の經驗によるのであらうが、根本の原因は、伴も當然に父と同じく官吏に成るもの、否、成らなくてはならぬものと考へてゐたことにある。若い頃の辛酸を思ふにつけ、後に官吏になつたことが非常に偉いことのやうに思はれたらしい。倦まず撓まざる勤勉と

自力とによつて贏ち得た成功であるから、かやうに思ふのも無理からぬことであらう。何れにせよ、自力で身を立てた人にあり勝ちな誇りから、父は伜をも自分と同じな——勿論、出來るならばもつと高い——社會的地位に就かせようと考へるに至つたのである。伜の立身は父の勤勉な生活のお蔭で父の場合よりも遙かに容易になつてゐる筈であるから、父としてはますますかやうな希望を抱くやうになつたのであらう。

父がその一生を捧げたほどのものを伜が厭がるであらうとは夢にも考へられぬことであつた。從つて、伜を官吏にしようといふ父の決心は單純であり、鞏固であり、明白であつて、父から言へば當然自明のことでもあつた。のみならず、父から見てまだ經驗もなく責任も負ひ得ない子供にその將來のことを勝手に決めさせるのは、惡戰苦鬪の生涯の間にいつか暴君の如く專横になつてゐた父には全く我慢の出來ぬことであつたであらう。また、子供にそんなことをさせては、子供の將來の生活に對して父として當然の權威を揮ふことが出來ず、

責任を負ふことも出來なくなり、義務の履行に關する父の持論と相容れぬことになるのである。

ところが、何もかも父の思ふやうにはならなかつた。

やつと十一歳になつたばかりの自分は生れて初めて父に反抗せざるを得ないことになつた。父は計畫でも目論見でも、一旦かうと決めた以上は飽くまでも頑固にそれを押し通さうとする人であつたが、伜の自分も氣に入らぬことに對しては飽くまでも强情に頭を振つて梃子でも動かなかつたのである。

官吏には成りたくなかつた。

父は手を代へ品を代へて說いたが、なだめてもすかしても、また『おどかして』も自分は肯かなかつた。官吏には成るまいと思つた。決して、斷じて成るまいと思つた。父は生涯の出來事を何かと話して聞かせ、官吏といふ職業に對する好意や興味を喚び起さうとしたが、そんなことをすればするほど、自分はますます官吏が厭になつた。大の男が窮屈な思ひをしながら役所に坐つてゐる

ことや、自分の時間をも勝手に使ふことが出來ずに一生を型通りに生きてゆかねばならぬことなどは考へるだけでも胸の惡くなることであつた。

それでなくても、自分は世間普通の『感心な』子供とはまるで緣の遠い少年であつたから、こんな窮屈な生活に興味を感じる道理がない。學校で習ふことは可笑しいくらゐ易しく、從つて幾らでも暇があつたから、自分は家に閉ぢ籠るよりも外で飛び廻つてゐる方が多かつた。今日、政敵の中には、親切にも自分の少年時代のことまで仔細に探り出し、この『ヒットラー』が子供の頃から手に負へぬ代物であつたことを確めて氣慰めとしてゐるものもあるが、自分はあの幸福な時代の數々の思ひ出を胸の底から喚び起してくれる政敵に寧ろ感謝するものである。絕ゆる間もなく父と衝突してゐたあの頃の自分に取つて、牧場や森は憂さを晴らす所であり、靜かに深い想に耽る所であつた。

實科學校に通ふことになつてもかやうな狀態に變りはなかつた。否、從來のそれとは違つた衝突が新たに起らずにはゐなかつたのである。

自分を官吏にしようとする父の意向と、官吏といふ職業そのものを嫌惡する自分の氣持とが對立してゐる間は、葛藤といつたところでまだたいしたことはなく、我慢し易いものであつた。自分さへ思つてゐることを胸に祕めて默つてをればよく、何も直ぐ抗辯しないでも將來斷じて役人にはならぬと堅く決心してをればそれで濟むのである。また、實際に自分はこの決心を變へなかつた。ところが、父の計畫と自分の計畫とが對立するに及んで問題はむづかしくなつたのである。それは自分が十二歳の時のことであつた。ある日のこと、自分はふと、畫家にならう、美術家にならうと思つた。どうしてそんな氣になつたのか今日では自分にも分らない。自分に圖畫の才能のあることは確かで、父が自分を實科學校へ入れたのも一つはこの才能を認めたがために違ひないが、自分を本職の畫家に育てあげようとは、恐らく父の夢想だもしなかつたことであらう。さればこそ、ある日のこと、自分が例によつて父の希望に背いて官吏になることを拒むと、父がこの時に初めて、それならお前は一體何に成るつもりか

と訊くから、豫て心に決めてゐたことをかくさず打ちあけると、父は驚いて暫く口もきけなかつたのである。

『畫家に？　美術家に？』

父は、自分がどうかしたのではないかと疑ひ、また、聞き違ひではないか、誤解ではないかとも思つたらしいが、さうでないと分かり、しかも自分がそんなことを本氣で考へてゐるのを知ると、斷々乎として反對した。この時に於ける父の決斷は極めて單純で、自分に實際に具はつてゐる才能を何とか考慮してやらうなどといふ親切はまるでなかつたのである。

『美術家はいかん。わしの生きてゐるうちは斷じていかん。』

ところが、伜は色々な性質と一緒に父のそれと同じやうな强情をも讓り受けてゐたから、返事もやはり頑固であつた。それでも、どうしても美術家になるといふのである。

兩方とも讓らなかつた。父はその『斷じて』を棄てないし、自分は『それで

も』を言ひ張つた。

勿論、結果は甚だ面白くなかつた。老人は不機嫌になつた。自分も、父を愛してゐたに拘らずやはり不機嫌になつた。父のその樣子からとても畫家にして貰へさうにないと見て取つた自分は、それならばもう勉强しないと駄々をこねた。この駄々で莫迦を見たのは勿論自分で、老人は容赦なく父の權威を揮ひだした。そこで、自分は默つて何も言はずに威嚇を實行に移すことにした。實科學校の成績が惡いのを見れば、如何な父でも否應なしに自分の思ふ通りにさせてくれるやうになるであらうと考へたのである。

この打算が當つてゐたかどうかは知らないが、兎に角、學校の成績が目立つて惡くなつたことだけは確かである。好きな學科や、特に將來畫家として立つ時に役にたちさうに思はれる學科だけは勉强したが、それほど大切でもないと思はれる學科や、あまり興味を惹かない學科に對してはすつかり懶けてしまつた。それ故、その頃の成績は極端に走つてゐて、良いものは非常に良く、惡い

ものは非常に悪かつた。『優』や『良』に並んで『可』もあれば『不可』もあつたのである。地理の成績も非常によかつたが、世界歴史の成績はそれよりも更に良かつた。地理と歴史とは自分の好きな科目であつた。だからこの二つの科目では、自分は學級で群を抜いてゐた。

爾來幾星霜、今日更めて當時の勉强の結果を吟味して見ると、特に重要なものとして眼につく事柄が二つあるやうである。

第一に、自分は國民主義者になつてゐた。

第二に、自分は歴史の精神を會得し、味讀することを學んでゐた。

一體、世界大戰以前のオーストリアは『多民族國家』であつた。

多民族國家といふこの事實がかやうな國家に住む人々の日常生活に對してどのやうな意義を有するものであるかといふことは、ドイツ國民、少くとも戰前のドイツ國民の理解し得るところでなかつた。勇敢な軍隊によつて驚くべき大勝を收めることの出來た普佛戰爭以後は、ドイツ國民は在外ドイツ民族に對し

て漸く冷淡になつてゐた。或るものは最早やこれが眞價を認めることが出來ず、或るものは敢てこれが眞價を認めようとしなかつた。特にオーストリアのドイツ人に關しては、ドイツ國民は腐敗墮落せる王朝と根柢に於てなほ健全なるドイツ民族とを混同し勝ちであつた。

オーストリアの人口は五千二百萬であつて、その中ドイツ人は一千萬人に過ぎなかつた。それにも拘らず、オーストリアはドイツ民族の國であるといふ考へ方がドイツ國内にさへ行はれてゐた。これは間違ひで、とんでもない妄想であるが、かやうな謬見が行はれたのもつまりはオーストリアのドイツ人が實際に血統の優秀な民族であつた證據で、さもなくば種々雜多な民族を擁する大國にかほどまで濃厚なドイツ色を與へることは出來なかつた筈である。然るに世間にはこのことが分つてゐなかつた。オーストリアのドイツ人はドイツ人の國語、ドイツ人の學校、ドイツ人の魂などの爲に絶えず必死に戰つて來たが、本國のドイツ人でこれに就いて知つてゐたものは極めて少なかつた。今日では數

百萬の同胞がドイツから切り離され、悲痛な苦難を押しつけられ、外國の支配下にあつて祖國を夢み、憬れ、少くとも母國語の維持に努力せざるを得なくなつてゐるから、同胞民族のために戰ふといふことの何たるかが割合に弘く知られて來たやうである。數百年の久しきに亙つて獨力を以て能くドイツの東邊を防護し、ドイツが專ら植民地に執着して眼前の骨肉に冷淡であつた時代に、困難な不斷の鬪爭によつて能くドイツ語域を確保し得たオーストリア・ドイツ民族の偉大な功績は、今日では恐らく誰にも推量の出來るところであらう。

古今東西を問はず、また如何なる鬪爭でもさうであるが、國語を繞つて戰前のオーストリアで行はれた鬪爭に於てもやはり三つの型の人間を見ることが出來た。戰はねばならぬとする者が一つ、どちらでもよいとする煮え切らぬ者が一つ、裏切る者が一つである。

かやうな型は學校にゐる頃の兒童にも既に現はれて來る。國語を繞る鬪爭では、來るべき世代の溫床たる學校が最も激しい戰ひの舞臺になり易い。國語を

繞る闘爭は卽ち兒童を繞る闘爭であり、それ故に

『ドイツの少年よ、ドイツ人たるを忘れざれ』とか

『ドイツの少女よ、ドイツ人の母たらんことに心せよ』

とかいつて先づ兒童に呼びかけるのである。

少年の心を知る者には、少年がかくの如く呼びかける聲に喜んで耳を藉すものであることが分るであらう。耳を藉したとなれば、少年は各自の流儀に從ひ各自の武器により、種々な方法で立ち所に闘爭を展開するのが常で、ドイツの少年ならば、ドイツの歌でない歌は唱はず、ドイツの偉人から遠ざけようとせられゝばせられるほど却つてますますこれに近づかうとし、食べる物も食べないで貯めた小錢を大人の軍用金として積み立てる。ドイツ人でない敎師の言葉に對しては殆んど信じられないほど過敏で、動もすれば反抗し、禁められても禁められてもドイツ民族の徽章をつけ、それがために罰せられたり叩かれたりするのを却つて喜ぶのである。卽ち、これ等の少年は小さいながらも立派な大

人の映像であり、しかも、その心根に於て大人よりも善良で純眞であることが多いのである。

自分も幼いころから戰前のオーストリアに於ける民族闘爭に捲き込まれてゐた。曾てドイツの南境地方やドイツの學校聯盟のために寄附金を募集したことがあるが、その折に自分等は矢車草の徽章をつけ、黑赤金三色の旗を押し立てて昂然として『萬歳』を叫び合ひ、制止も處罰も物かは、皇帝の頌歌の代りに『ドイッチュランド・ユーバー・アルレス』を唱つたものである。卽ち、所謂民族國家の人々が概ねなほ未だ同胞民族に就いてその言葉以外には知るところのなかつた時代に、自分はかうして政治的に教育せられてゐたのである。從つて、自分が當時既に國語問題に就いてどちらでもよいとする煮え切らぬ仲間でなかつたことも自ら明らかであらう。間もなく自分は熱烈な『ドイッ國民主義者』になつたが、この國民主義が今日我が黨で使用してゐる概念と同じものでないことは言ふまでもない。

いづれにしてもかやうな主義の方面に於ける自分の進歩は極めて急速であつた。十五歳の時には既にオーストリアの王室を中心とする『愛國主義』と民族を中心とする『國民主義』との區別を知り、次第に國民主義に左袒するやうになつてゐたのである。

ハッブスブルグ帝國の內情を研究したことのない者には、かやうなことは恐らく分らぬかも知れぬが、オーストリアでは、學校で敎へる歷史といへばドイツ民族と他の民族との交涉の歷史であつて、取り立ててオーストリアの歷史といひ得るものは殆んど無かつたから、自ら『愛國主義』よりも『國民主義』の方が養成せられるに至つたのである。元來、オーストリアの運命はドイツ民族全體の生活や發展と緊密に結びついてゐて、ドイツの歷史の外にオーストリアの歷史を立てることはむづかしい。ドイツは近世になつて二つの勢力範圍に別れたが、この分裂はドイツの歷史の分裂に他ならぬのである。

其の昔の神聖ドイツ・ローマ帝國の國璽は今もなほウィーンに保存せられて

あるが、これが永遠無窮の協同體の保證として不思議な魔法の如き作用をつゞけてゐるやうに思はれる。

ハップスブルグ帝國の崩潰したとき、オーストリアのドイツ人はオーストリアと母國ドイツとの合同を要望した。これは自然の叫びであつて、民族全體の胸の底に深くまどろんでゐた感情の迸りであり、夢寐にも忘れ得ぬ祖國へ復歸せんとする憧憬の發露にほかならなかつたのである。これもまた、オーストリアに於ける歴史教育がオーストリアのドイツ人にかやうな共通の憧憬を注ぎ込んだからであつて、まことに、歴史教育の中には汲めども盡きぬ泉がある。特に今日の如く過去を重んじない時代に於て、無言の警告者として、一時の安穩に欺かれず、絶えず過去を記憶に喚び起しつゝ新しい未來を囁く泉があるのである。

所謂中等學校に於ける世界歴史の教育は今日でもなほ甚だ面白くない。年代や事件を暗記暗誦させるのが歴史教育の目的ではない筈で、某々の會戰は何時

行はれたとか、某々の將軍は何時生れ、某々の（大抵は碌でもない）國王は傳來の王冠を何時戴いたとか、生徒がかやうなことを正確に知つてゐようとゐまいとそれはどうでもいいのであるが、このことを心得てゐる教師は非常に少いのである。

すべて歴史上の事件として現はれてゐるものは何等かの原因によつて生じた結果であり、歴史を『學ぶ』といふことは、これ等の事件の原因として働いた色々な力を探究し發見することにほかならぬのである。

抑〻讀書習學の要諦は唯だ大切なことだけを憶えて、さうでないことを忘れるにある。

幸にも、自分の教はつた歴史の先生は原因の探究を授業や試驗の根本方針にすることを心得てゐる稀有の教師の一人であつた。卽ち、リンツの實科學校のルードウィヒ・ペッチュ博士(註3)である。歴史教育に關した上述の要求を全く理想的に具現した先生であつて、かういふ先生に習つたといふことは自分の生

涯にとつて非常に大切なことであつた。親切でしかも嚴格な老先生であつたが特にその光彩陸離たる雄辯は自分等の心を捉へたのみならず、それこそ本當に自分等の魂を奪ひ去つたといつてもよい。今日でもなほこの白髮の老人を想ふと多少の感慨を覺えるが、先生の講義は火の如く熱烈で、聽く自分等は屢〻現在を忘れて過去に歸つた。霧の帷帳に包まれた千年も昔の乾からびた史實も、先生の口から語られると生き生きとして現實に躍動する。さういふ時には、自分等は情熱に燃えながら耳を傾けたもので、すつかり感動して涙を流すことさへもあつたのである。

先生は、現在によつて過去を說き、また過去から現在を抽き出して見せてくれた。これはまことに有り難いことで、お蔭で當時の自分等を惱ましてゐた時事問題もよく分るやうになつた。また、先生は、自分等少國民の情熱を敎育に利用した。自分等の腕白が烈しいときにも、他の手段によらず專ら自分等の國民的名譽心に訴へて手際よく速かに取り鎭めたことも屢〻あつた。

歴史が自分の好きな科目になつたのも先生のお蔭である。

勿論、それと共に自分は――これは或は先生の望まぬところであつたかも知れぬが――その頃から若き革命家になつてゐたのである。

このやうな先生からドイツの歴史を教はりながら、しかもなほ、國民の運命にあのやうに有害な影響を與へた王室を戴くオーストリアを憎まずにゐられる者があり得ようか。

今も昔も唯だ淺ましい私利のみを追うてドイツ民族の公益を裏切つてゐる王室に對して、なほ飽くまでも忠節を盡さんとする者があり得ようか。

オーストリアは我等ドイツ人を少しも愛しなかつた。否、愛し得なかつた。これこそ、年少の自分等と雖も知らずにはゐなかつたところの事實である。

ハップスブルグ家の惡業は唯だ歴史によつて知り得るだけではない。日常の經驗もこれを教へるのである。北方でも南方でも、異民族の毒素がだんだんとドイツ民族の身體を蝕み、ウィーンさへ見る見るうちにドイツ人の都でなくな

り、『王室』は何かにつけてチェッコ風を取り入れてゐた。オーストリアのドイツ民族に取つて不倶戴天の仇敵であつたフランツ・フェルディナンド太公を仆した彈丸が太公自身の庇護の下に造られたものであつたことはまことに天の配劑といふべきで、太公こそオーストリアを上層から次第にスラヴ化せんとした張本人であつたのである。

ドイツ民族の負擔は非常なもので、犧牲は課稅に於ても流血に於てもまことに驚くべきものがあつた。勿論、かやうな犧牲がすべて無駄であることは、盲目でない限り誰でも知つてゐたに違ひない。特に殘念であつたのは、オーストリアのこんな方策がドイツとの同盟によつて道德的に辯護せられてゐたことである。この古い帝國のドイツ民族を徐々に剿滅せんとする方策がドイツにまつて或る程度まで承認せられてゐたことである。ドイツ民族を壓迫しながら、外に對しては依然としてオーストリアをドイツ民族の國家たるが如く見せかけたハップスブルグ王室の欺瞞は、まことに憎むべく、これが延いてドイツ民族の

間に王室に對する激しい反抗や輕侮をさへ喚び起すに至つたのである。

然るにドイツの『當局者』だけはこれ等の事情を少しも知らず、宛ら盲人の如くに死屍の傍をうろつき廻り、腐敗の兆候をさへ『新生』の表徴と見てゐた。若いドイツがオーストリアといふ見せかけばかりの國と結んだのが不幸の基で、後の世界大戰もドイツの崩潰もその源はこゝにあつたのである。

此の問題に就いては尙ほ後に詳しく述べる筈であるから、こゝでは唯だ、自分が年少の頃に既に一かどの見識を抱くに至り、爾來これを棄てず、寧ろ次第に深めていつたといふことを確言するに留めておきたい。

ドイツ民族を保全するにはどうしてもオーストリアを滅ぼさねばならぬといふこと、ドイツ民族の感情はハップスブルグ王室を中心とする愛國主義と全く一致しないといふこと、特にハップスブルグ王室はドイツ民族を不幸に陷れるものであるといふこと、これが卽ち自分の抱き得た見識であつた。

かやうな見識から、自分は必然にオーストリアのドイツ民族の故郷を熱愛す

ると共に、オーストリアを衷心から憎惡するやうになつたのである。

卐

何事に就いても歴史的に考へるといふのが學校で敎はつた流儀で、この考へ方は爾來自分の念頭を去つたことがない。自分に取つては、世界歴史が現在の歴史卽ち現在の政治を理解するに必要な智慧の泉であつた。自分の方で歴史を『學ばう』としないでも、歴史の方で自分を敎へて呉れるのである。

上述の如く、自分は年少にして早くも政治上の『革命兒』になつてゐたが、同時に藝術上の革命兒にもなつてゐた。

當時、上オーストリアの首都には割合に惡くない劇場があつて大抵のものを上演してゐた。自分は十二歳の時にその劇場で初めて『ウィルヘルム・テル』を觀、それから數箇月を經て『ローエングリン』を觀た。これは生れて初めて觀るオペラであつたが、自分は忽ち魅せられてしまひ、それからはバイロイト

の巨匠が子供心に好きで好きでたまらず、だんだんとワグネルの作品に牽きつけられていつた。今日から見ると、田舍劇場に於けるこの演出が粗末といふほどではなかつたが平凡で、後にもつと立派な演出を觀る機會を殘して置いて呉れたのは、自分に取つて此の上もない幸であつたやうに思はれる。

かやうな具合であつたから、父の選んで呉れた職業は心から底から厭であつた。腕白時代を通り過ぎて後は特にさうで、役人になつても決して幸福ではない、と深く確信するやうになり、その上、實科學校でもだんだんと圖畫の才能を認められて來たから、畫家にならうといふ決心を益〻固めるに至つたのである。父に背くのであるから、考へて見れば自分ながら痛ましい決心であつた。

賴まれても、脅かされても、この決心はもう動かなかつた。畫家にならう、どんなことがあつても官吏にはなるまいと思つた。

然るに、年を經るにつれてだんだんと建築に對する興味が湧いて來た。これはどうも不思議なことであつた。

勿論、その頃の自分はこれを別に不思議と思はず、圖畫の才能を有する者が建築を好むのは當然だと考へ、自分がだんだんと藝術家らしくなることを祕かに喜んでゐたのである。

他日、何もかも一變するであらうとは思ひも及ばぬことであつた。

卐

職業の問題は意外に早く解決することになつた。

自分が十三歳の時に突然に父が亡くなつたのである。至つて丈夫な人であつたが、卒中で倒れて、そのまゝ苦しみもせずに息を引き取り、自分等を悲しみの淵に沈めたのであつた。子供のために衣食の資を造り、父の經て來たやうな苦しい目に遭はぬやうにしておいてやることが父の念願であつたが、それもまだ成就してゐなかつたやうである。併し、その頃の父にも自分にも分らう筈のなかつた未來のために、父は無意識にせよ既に幾つかの種子を蒔いておいて呉

れたのであつた。

父の亡くなつた後でも見かけでは差し當り何の變つたこともなかつた。

勿論、母は父の遺志を繼いで自分を官吏に育てたかつたらしいのである。併し、どんなことがあつても役人にはなるまいといふ決心は前にもまして强くなつてゐた。中等學校の教材や教育の仕方が自分の理想に遠ざかるにつれて、學業に對しても益〻無頓着になつた。さうかうするうちに自分は突然病氣になつた。考へて見ると、この病氣は自分を助けて呉れるために起きたやうなもので、將來のことも、家の中の長い間のいざこざもお蔭で僅かの間に解決してしまつたのである。自分は肺をひどく惡くしてゐた。そこで、醫者は母に向つて、自分を決して役所に勤めさせないやうにと懇ろに忠告した。實科學校の方も少くとも一年間は休學しなければならなかつた。久しく心で願ひ、そのために絶えず爭つて來たことがこの事件によつて俄かに殆んどひとりでに實現するに至つたのである。

自分の病氣を心配した母は、たうとう自分が實科學校を退つて美術學校に入ることを許してくれたのである。

夢のやうな樂しい日がやつて來た。そしてまた、實際に、この樂しい日は一睡の夢に終らねばならなかつた。二年の後に母が死んで、自分の樂しい計畫はすべて悉く慘めに碎かれてしまつたのである。

母は苦しい永患ひで亡くなつた。初めから癒る見込はなかつたのであるが、それでも母の死によつて自分の受けた打擊はひどかつた。父に對しては敬ふだけで親しめなかつたが、母に對しては甘へてゐたのである。

さて、自分は貧乏と無情な現實とに直面して否でも應でも愚圖々々してゐられなくなつた。父の遺產は多少あつたが母の重い病氣で殆んど消えてしまひ、役所から貰ふ扶助料は唯だ生きてゆくだけにも足りなかつた。そこで、どうにかして自活の道を講じなければならなくなつたのである。手には着物や襦袢を詰めた鞄を提げ、胸には不動の決心を祕めながら自分はウィーンに向けて出發

した。五十年前に父の贏ち得たところのものを自分も運命の手から奪ひ取らうと思つたのである。自分も亦『一かどのもの』にならうと思つたのである。——唯だどんなことがあつても官吏にはなるまいと思つた。

註1　ヨハン・フィリップ・パルム　一八〇六年に『ドイツの屈辱時代』と題する本を書いてナポレオンを痛罵したためフランスの軍法會議で死刑を宣告せられ、一八〇六年八月二十六日ブラウナウ町で銃殺せられた。（譯者）

註2　レオ・シュラーゲター　一九二三年、佛軍のルール進入に際してデュッセルドルフ、ドゥイブール間の鐵道を爆破し、ドイツ官憲のため現場で逮捕せられて佛軍に引渡され、一九二三年五月二十六日『ドイツは生きねばならぬ』といふ言葉を殘して處刑せられた。（譯者）

註3　ルードウィヒ・ベッチュ　一九三九年版にはレオポルド・ベッチュとあり、佛譯版及び伊譯版でもさうなつてゐるが、英譯版にはルードウィヒ・ベッチュと出てゐる。（譯者）

第二章　ウィーン苦學時代

自分の運命は母の亡くなつた時に既に決定してゐたといつていい。

母がまだ病氣で寢てゐた頃、自分は美術學校の入學試驗を受けるためにウィーンへ行つたことがある。苦もなく合格し得るものと思ひ込んで、日頃描き溜めておいた澤山の圖畫をかゝへて出かけたのである。實科學校でも圖畫は自分が學級で一番上手であつた。その頃から見れば技倆はずつと進んでゐたから、自惚も出て、高慢にも暢氣千萬に樂觀しきつてゐたのであつた。

それでも、唯だ一つ時折り氣になることがあつた。一口に圖畫の才能といふが、自分のは果して繪畫の才能であらうか。どうも製圖の才能、特に建築方面の才能の方が優れてゐさうに思はれてならぬのであつた。繪畫は勿論好きであつたが、それと並んで建築の方がだんだんと面白くなつて來たのである。まだ

十六歳になるかならぬ頃、自分は見物のため初めてウィーンへ行つて二週間ほど逗留したことがあつた。その節、帝室博物館へ繪畫を見に行つたが、殆んど博物館の建物ばかりが眼についた。來る日も來る日も、朝早くから夜遲くまで名所見物をして歩き廻つたが、何處でも何時でも、先づ目に留つたものは建築であつた。何時間も劇場の前に立ち續けてその建物を眺めてゐたこともあり、何時間も議事堂を見あげ見おろして感歎してゐたこともある。立派な建物の立ち並ぶ環狀道路はまるで一千一夜の魔法で出來たもののやうに思はれた。この時から建築に對する興味が急激に深くなつたやうである。

さて、自分は再びこの美しい都へ來た。そして試驗を受けてその結果をまだかまだかと待ち兼ねてゐたが、高慢に自惚れて合格は確實と思ひ込んでゐたのであるから、落第の通知はまるで青天の霹靂であつた。信じられなかつた。併し、確かに落第したのである。そこで校長に會つて、美術學校の繪畫科へ入れて貰へなかつた理由を質ねると、校長は自分が差し出した澤山の圖畫から判斷

して、確かに畫家は不向きで、建築の方に才能があるらしいから、美術學校の繪畫科よりも建築科に志望するがよからうと言つて呉れた。今まで建築の學校へ行つたことも教育も受けたことも無いといつても信用して呉れなかつたのである。

がつかりしながら、自分は生れて初めて自分で自分に愛想をつかしつゝシラー廣場のハンゼン宮（註1）を出た。自分はそれまで理由の分らぬ煩悶に苦しむことが度々あつた。今にして思へばそれもやはり自分の才能に關した心の迷ひであつたのである。校長から言ひ聞かされてそれがはつきり分つて來た。

自分も漸く建築の方に天分のあることを悟つたのである。

勿論、前途は極めて困難であつた。今まで反抗心から實科學校で懶けて來た罰が當りだしたのである。美術學校の建築科へ入るには工藝學校の建築科を出てゐなければならず、工藝學校へ入るには中等學校を卒業してゐなければならぬ。然るに、自分にはこれ等の條件がまるで缺けてゐたのである。從つて、自

分の夢を實現して藝術家になることは常識から判斷してまづまづ出來ない相談であつた。

かやうなわけで、母の死後にウィーンへ出かけて行つたのは自分としては三度目であつたが、今度は何年かそこで暮すためであつた。心もその頃には既にだんだんと落ち着いて來てゐた。持ち前の强情も戻つて來て、それからはもう目標を見失はぬやうになり、どうしても建築家にならうと決めてゐた。困難はあらうが、困難に屈しなければならぬ筈はなく、打ち克てない困難はなからう。障碍にぶつかると自分はいつでも父の面影を想ひ浮べた。父は田舍の貧しい靴屋の小僧から身を起して役人になつたのである。それに較べれば自分の境遇はずつと樂であり、ずつと奮鬪し易くなつてゐた。今から考へると、その頃冷酷な運命と思はれたことも、まことは攝理の叡智にほかならなかつた。苦勞に揉み潰されさうになる度毎に、負けぬ氣がいよいよ强くなり、これによつて遂に勝利を收め得たのである。

自分は剛毅な人間になつた。將來も不屈な人間で押し通し得るであらう。これも皆當時の苦勞の賜物である。併し、これにも增して尙ほ有り難いことは、この時代に天が自分に安易空虛の生活を與へず、自分を溫かな母の懷から奪ひ去つて、辛い悲しい貧苦の世界に投げ込んで呉れたことである。自分はこれによつてどん底の生活を知るやうになり、後にどん底の人々のために鬪ふやうになつたのである。

卐

ドイツ民族の生存を危くするものが凡そ二つある。マルクス主義とユダヤ主義とがそれである。この二つの禍に對して眼があいたのもやはりウィーン時代のことで、それまでにもマルクス主義とかユダヤ主義とかいふ名は聞いてゐたが、それがどんな恐ろしいものであるかは少しも知らずにゐたのである。

世間普通には唯だ歡樂境と思はれ、飽滿した人々の遊與所と思はれてゐた

ウィーンの都も、自分には、殘念ながら一生を通じて最も慘めな時代の生々しい思ひ出の地に過ぎないのである。

今日でもなほウィーンは自分の胸中に唯だ暗いことばかりを喚び起こす。この豪奢な都の名を聞けば直ちに五年の貧苦を思ひ出すのである。五年の間、初めは手傳ひ人夫として、次には小さな畫工として働かねばならなかつたが、稼いで得たところは毎日の空腹を充たすに足りなかつた。空腹は當時の自分の忠實な番人であつた。決して自分から眼を離したことがなく、いつでも律義に附き添つてゐた。一冊でも書物を買へば食事を控へねばならぬし、一度でもオペラを觀に行かうものなら、それこそ幾日も幾日も空腹をかゝへてゐなければならなかつた。自分はこの無情な番人と絶えず戰つた。それでも、生涯のうちで一番勉强の出來たのはこの時代であつたやうに思ふ。志望の建築術や、食べるものを割いて稀に觀にゆくオペラを除けば、讀書が唯一の樂しみであつた。

自分はこの時代に非常に澤山の書物を讀んだ。それも熟讀し精讀したのであ

る。仕事の餘暇はすべてこれを勉强にふり向けた。かくして數年の間に出來上つたのが、今日でもなほ自分の糧になつてゐるところの知識の基礎にほかならぬのである。

それだけではない。

自分の現在の行動に磐石の基礎を與へてゐる世界觀や人生觀が出來あがつたのもこの頃のことである。自分としては、この頃に出來あがつた世界觀や人生觀に後からほんの少しばかり添足する必要を認めただけで、變更を加へる必要はこれを認めなかつた。今日でも認めてゐないのである。

惟ふに、獨創的な思想といふものは原則として青年時代に現はれる。元來、老年の智慧と青年の獨創とは區別すべきもので、老年の智慧は多年の生活の經驗の結果であるから周到と愼重とを極めてゐるが、青年の獨創は色々な思想や觀念があとからあとからと湧いて來る。纒めることも練ることも出來ぬほど豐かに流れ出て來るのである。この流れ出て來るものの中に一生の思想の根柢と

なるものが含まれてゐるのであつて、謂つてみれば青年の獨創は建築の材料と將來の計畫とを提供するものであり、老年の智慧はこの中から適材を取り出しこれを切り整へて建築するものである。勿論、所謂老年の智慧が青年の獨創を抑へつけてしまつては何にもならない。

自分の世界觀や人生觀も、その根本はかくして自分の若いウィーン時代に出來あがつたのである。

卐

父母の家にゐた頃の自分の生活は世間一般の生活と殆んど同じであつた。何の屈託もなくその日を送つて翌る日を迎へてゐたのである。社會問題といふものは無いも同然であつた。

少年時代の自分の環境は所謂小市民層から出來てゐて、職人や人夫などの世界とは殆んど何の緣もなかつた。たいした財產もない小市民と裸一貫の勞働者

とは互に仲が惡い。これは如何にも可笑しなことであるが、併し事實で、而もこの反目は往々世人の考へてゐるところよりもずつと甚しく、殆んど敵對關係に近いのである。どういふわけでこんなことになるかといふと、小市民の中には勞働者仲間から這ひ上つてまだ間も無い人がゐる。さういふ人にはまたもとの賤しい身分へ轉落したくないといふ氣持があり、少くともさういふ身分のものと見做されるのを恐れる氣持がある。その上に、尙ほ、下層階級の野蠻な生活や亂暴な交際などに就いて色々な不快な記憶もあらう。這ひ上つたとはいつても社會上の地位はまだ低いのであるから、やつと脫け出して來た低い文化や生活に再び接觸すれば、忽ち元へ引き戻されさうで堪へられない。そこで成るべく勞働者へ近づくまいとするやうになるのである。身分の高い者の方が所謂『成り上り者』よりもこだはりの無い樂な氣持で最下層の人へ近づき得るのもこれがためである。

成り上り者といふのは、つまり自力によつて從來の社會的地位から更に高い

地位へ進んだもののことである。ところが、かやうな生活闘爭は概ね非常に苛烈であつて同情心を枯死させてしまふことが多い。世路は苦痛に充ちてゐるから、心に落伍者の不幸を憫むだけの餘裕がなくなるのである。

自分はこの點に於て惠まれてゐた。卽ち、自分は、曾て父が一生かゝつて棄て去つた貧苦の世界へ突き戻されたが、お蔭で狹い小市民的な教育の眼隱しを取り去ることが出來たのである。自分は初めて人間といふものを識り、空虛な假相や粗野な外觀とその內實の本性との區別を知るやうになつた。

前世紀の終る頃から旣にウィーンは社會的に面白からぬ都になつてゐた。

ヴィーンは輝しい富裕と慘めな貧乏とがめまぐるしく入り交つてゐる所であつた。都心や都心に近い地區では、人口五千二百萬を擁する大國の脈動が多民族國家の怪しげな魔力と共に感じられた。人目を奪ふ絢爛華麗の宮殿が宛ら磁石の如くに國內の隅々からあらゆる富や知識を吸ひ寄せてゐた。それにはハップスブルグ帝國の强力な中央集權といふものも働いてゐたのである。

雜多な民族を一つに纏めて固く結束することが出來たのは、專らこの中央集權のお蔭である。併し、また、高等の官衙といふ官衙がむやみに首都に集中するに至つたのもやはりこの中央集權のお蔭であつた。

ウィーンは、單に政治や文化の中心であつたばかりでなく、經濟方面に於てもオーストリアの中心であつた。高級の將校も官吏も藝術家も學者もこゝに集つてをれば、勞働者も數多く集つてをり、貴族や商人の裕福な生活もあれば貧者の悲慘な生活もある。環狀道路に立ち並んだ宏壯な邸宅の前には數千の失業者が徘徊してをり、凱旋道路の下には澤山の宿無し者が下水の薄暗い隅にうごめいてゐた。

ドイツ人の町でウィーンほど社會問題の研究に都合のよい所はなかつた。併し、思ひ違ひをしてはいけない。社會問題の『研究』は唯だ上から見おろしただけで出來るものではないのである。毒蛇に締めつけられたことの無い者にはその毒牙の恐ろしさは分らぬ。分らぬから皮相な空談を事とし、輕薄な感傷に

耽るやうになる。然るに、社會問題の研究には空談も感傷も共に有害である。空談に走れば問題の核心に徹し得ず、感傷に耽れば問題の核心を避けざるを得なくなるからである。幸運に惠まれた人や、自力で出世した人の中には下層社會の貧苦に對して無頓着なものが多い。これも勿論良くないが、流行の着物にくるまりながら『民衆と苦樂を共にする』といつて、高慢で、厚かましくて、無作法な伊達女が如何にも慈悲深げに如才なく振舞ふのも世間を毒するものである。何れにせよ、かやうな人は、その叡智の無い頭腦で考へてゐるところよりも甚だしい罪を犯してゐる。さればこそ、その社會問題に關する『信念』を實行に移した場合の結果は、本人が吃驚するほど常に空虛であり、却つて反感を唆り、擯斥を招くことさへある。そこでまた、かやうな人から見れば民衆は恩を知らないものといふことになるのである。

社會運動といふものはこんなものではない。恩や慈善を施すのでなく、正義を回復するのが目的であるから、感謝など要求すべき筋合のものではない。然

るに、所謂慈善家にはこれがなかなか分らぬのである。

自分はこんな過を冒さずに濟んだが、それは自分が下層社會の苦艱の中に投げ込まれて、社會問題を『研究する』どころでなく、身を以て毎日體驗せざるを得なかつたからである。自分は自ら實驗臺に上つたやうなものであつたが、幸にして無事に手術に堪へることが出來たのであつた。

卐

當時の體驗をこゝで悉く述べることはとても出來ないから、最も大切で特に印象の深かつたものだけを、それから抽き出した幾らかの教訓と共に併せて述べることにする。

卐

その頃の自分は勿論熟練工でなく、所謂手傳ひとして、時には臨時雇ひとし

でその日の糧を稼いでゐたに過ぎぬのであるから、仕事を見付けるのは大抵の場合さほど困難でなかつた。

新しい世界の中に新しい生活を打ち建てて新しい故郷をつくらうとする決意の下に、着物の裾からヨーロッパの塵を拂つてアメリカに渡つた人は、古來の偏見から脱却して職業や身分の差別を忘れ、環境や傳統からも解放せられて、惡事でさへなければ勞働は如何なる種類のものでも決して恥づべきでなく、職業に高下はないといふ考へ方に徹底して、眼の前へ出された仕事なら何でも喜んでやつて退けてゐるが、自分もさういふ氣持になつて、まつしぐらに新しい世界へ飛び込み、新しい道を切り拓いてゆかうと決めた。

間もなく、仕事といふものは探せばいつでも有るものだといふことが分つたが、同時に、仕事といふものは失はれ易いものだといふことも分つた。

その日の糧を得る途の不安が、自分の新しい生活に對する最も大きな脅威であることも、間もなく分つたのである。

なるほど『熟練』勞働者は、不熟練勞働者ほど頻繁に街頭へ放り出されることはなからうが、それでも失業しないとは限らぬ。仕事が無くて飯が食へないといふやうなことはないにしても、工場の閉鎖といふこともあれば、同盟罷業といふこともあるのである。

かやうな收入の不安が生活全體に對して非常な惡影響を及ぼすのである。

仕事が樂らしいとか、いや、實際に樂だとか、勞働時間が短いとかいつて田舍から都會へ出て來る者がある。中でも都會の華かな光に眼がくらんで出て來る者が最も多い。併し、これ等の青年はまだ幾らか田舍の安定した生活に慣れてゐる。田舍では勞働者が不足してゐるから、失業狀態が久しきに亙るといふことはまづ殆んどない。從つて生活は比較的に安定してゐる。それ故、都會へ出て來た當座は、これ等の青年は仕事を變へるにも新しい職場が見つからなければ舊い職場を棄てないのが普通である。ところで、都會に出て來る若者は田舍に殘つて律義に百姓で暮す者よりも初めから質が惡い、と考へるのは間違ひ

で、事實はむしろ反對である。經驗によると、村を出てゆく者の方に健康で元氣な者が多いのである。『村を出てゆく者』の中には、アメリカへ渡る者もあれば、未知の都會へ移る者もあるが、かやうな若者も村を出る時にはどんな苦勞にも負けまいと覺悟を決めてゐるのである。大抵は、幾らかの金を身につけて都會へ出て來るから、不幸にして差し當り仕事が見つからなくても、最初から絶望落膽するには及ばないのである。併し、折角見つけた職場を間もなく失はねばならぬとなると、事は漸く面倒になる。新しい職場を見つけることは容易でない。特に冬季では甚だ困難である。それでも初めの間は、勞働組合の金庫から失業手當を貰つたりしてどうにかやつてゆけるからまだよいが、やがて身につけてゐた金も盡き、失業が長く續いて組合の補助も無くなると、生活の苦勞がひしひしと迫つて來る。空腹を抱へて街頭をうろつき、僅かばかりの持物をも質に入れたり、賣り飛ばしたりして急場を凌ぎ、身なりもだんだんわびしくなり、惡い仲間へ沈淪して身體ばかりか心まで墮落してしまひ、遂に宿るべ

き家もなくなる。これが冬季のことででもあれば、それこそ惨めで目もあてられないが、意地の悪いものでかういふことは冬季に多いのである。やつとのことで再び何かの仕事にありついても、運命は同じことを繰り返す。またしても同じ打撃を受け、三度目には恐らくもつと酷い打撃を受ける。かうして何度も失業を重ねてゐるうちに、安定のない生活に對してだんだんと平氣になる。習ひが性になるのである。

かくして人生觀が變つて來ると、もともと勤勉であつた青年もだんだんと墮落して、下等な利益のために他人を利用せんとする人の道具になる。罪なくして業を失ふことも度々あるから、失業の度數などはどうでもよくなり、罷業が經濟上の權利を獲得することを目的とせず、國家を破壞し、社會を破壞し、一般文化を破壞せんとする陰謀である場合でも一向に平氣でこれに參加する。卽ち、罷業狂とまではならぬでも罷業など平氣で行へるやうになるのである。

自分はかやうな過程を到る所で目擊した。そして、澤山の人間をやたらに牽

きつけて置きながら、それを無殘にも壓し潰してしまふ大都會なるものにいよいよ深い反感を覺えざるを得なかつた。

誰も田舍から都會に來た當座は慥かに國民の一人であつたが、都會に住んでゐるうちに國民の一人たることを忘れてしまつたのである。

自分も生活のためにこの世界的大都市ウィーンの中をうろつきながら、勞働者の不安な運命をしみじみと體驗した。就職から失業へ、失業から就職へ、とめまぐるしく移つてゆき、收入があると思へばまたすぐ無くなつてしまふ。これが勞働者の生活であるから、貯蓄しようとか、分際を守らうとかいふ氣持はまるでなくなつてゐる。身體もかういふ生活に慣れるものと見え、金のある時には贅澤をし、金が無くなれば空腹を抱へて我慢する。ところが、腹が空いて來ると、裕福な生活の有樣が消しても消えぬ蜃氣樓の如く眼前に現はれる。色色な夢を描き出す。その夢がいつの間にか夢でなく憧憬になる。食べたいと思ふ。腹一杯食べたいと思ふ。殆んど病的に、たゞもう食べたいのである。そこ

で、どうにか仕事にありついて金が手に入ると、自制も何もあつたものでなく、今度就職したらもつと節度のある生活をしようと考へて組み立てねた計畫も忽ち駄目になつて、その日その日を存分に樂しまうとするやうになる。分際を忘れるから僅か一週間の家計すら立たない。それでも最初は、一週間の給金を五日に分けて使つてゐるが、やがて三日で使ひ、一日で使ひ、遂には、貰つた給金をその日の晩に使ひ果してしまふやうになるのである。

中には妻子のある者もある。ところが、この妻子がまた、大抵はかやうな生活に染つてゐてだらしがないのである。

亭主が氣が良くて妻子に對して目が無い場合には特にさうで、一週間の給金は二三日の間に費ひ果されてしまふ。金のある間は家中のものが揃つて飲み食ひをし、金が無くなると、また皆で空腹を抱へて暮す。さういふ時には、女房が、こつそりと隣り近所で工面して來たり、商人に借りたりして急場を凌ぎながら、佗しいその日その日をどうにか過してゆくのである。晝飯時には皆が粗

末な食卓につき、時にはまるで何も食べないこともあり、次の給料日を待ちかねながらその日のことを語りあひ、色々な計畫を樹てる。腹を空かせながらやがて再び來るべき幸福を夢みるのである。

このやうにして子供等も幼少の頃から貧苦の生活に慣らされる。

ところが、亭主が最初から自分勝手に振舞ひ、女房が子供のためを思つて亭主の我儘に反對すると、そこに甚だ慘めなことが起きる。喧嘩や口論が絶えない。亭主はだんだんと女房から離れてますます酒にひたり、土曜にはきまつて泥酔するやうになる。女房にしても子供にしても生きてゆかねばならぬから、女房は少しでも金を亭主から取りあげねばならぬ。大抵は工場から酒場へ行く途中に待ち伏せして取りあげるのであるが、それには摑み合ひもやらねばならぬのである。終には、亭主は日曜か月曜の晩でないと歸つて來なくなるが、歸つて來ても泥酔してゐて手がつけられず、おまけにきまつて懐中無一文であるから、大抵の場合そこには世にも慘めな光景が繰り展げられるのである。

自分はいやといふほどかやうな實例を見て來た。初めは胸が惡くなるほど不快で、腹立たしくさへ思つたが、後にはこの痛ましい悲劇を理解し、その深い原因を會得するやうになつた。所詮は社會の事情が惡いのである。

當時の住宅の有樣もひどいもので、ウィーンの貧民窟の如きは悲慘を極めて寧ろ怖るべきものがあつた。穴倉のやうな陰氣な住宅、木賃宿や合宿所、胸の惡くなるやうな不潔、不淨、その暗澹たる有樣を想ひ浮べると、今でも身の毛のよだつのを禁じ得ない。

こゝに住んでゐるものは人間でなくて奴隷の群である。それでもこれが陰氣な穴倉にゐる間はまだよい。これが若し解放せられて無分別な社會へのさばり出ようものなら一體どうなるか。

敢て無分別な社會といふ。

今の內にかやうな生活を何とかしなければ、早晩必ずとんでもないことになる。それにも拘らず社會はこれに氣がつかない。叡智を失つてゐるから萬事を

成行きにまかせて危險に想ひ到らぬのである。

今日から考へると、かやうなどん底の社會を學校として與へられたことは自分にとつて非常な幸福であつた。此の學校では嫌ひな科目をも懶けるわけにゆかなかつた。自分はこゝで急速に、而も根本から教育せられたのである。

當時、自分の周圍にゐた人間はすべて度し難い連中であつたが、それでも附き合つてゆけたのは、かやうな連中の生活とその原因との區別を知つたからで、これを知つて初めて彼等に對する同情を失はずに辛抱することが出來たのである。不幸も悲慘も、不淨も墮落も、考へて見れば當人のせゐでなくて社會の罪である。その上、自分の生活も樂でなく、苦しいことが多かつたからつまらぬ感傷にひたる暇もなく、徒らに同情したり、墮落を責めてばかりゐるやうなことにもならずにすんだのである。

いや、それどころではない。

その頃、既に、自分はかやうな狀態を改良する方法が一つしかないことを看

て取つてゐた。卽ち、深い社會的責任感を以て人生の進步發展のためにもつと立派な基礎を打ち建てるべきで、惡性の邪魔物はこれを容赦なく排除しなければならぬ。非國家的な勞働者は斷乎としてこれを取締るべきである。

自然は既成のものを維持するよりも、種の相續者たるべき未成のものを養育することに努める。人間の社會に於ても同じことで、既に惡に染つたものを强ひて良くしようとしても、それは人間の資性からいつて九分九厘まで出來ないことであるから、寧ろ來るべきもののために健實な發展を保證しておいてやる方が大切である。

凡そ慈善は滑稽で無益な夢想である。社會運動は慈善運動ではない。人間が墮落し、又は少くとも墮落に誘はれるのは經濟生活や文化生活の組織の根柢に缺陷があるからで、社會運動の使命はこの缺陷を除去することでなければならぬ。

かういふことがウィーンに於て生活の苦鬪を續けてゐる頃に既に自分には分

つてゐた。

非國家的な罪惡を犯す勞働者に對しては斷乎たる處置を講じなければならぬが、それがなかなか出來ないのは、要するに、かやうな時代現象の動機や原因に關した判斷があやふやだからで、判斷があやふやなわけは、內心で社會の墮落に對する幇助の責任を感じてゐるからにほかならず、そこで、堅い眞面目な決心がつかず、國家の存立が要求する大切な處置を實行するに當つても必ず動搖して中途半端に終るのである。罪惡意識の影がささなくなつて初めて、心も落ち着き、大膽に邪魔な小枝を剪り捨て、容赦なく雜草を拔き去り得る力も出て來る。

オーストリアは、社會正義や、社會立法に就いて殆んど知るところが無かつたから、惡性の邪魔物を排除するのにも思ひきつたことが出來なかつたのである。

卐

當時の自分は仲間の勞働者の經濟上の窮乏にも驚いたが、道德上の墮落にも驚き、精神上の敎養の低級にも驚いたものである。

こゝに哀れな浮浪人がゐて、自分はドイツ人で有らうと無からうとどうでもよい、食つて行けさへすればそれで結構だ、などと放言したら、ドイツのブルジョアは恐らく憤慨せずにゐられなからう。そして、かくの如き『國民的矜持』の缺如を痛烈に非難し、かくの如き心根に對する憎惡を切實に發表するであらう。

併し、さういふブルジョアの立派な心根は一體どうして出來たか、といふことを自問し反省するものが果して幾人ゐようか。

文化や藝術のあらゆる方面に祖國の成就した偉大な業績がある。この數々の業績を思ひ出すからこそ、かくも惠まれたる國民の一人たるを誇り得るのでは

ないか。然るにドイツ人の中に祖國の歴史をよく理解してゐるものが果して幾人ゐようか。祖國があらゆる方面に於て偉大であることを知ればこそ祖國を誇り得るのだといふことに氣の付いてゐるものが果して幾人ゐようか。

『大衆』が祖國を誇り得ないのは誇り得るやうにして貰つてゐないからである。ドイツのブルジョアはこれを忘れてゐる。或は、誇り得るやうにして貰つてゐない、即ち祖國の歴史を正しく知らせて貰つてゐない、といふことでは外國の勞働者も同じではないか、然るに拘らず、外國の勞働者はその國民性を失つてゐないでないか、と言ふ者があるかも知れぬ。併しそれは瞞着である。よしんばさうであつても、それは非國民的な浮浪人をそのまゝに放任しておいてよい理由にはならない。況して、事實はさうでないのである。例へばフランスに於ける所謂『熱狂的愛國主義』の教育であるが、これも所詮は文化(Kultur)或はフランス人の所謂『文明』(Zivilisation)のあらゆる方面に於てフランスの偉大であることを極端に强調するものに他ならぬのであつて、フランスの青年

は、政治や文化に於ける祖國の業績に關する限り、客觀的に物を見ず、極端に主觀的に考へるやうに教育せられるのである。

勿論、かくの如き教育は、一般的な大方針に限局すべきもので、要すればこれを絶えず反復して國民の記憶や感情に刻み込まねばならぬ。

然るに我が國では、かやうな教育を施さず、卽ち消極的に懶けてゐるのみならず、學校で折角學び得た極く僅かなものをさへ積極的に壞してゐるのである。國民の政治的中毒といふ鼠がこの極く僅かなものをさへ大衆の心や思ひ出の中から引き出して來て食べ荒すか、さもなくば貧苦がこれを壓し潰すのである。

試みに想像して見よ。

陰氣な二室しかない貧民長屋に七人家族の勞働者が住んでゐる。五人の子供の中には三歳の小兒もゐるとしよう。三歳といへばもう物心のつく頃で、頭腦の良い者ではこの時代の思ひ出はずつと老年に至るまで殘るものである。部屋

が狹くて人が多過ぎるのであるから、それだけでも碌なことのあらう筈がなく朝から晩まで喧嘩ばかりである。お互に助け合ふのでなく、抑へつけ合つて暮すのである。喧嘩しても家が廣くて身をかくす所がありさへすれば、ちよつと離れてゐるうちに納まつて、自然に仲直りが出來るものであるが、顏と顏とをつき合せてゐては、止んだかと思ふとまた始まり、氣持がだんだんにこぢれて遂に解けなくなつてしまふ。それでも、子供同志の場合はまだよい。子供は絕えず喧嘩をするが、直ぐにまたきれいに忘れてしまふものである。併し兩親の場合は厄介なことになる。夫婦が子供の前で殆んど毎日のやうに至極野蠻な喧嘩をするのである。この實物教育の結果が子供の上に徐々にせよ必ず現はれて來ることは間違ひない。喧嘩が何時か形を變へて、亭主が女房をいぢめたり、或は酔つぱらつて女房を毆つたり蹴つたりするやうなことになれば、こんな所に育つ子供の行末はどんなことになるか。これはかやうな環境を知らぬ者には想像もつかぬことであらうが、憫れむべき子供は僅か六歳にして既に大人でさ

へ嫌惡するやうな事柄を覺えるのである。それでも小さな『國民』として國民學校へ入るが、心は既に蝕ばまれ、身體は榮養不良で弱く、頭腦の發達も遲れてゐるから讀み書きを覺えるのがやつとのことである。家庭で教へて貰ふなどは思ひもよらず、寧ろ家庭では、母親や父親が子供の前も憚らず、あられもない言葉で先生や學校の噂話をし、子供に行儀や道理を教へずに野卑なことばかりを聞かせる。すべて子供が家庭で聞くことには世間に對する敬愛の念を促すものは一つもない。一般にかやうな社會では、人間の美點は何一つ認められず、下は教師から上は國家の元首に至るまで、制度といふ制度はすべて悉く惡口の的になる。宗教も、道德も、國家も、社會もすべて一律に罵られ、下劣尾籠な言葉によつて汚されるのである。だからして、子供は十四歳で學校を出る時には、すつかり莫迦になつてをり、無知なことは驚くばかりであるが、その振舞に於ては既に一人前になつてをり、見るものが怖毛をふるふほど不道德で鐵面皮で墮落し果ててゐるのである。

神聖なるもののあるを認めず、偉大なるもののあるを學ばず、唯だ下劣なる生活のみを知つてゐる人間が世の中へ出てゆくのである。一體どうなるであらうか。

三歳の童兒は十五歳にして既にあらゆる權威を侮蔑する痴れ者になつてゐる。子供は唯だ卑猥、汚濁を習ひ覺えただけで、高尚な感激をそゝるやうな何物をも學ばなかつたのである。

子供はかくして人生の高等學校に入る。

そこに始まる生活は子供の頃に父親から習ひ覺えたのと同じものである。彼方此方をうろついて、家へもろくろく寄りつかず、氣に入らなければ曾て自分の母親であつた哀れな老婆をなぐり飛ばし、神をも世界をも呪ひ、終には何かの罪を犯して感化院へ送られ、そこで最後の研磨をかけられて立派な惡黨になる。

お芽出度いブルジョアは、かやうな少『國民』に『國民的感激』がないのに

驚き、劇場や、映畫館や、三文文學や、赤新聞が毎日々々色々な害毒を夥しく世間へ流し込むのを見て、今更の如く、大衆の『道德的內容』の貧弱や『國民的無關心』に驚いてゐる。祖國の偉大な姿を知るやうにさせて呉れるものが際物映畫や赤新聞であるかの如くに考へて、子供時代の教育を全く無視してゐるのである。

自分はそれまで全く氣付かずにゐたところのことを此の當時に急速に根本から理解するに至つた。それは何かといへば、大衆を『國民化』するには、就中健全な社會關係を建てて各人に教育の機會を與へねばならぬ、といふことである。家庭や學校の教育で、文化や、經濟や、就中政治の方面に於ける祖國の偉大な姿を知ればこそ、その國民の一人として生れたことを心から誇り得るのである。誰でも己れの愛する者のためにのみ戰ひ、己れの敬ふ者のみを愛し、少くとも己れの知る者のみを尊び得るのである。

卐

社會問題に對する興味が湧くと共に、自分はそれを徹底的に研究し始めた。すると、それまで知らなかつた新しい世界が眼前に開けて來た。

一九〇九年から一九一〇年にかけて、自分の境遇も多少變つて來た。自分は最早やそれまでのやうに手傳ひや臨時雇ひでなく、既に獨立した少年畫工として働いてゐたのである。收入が少くて生活は困難であつたが、自分で選んだ仕事であるだけに愉快で、それまでのやうに、夕方職場から歸つて來ても疲れ切つてゐて書物を讀まうとしても直ぐ居眠りを始めるといふやうなこともなく、また、今度の仕事は將來の職業と緣のないものでもなかつたから、働き甲斐もあり、時間も自分の思ふまゝに都合をつけて有效に利用することが出來たのである。

自分は生活のために働き、樂しみのために勉强した。

自分は既に社會問題に就いて色々の實物教育を受けてゐた。足りないのは理論だけである。そこで、時間の餘裕が出來ると共にこの方面の書物を漁つて讀んでは考へた。

その頃の自分は傍から見たら恐らく狂人と思はれたであらう。

社會問題を研究しながらも、その頃の自分が尙ほ建築に愛着してゐたことは言ふまでもない。音樂を別とすれば藝術の女王は建築であるやうに思はれ、建築に携はることは『勞働』でなくて無上の悅樂であつた。夜晩くまで本を讀んだり圖を引いたりしても疲れを知らぬのである。そこで、未來の建築家といふ自分の美しい夢は何年かゝるか知らぬが、何時か必ず實現するに違ひないと思ひ、自分は必ず建築家として名を成すであらうと深く信ずるに至つた。

建築に愛着すると共に、社會問題を研究してゐた自分は、政治問題にも非常な興味を抱いてゐた。併し、これは特に言ひ立てるほどのことでもないやうに思はれる。政治問題に關心を寄せるのは普通の人間なら當然のことで、政治問

題を理解せざる者には批判や抗告の資格も無いのである。それ故に、自分は政治に就いても出來るだけ書物を讀んだ。

併し、自分の讀み方は、所謂『知識階級』の讀み方と少し違ふのである。

世の中には限り無く『讀む』人がある。書物から書物へ、文字から文字へと目を移してゆくのである。併し、こんなのは必ずしも本當の『讀書人』ではない。『物識り』ではあらうが、讀んだものを消化して頭の中で整理する力が無い。書物を讀む場合には、讀みながら大切な事とさうでない事とを識別し、大切な事だけを記憶に留め、さうでない事は成るべく讀まず、或は少くとも意味の無い埋め草として讀み棄てるやうにしなければならぬ。然るに、物識りにはこの取捨が出來ないのである。元來、讀書は手段であつて目的でない。人間が各自の素質や能力の許す限りの生活を營むための手段でなくてはならぬ。讀書には卑近な生業の用に資するのと、高尚な使命のためにするのとあるが、何れにせよ、これによつて生活に必要な道具や材料を得る。これが讀書の第一の目

的で、第二の目的は世界の概觀を得ることである。勿論、書物の內容を唯だ讀んだ順序に從つて何もかも記憶してゐるのでは駄目で、內容の一つ一つが恰も切嵌細工の石片の如くに世界の概觀の中で適當な地位を占め、世界の姿が腦裡で容易に組み立てられるやうになつてゐなければならぬ。さもなくば、唯だ色色な事柄を雜然と覺え込んでゐるといふに過ぎない。かやうな知識は役に立たず、寧ろその持ち主を思ひ上らせて不幸に陷らせるだけである。かやうな人は如何にも『教養』があり、物識りで、さも人生の何たるかを解してゐるかの如く大眞面目に自惚れるが、實は、こんな『教養』を加へるに從つてますます世情に疎く、終には療養所の厄介になるやうになり、或は議會の『政客』として生涯を終る人も珍しくないのである。

『知識』の庫の中から機に臨み時に應じて必要なものを取り出すといふことは、かやうな物識りに出來ることでない。讀んだものを生活と離れて唯だ讀んだ順序に從つて整理してゐるからである。日常生活に何か事が起きた場合に、

これに對して何時か讀んだものを正しく應用しようとすれば、かやうな物識りは書物の名やら頁數までも思ひ出さなければなるまい。でないと、途方に暮れて遂に正しい方法を發見し得ないに違ひない。併し、都合よく何もかも殘らず思ひ出すといふわけにはゆきかねるから、大事に臨んで狼狽し、狂氣のやうになつて類似の場合を探す。そして、結局は間違つた處方を摑むに決つてゐるのである。

今日廟堂に立つてゐる博識の政治家が迂濶なことばかりやつてゐるのもこれがためで、でなくば素質が病的に惡いのである。或は無賴で卑劣なのである。

讀書の術を心得てゐる者は、書物を讀むにも雜誌や小冊子を讀むにも、決して唯だ漫然と讀み捨てることなく、役に立つもの、誰も知つておくべきもの、と思はれるものばかりへ注意を向け、それだけを讀んでよく覺えておくやうにする。かうして出來た知識は、既に想像によつて造り出されてゐる心象を適當に修正し、或は補足するから、心象は眞實性を增し、明瞭の度を加へるやうに

なる。そこで、生活上に俄に事件が起きて何とかしなければならなくなつた場合でも、讀書の術を心得てゐる者は少しも狼狽せず、直ちに記憶を働かして標準となるべき心象を想ひ出し、その中から、過去何年かの間に集めた材料で當面の問題に關係のありさうなものを抽き出し、それを活用して事件を處理し得るのである。

かやうに活用が出來なければ讀書も駄目である。

例へば、讀んで知つてゐるだけで活用の出來ないやうな辯士は、自分の說の方が對手の說より何倍も正しくて事實に合してゐても、反駁に對して主張し通すことが出來ない。討論の際に慘めにも記憶から見棄てられ、自說を確證しようにも、對手を反駁しようにも、その論據を發見し得ないのである。

かやうな辯士の場合では、恥をかくのも當人だけであるからまだよいが、萬一物識りといふだけで他に能の無い人物が國家の指導者になつてでもゐようものなら、それこそ災難である。

自分は若い頃から正しく讀書することにつとめたが、幸にも記憶力や理解力が十分に働いて扶けて呉れた。讀書といふことから見てもウィーンの生活は非常に有益であつた。日常生活の經驗が何もかも刺戟となつて絶えず色々な問題の研究を促したから、自分もだんだんと實際の生活に理論を與へ、理論を實際に當てはめて檢べて見るやうになり、理論に溺れたり、現實に縛られたりするやうなことがなくなつたのである。

自分が社會問題以外の二大問題に就いても、卽ちマルクス主義とユダヤ主義とに就いても根本的に研究するやうになつたのもこの頃のことで、やはり、日常生活の經驗が自分を驅り立ててこゝに至らしめたのである。

その頃、これ等の問題にあのやうに本氣にぶつかつてゆかなかつたとすれば、マルキシズムの理論や本質を會得すべき機會はそれつきり無かつたかも知れない。

卐

自分も若い頃から社會民主黨なるものを知つてゐた。併し、その知識は極めて貧弱で甚だ正鵠を失してゐたのである。

社會民主黨が無記名普通選擧のために戰つてゐるのは、自分の祕かに喜ぶところであつた。普通選擧制を採用すれば、自分の嫌ひなハップスブルグ王朝の權力は必ず衰退するに違ひないと思つたのである。オーストリアはドイツ民族を犧牲にして國家を維持しようとしてゐるが、スラヴ民族に國家を維持する能力があるかどうか甚だ疑はしく、從つてドイツ民族のスラヴ化といふ犧牲を拂つても果して生活能力のある國家が出來るかどうか分つたものでない、といふのが自分の確信であつた。だから、一千萬のドイツ民族に死刑を宣告せんとするやうな、世にも有るまじき國家の瓦解を促すものなら何でも歡迎したのである。雜多な國語が議會で喋言られるやうになれば、このバビロニアのやうな國

家の崩潰する時もだんだんと近づき、オーストリアのドイツ民族の解放せらるる日も近づいて來るに違ひなく、さすれば、オーストリアのドイツ民族は何時か再び母國に合體し得るに至るであらう。かやうに考へて自分は社會民主黨の活動に共鳴したのである。

自分はその頃なほ世間を知らなかつたから、社會民主黨は勞働者の生活條件の改善に努力してゐるものと考へ、愚かにも社會民主主義に反對せず、寧ろ贊成してゐたのである。唯だ、社會民主黨がドイツ民族の存續のために戰ふことに反對し、スラヴ人の『同志』の好意を得んとして淺ましくも媚び諛つてゐたのは非常に不快であつた。スラヴ人の『同志』は何か實利さへ見れば苟合するか、さもなくば尊大に構へて動かず、乞食の如く煩さく附き纏ふ社會民主黨を唯だ輕蔑するだけであつた。

かやうなわけで、十七歳頃の自分はまだ『マルキシズム』に就いて殆んど何も知らず、『社會民主主義』と社會主義とを同じものと思つてゐた。社會民主主

義の正體を洞察し、その前代未聞の國際欺瞞を看破するためには、やはり苦い經驗が必要であつたのである。

有體に言へば、自分は從來唯だ折々大衆の示威運動を見物して社會民主黨のことを知つてゐたに留まり、黨員の精神や主義の本質に就いては何も知らなかつた。その自分が俄に社會民主主義の教育や『世界觀』の所產と接觸することになり、普通ならば何十年もかゝるやうなことを僅か數箇月で會得したのである。社會民主主義は社會道德や博愛の假面の下に流行する惡疫であつた。人類はこれを成るべく早く世界から驅逐しなければならぬ、さもなくば人類の方が世界から追放せられてしまふに違ひない。自分はかういふことを會得したのである。

自分が初めて社會民主主義者と出會つたのは或る建築の工事場であつた。

この邂逅は最初から餘り愉快なものでなかつた。その頃の自分は、身なりもまだ幾らか整つてゐたし、言葉も崩れず、することも控へ目がちであつた。絕

えず自分の事に追はれてゐて周圍の事にかゝはる餘裕もなく、唯だ仕事を求めて口を糊し、もぱらに修養を續けようとしてゐた。それ故に若しそのまゝで進んだら、自分も新しい環境にかゝり合ふこともなくて濟んだであらうが、新しい仕事を見つけて三日目か四日目かに事件が起きて、自分も態度を決めねばならなくなつた。自分は勞働組合に加入するやうに求められたのである。

勞働組合に就いては自分はまだ何も知らず、組合は有つた方が善いのか、惡いのかそれも分らなかつたが、兎に角、加入の勸誘を受けた時、自分は直ちに辭退した。何が何だか分らぬし、それに、何事に限らず强ひられてしたくないといふのが拒絶の理由であつた。さういふ自分を直ちに仕事場から追ひ出さなかつたのは、まだ何も分らぬのなら無理もないとでも思つたのであらう、或は自分が二、三日中に軟化し改心するであらうと考へたのかも知れぬ。何れにしても組合の連中は全く思ひ違ひをしてゐたやうである。二週間後にはもう自分はかりそめにも組合へ加入しようといふ氣持になれなくなつてゐた。この間に

周圍を仔細に觀察して組合の連中のいかゞはしい有樣を看て取つた自分は、斷じて組合へ加入しないことに肚を決めた。この決心は最早や世界の如何なる權力を以てしても動かせぬほど堅いものであつた。

それから暫くの間は甚だ不愉快であつた。

正午になると、或る者は近所の居酒屋に出かけるが、他の者は仕事場に殘つて粗末な辨當を食べてゐた。殘る方は概ね世帶持で、女房が汚らしい器に食べ物を容れて持つて來るのである。週末になれば、仕事場で辨當を食べる連中がだんだん增える。その理由も自分にはずつと後になつて分つて來たが、さうなるといつも連中の間に政論の花が咲くのである。

自分は獨り隅の方に坐つて罎の牛乳を飲み、麵麭を食べながら、新しい仲間のすることをそれとなく眺めたり、自分の不幸な身の上をしみじみと考へたりしてゐた。それでも色々の事が耳に入つた。耳に入つたといふよりも、寧ろ自分に何か言はせようとして、わざと聞えよがしに話してゐるやうにさへ思はれ

た。而も耳に入つて來るのは癪に障ることばかりであつた。あらゆるものに反抗するのである。國民とは『資本家』階級――この言葉だけでも自分は何度聞いたか分らぬ――の寢語ださうである。祖國は勞働者を搾取するブルジョアの機關であり、法律の權威はプロレタリアを彈壓する手段であるさうな。學校は奴隷と奴隷所有者とを養成する制度であり、宗教は搾取せらるべき民衆の頭を麻痺させる手段で、道德は愚かな忍從の象徵であるといふ。かうしてこれらの連中はあらゆるものを侮辱した。泥の中に蹴落されて蹂みにじられぬものは全く何一つ無かつたといつていい。

初めは努めて默つてゐた自分も終には我慢が出來なくなつた。そこで、いよいよ肚を決めて口を利き始めたが、當面の問題に就いて豫め相當の知識を得てゐなければ議論をしても無駄だと悟つたから、自分はひそかに對手の連中の所謂智慧の泉を探し始めた。對手の連中の讀んでゐる書物やら小冊子やらを片つ端から讀み始めたのである。

かくして自分は仕事場で屢〻激論を戰はすやうになつた。社會民主主義に就いても自分の知識の方が對手のそれよりもだんだんと精しくなり、議論でも自分の方が常に勝つやうになると、對手はたうとう奥の手を出し、理性を最も容易に打ち負かし得る手段、卽ち脅迫や暴力に訴へるに至つた。主だつた連中がやつて來ておどかすのである。直ぐに仕事場を立ち去るか、それとも作業の足場から突き落されるか、どちらかを選べといふのである。自分は一人きりだし抵抗しても無駄だし、これも一つの經驗だと思つて仕事場を立ち去ることにした。

自分はいやな氣持で仕事場を立ち去つたが、このまゝ引下つてしまふのは如何にも殘念であつた。時が經つてどうやら胸も鎭まると、生來の强情が再び頭を擡げ出して來て、自分はまた何處かの仕事場へ行つてみることに心を決めた。一つは、僅かながら貯めて置いた金も此の間に費ひ果してその日に困り、否でも應でも働きに出なければならなかつたといふ事情もあつたのである。併

し、その仕事場でも同じやうな活劇があつて、同じやうな終結を見たのである。

自分はひそかに考へた。かやうな人間でもやはり偉大な國民の一人といへるであらうか、と。

これは厄介な問題であつた。かやうな人間でもやはりドイツ人であれば、民族のために戰ふなどはつまらぬことで、優秀な人物が無賴な徒輩のために辛酸を嘗めたり、犧牲を拂つたりしなければならぬ道理はない。併し、また、かやうな人間はドイツ人でないとすれば、我が民族には既に人間がゐないといふことになる。

自分がかやうに思ひ惱んでゐた頃、ドイツ人でありながらドイツ人であることを忘れた人間は次第に增えて、怖るべき勢力を加へてゐた。自分は不安に襲はれざるを得なかつた。

或る日、ウィーンの街頭に勞働者の一大示威運動があつた。四列縱隊がはてもなく續いて宛ら長蛇の如くうねりながら眼の前を通り過ぎて行く。自分はそ

の人々の感情とまるで違つた氣持でそれを見てゐた。息を殺しながら殆んど二時間も立ちつゞけて眺めてゐた。そして、遂に、不安で堪らなくなつて家路についたのであつた。その途すがら、或る煙草屋の店頭でオーストリア社會民主黨の機關紙『アルバイター・ツァイトゥング』(勞働者新聞)を見つけた。この新聞は、自分が時々新聞を讀みに行く粗末な喫茶店にも置いてあつたが、非常に下司な新聞で、全體の調子があまり惡どいから二分間と續けて讀むことが出來なかつた。ところが、示威運動を見てひどく憂鬱になつてゐたせゐもあらうが、ふと、此の新聞を兎に角一枚買つて讀んでみようといふ氣になつた。そこで、新聞を買つて歸つて、その夜仔細に讀んで見たのであつたが、そこに並べ立ててあるのは嘘八百であつて、自分は幾度も心の中に燃え上る憤激を抑へるのに苦しんだのであつた。

前に述べた如く、自分は社會民主主義を色々な文獻によつて研究してゐたが、社會民主黨の新聞を毎日精讀するに及んで、此の主義の正體を一層明瞭に

看破することが出來たやうである。

社會民主主義の書冊の方を見ると、自由とか尊嚴とかいつたやうな美辭麗句が到る所にあり、馱法螺を如何にも深遠な智慧らしく見せかけ、倫理道德を如何にも勿體らしく說いてある。而もそれがすべて鐵面皮にもまるで豫言者の言葉ででもあるかの如くはつきりと書いてあるのである。然るに、人類の新しい救濟を說く新聞の方を見ると、何もかも野蠻で下劣を極め、悖德の限りを盡し世にも圖々しい嘘言でかためてある。大變な違ひであるが、理論は中流や上流の愚かな『知識階級』に讀ませるもので、新聞は大衆向きに出來てゐるのである。

かうして社會民主主義の理論を說いた書冊と機關新聞とを併せ讀んでゐるうちに、自分はだんだんと大衆を見直すやうになつた。

それまでは、自分と大衆との間に越え難い溝があるやうに思はれたのであつたが、その溝が却つて前にもまして大衆を愛する機緣になつたのである。

怖ろしい毒害を敢てするものが社會民主黨であると知れた以上は、莫迦者でない限り犧牲の大衆を嗤ふことは出來ない筈である。自分は年を追うてだんだんと獨立の生活を營み得るやうになり、それと共にまただんだんと遠方から冷靜に社會民主黨の行動を眺めて、その勢力の由つて來る祕密を見究め得るやうになつた。社會民主黨では赤い新聞でなければ讀んではいけない。赤い集會でなければ顏を出してはいけない。赤い書物でなければ讀んではいけないことになつてゐる。甚だ横暴な要求であるが、實はこゝに社會民主主義があのやうに成功した原因があるのである。峻嚴で他を容れない教義でなければ決して勝利を收め得るものでないといふことが自分にもはつきり分つて來た。

一體、大衆といふものは煮え切らぬことが嫌ひである。

女といふものは、道理で動くよりも女の持たない强い力に對する憧憬で動くことが多く、それ故、弱い男を自由にするよりも强い男の自由になることを喜ぶ。それと同じく、大衆は歎願する者よりも支配する者を好み、寛仁大度より

も峻嚴な教義に內心の滿足を感ずる。自由を與へられても、大抵はそれをどうしていゝか知らず、却つて見棄てられたやうに感じ易いのである。教義が圖々しく人間の精神を脅迫してゐようが、人間の自由を蹂躙してゐようが、教義が根本から虛妄であらうが、さやうなことは大衆には全く分らぬのである。表現が教義の目的にかなひ、烈しい無遠慮な力を具へてゐて押しが强ければそれでいいので、結局、大衆はかやうな力に從ふものである。

從つて、社會民主主義を倒すには、その內容に於て社會民主主義よりも優れ、押しの强さに於てこれに劣らぬくらゐの主義を以てしなければならぬ。さすれば、鬪爭はなかなか困難かも知れぬが結局に於て必ず勝つに違ひなからう。

かくして二年も經たぬ間に、社會民主主義の教義も、その技術的手段も自分にははつきり分つて來た。

社會民主黨は、道德的にも心理的にも抵抗力のないブルジョアに對して精神的脅迫を加へるが、そのやり方がまた非常に卑劣で、彼等にとつて最も危險と

思はれる者へ一定の合圖の下に讒誣中傷の猛烈な一齊射擊を浴せかけるのである。攻擊を受けた方は神經を惱まされるから、大抵は平穩な生活を取り戻したいばかりに厭な對手へ降參してしまふ。こんなのは氣力のない莫迦者であるがそれでも平穩な生活はなかなか戻つて來ない。攻擊は何度もやり直される。狂犬のやうな對手が怖くなり、その恐ろしさが遂に暗示になつて心身の麻痺を惹き起すやうになるまで繰り返されるのである。

社會民主黨は經驗によつて力の値打ちをよく知つてゐるから、對手が世に稀れな強い者の天稟を少しでも具へてゐれば、これを猛烈に攻擊し、對手が弱い者であれば、その才能を世間の評判通りに或は愼重に或は露骨に稱揚する。

意志が弱くて氣力のない天才より、頭腦は平凡でも性格の強い元氣な人間の方が恐ろしい。だから社會民主黨は精神に於ても力に於ても弱い者を執拗に推薦するのである。

社會民主黨は、こんなことをするのが平穩な生活を維持し得る唯一の方法で

あるかの如く見せかけるが、實際はさうでない。世間が何か他の事柄に注意を向けてゐたり、或は平穏な生活を亂されるのを嫌ひ、或は事件を過少に見て何も大騒ぎをして惡い對手をわざわざ刺戟するほどのことでもないなどと考へてゐるやうな折をねらつて、社會民主黨は祕かにゆすつたり、かたつたりして、用心深く而も着々と地歩を占めてしまふのである。

この戰術は人間の弱點を精しく調べた上で工夫したものであるから、對手が毒瓦斯に對して毒瓦斯で向つて來なければ、殆んど間違ひなく成功する。氣の弱い者に對しては唯だ生きたいか死にたいかと問ひつめればいいのである。

個人や大衆に對する肉體的脅迫卽ち腕力沙汰にも意味はある。これもやはり人間の心理を精しく研究した結果であつて、決して氣まぐれなものではないのである。

仕事場、工場、集會場、民衆大會の場合などで行はれる腕力沙汰は、對手がやはり强い腕力沙汰に訴へなければ必ず成功する。

萬一強い抵抗に會はうものなら、社會民主黨は忽ち騷ぎ出し、今まで國家のあらゆる權威を輕蔑してゐたことは棚にあげて、金切聲で助けを求め、大抵の場合、一般の墮落に乘じて目的を達する。かやうな怖ろしい政黨に對してもおもねる愚かな官憲がゐて、今求められるまゝに助けておいてやれば、他日必ず引き立てて貰へるであらうといふ淺はかな希望から、社會民主主義といふ國際病に對する防壁の破壞を手傳つて呉れるのである。

かやうな遣り口は、敵味方を問はず大衆の心に深刻な印象を與へねば止まぬが、これも、民衆の心理を書物でなく實生活から學んだ人でなければ分らぬことである。勝つた方では、かうして收めた成功を恰も自分等の方に正義があればこそ收めることの出來た勝利であるかの如く見做し、敗けた方では、大抵の場合、最早や抵抗を續けても徒勞に終るものと絶望するに至るものである。

かやうにして、自分は特に惡辣な腕力沙汰を見るにつけて、だんだんとこの犧牲になつて斃れた幾千の大衆に同情するやうになつた。

自分が大衆を見直して、大衆に罪はなく、悪いのは社會民主黨で、大衆は唯だその手先に使はれてゐるに過ぎないことを知るに至つたのは、全くウィーン時代の苦難の賜物である。

社會民主黨の行動は全く瞞着であつて、大衆はその犠牲といふより他に言ひやうがない。社會の『どん底』も暗いばかりではなかつた。世にも稀な崇高なる犠牲心もあれば、義理堅い友情もあつた。非常に慾が寡いこと、控へ目で互に讓り合ふことなどは、奈落の底に輝いてゐた美德で、同じ勞働者でも所謂昔ものにはかやうな美德を具へてゐたものが多い。若いものは大都會の惡影響を受けて、かやうな美德をだんだん失ふに至つたが、それでも健實な素質によつてどん底の生活に打ち克ち得たものは少くなかつた。然るに、かやうに善良で正直な勞働者までが、政治活動では、民族の仇敵たる社會民主黨に馳せ加はつて黨の勢力を强めるに至つたのは、一つは新しい教義の害毒を知らなかつたためであるが、一つは誰からも面倒を見て貰へず、遂に社會生活の苦しさが社會

民主主義に反對することを許さなくなつたからで、詮ずる所、生活の窮迫から已むを得ず社會民主黨の陣營に走つたのである。

おまけに、ブルジョアは、從來勞働者の人間的に正當な要求に對してすら非道な而も拙劣な方法で反對してゐた。反對したところで別に何の利益にもならないのに、わけもなく反對したのである。眞面目な勞働者までが勞働組合から驅り出されて政治運動に身を投ずるに至つたのはこれがためである。

何百萬を數へるか知らぬが、これ等の勞働者も、初めは確かに內心に於て社會民主黨に背を向けてゐたのであるが、ブルジョアの政黨が勞働者のあらゆる社會的要求に反對して、幾度となく狂氣じみた態度を示したために、心ならずも社會民主黨に手を差しのべたのである。勞働條件の改善とさへいへば、ブルジョアの政黨は一も二もなく反對した。機械の災害防止裝置に就いても、幼年工の勞働制限に就いても、勞働婦人を少くとも未來の國民を懷姙してゐる間だけでも保護することに就いても、頑迷に片つ端から反對した。だからこそ、社

會民主黨もブルジョアのかやうな淺ましい心根の露はれた機會を巧みに捉へて、民衆を社會民主主義の網の中へ追ひ込むことが出來たのである。かうして政界のブルジョアが冒した過誤は取り返しのつかぬものであつた。社會の害惡を芟除せんとするあらゆる努力に反對したから、單に憎惡の種子を播いたのみならず、ドイツ民族の怨敵の言ふところを裏書きして、勤勞階級の利益を代表するものは社會民主黨の他にはないといふことを是認したやうな恰好になつたのである。

早くから社會民主黨のために重要な客引の役目を務めて來た勞働組合が道德上に存在の理由を有するに至つたのは、就中ブルジョアのかうした過誤に因るのである。

ウィーン時代は自分の修業時代であつた。勞働組合の問題に就いても、この時代に否でも應でも意見を決めねばならなかつた。

自分は勞働組合を社會民主黨の構成分子と見、黨と不可分の關係にあるもの

と思つてゐたから、意見を決めるのも雜作はなかつたが、これは誤りであつた。

言ふまでもなく自分は勞働組合に反對したのであつたが、此の非常に重要な問題に就いてもやはり運命の教育を受けねばならなかつた。その結果、自分の意見はひつくりかへつたのである。

勞働組合には、勞働者の社會的權利を擁護し、生活條件を改善する手段としての組合と、政黨が政治的階級鬪爭を遂行する道具としての組合とがある。自分は二十歳になつて初めてこの區別を知つた。

社會民主黨は勞働組合運動の大切なわけを知つてゐたから、これを道具に利用して成功を收め、ブルジョアはそれを知らなかつたから政治的地位を喪つたのである。ブルジョアは鼻の先で『拒み』さへすれば自然な發展を差し止め得るかの如く考へてゐたが、實際は不自然な發展を促したのである。一體、勞働組合運動を何か非愛國的なものと考へるのは莫迦げたことで、眞實に反する。勞働組合の追求し遂行せんとする目的が國民の中堅をなす階級の生活向上であ

る限り、その運動は非愛國的でも反國家的でもなく、寧ろ本當の意味で『國民的』といはるべきもので、國民思想の涵養に必要な社會的條件を造り出すに與つて力があり、また社會的な癌を芟除し、心身の病源を退治して民族一般の健康に資するところが多いのである。

それ故に、勞働組合の必要なるは論を俟たぬところである。

傭主の中に社會問題に對する理解に乏しく、正義や公正の觀念に缺くるものがゐる間は、傭主の貪慾や不法に對して勞働者の利益を擁護するのは、國民の一部に他ならぬ勞働者の權利であり、また義務である。國民の誠實と信用とを保持するのは、その健康を保持するのと同じく國家の利益でなければならぬ。然るに、資本家の中には國民協同體の一員たることを自覺せぬ不都合な者がゐて、國民の誠實をも信用をも、はたまた國民の健康をも破壞しつゝある。かやうな資本家の貪慾や傍若無人の行動は國民の將來を毒すること甚だしきものであるから、これを制壓するのは國家に對して貢獻することに他ならぬのである。

備主から實際に酷い目に逢はされたら、或は逢はされたやうに思つたら、自分だけで自分の好きなやうにして鬼をつければ良いではないか、といふ人があるかも知れぬ。併し、こんなことをいふのは瞞着で、注意を外らす底意と見なければならぬ。非社會的な不良狀態を除くのは國家の利益である。苟も國家の利益である以上は、適當な武器によつて戰はねばならぬ。ところが、大資本家の勢力と戰つて勝つといふことは、個々の勞働者にはとても出來ないことである。正義で勝たうといふのでなく力で勝たうといふのであるから、一人々々ではとてもかなはない。正義が認められてをれば鬪爭の原因がなくなるわけで、從つて鬪爭も起らぬ筈である。場合によつては、正義の觀念の存在するだけで鬪爭の圓滿な解決を見るに至るであらう。否、やはり鬪爭など見なくてもすむであらう。

非社會的な不都合な待遇が原因で勞働者が反抗するやうになつた場合でも、政府が社會の害惡を取り締るべき適當の機關を設けてゐなければ、勢力の强い

方が勝つに決つてゐる。故に、資本家やその團體の勢力に對抗するには多數の勞働者が一致團結してかゝらねばならぬことも當然の話で、さもなくば、初めから勝利の見込は無いものと諦めねばならぬ。

即ち、勞働組合は、もともと社會思想を强めてそれを日常生活に實現し、不平不滿の原因を除くことを目的とするものである。然るに、事實さうなつてゐないのは、就中社會的害惡に對する法的取締を妨害し、或は政界の勢力を利用してこれを掣肘したものがゐるからである。

ブルジョアの政黨は勞働組合を理解せず、寧ろ理解せんとせず、却つてこれに對抗せんとしたから、社會民主黨は反對に組合運動に味方をし、先見の明をもつて堅固な足場を造り上げたのである。實際に、此の足場は既に幾度となく社會民主黨の重大危機に際して最後の支柱の役目を果してゐる。併し、これと同時に、組合運動が本當の目的を失つてだんだんと新しい目的を追求するやうになつたのは言ふまでもない。

社會民主黨は組合運動に味方をしたが、運動の本來の任務を保存しようとはしなかつた。否、さういふことは社會民主黨の夢にも考へなかつたところである。

僅か二、三十年の間に、勞働組合運動は社會民主黨の巧みな手に操られて、勞働者の社會的權利を擁護すべき手段から國民經濟を破壞すべき道具に轉落した。勞働者の利益がどうのかうの、といふ口の下からこんなに變つてしまつたのである。政界內でも其の一方が無良心で、他方が愚かな羊の如く從順であれば、一方は經濟上の壓迫手段を利用して他方を恐喝するのは何でもない。

社會民主黨と勞働組合との關係では、この無良心と從順とが二つながら揃つてゐたのである。

卐

勞働組合の運動は、今世紀の初め頃に既に本來の任務からかけ離れたものに

なつてゐたが、年を逐うてだんだんと社會民主黨の術策に陷り、遂に專ら階級鬪爭の道具として利用せらるゝに至つた。營々として建設せられた經濟體制に間斷なく衝擊を加へて先づこれを破壞し、經濟の瓦解によつて國家の瓦解を招來するのが勞働組合の仕事になつたのである。勞働者の本當の要求を代表するといふことはだんだん忘れられ、終には大衆は貧乏で教養の低い方がよく、大衆の生活が向上するのは政略上から見て面白くないといふことになつて來た。大衆の希望が叶つてしまへば、彼等は最早や今までのやうに傀儡たるに甘んじなくなり、永久に利用し得なくなる虞があるからである。

階級鬪爭の指導者はかうなることを知つてゐたから、大衆の向上を非常に恐れ、本當に有益な社會改良には贊成しなかつたばかりでなく、正面から反對することさへあつた。

かくの如きは如何にも一見不可解な行動であるが、これを言ひ拔けるくらゐのことは階級鬪爭の指導者には何でもなかつた。

要求をだんだん大きくし、其の極く僅かな部分しか容れて貰へぬかに見せ、資本家の讓歩は惡魔の誘惑であつて、神聖な要求を莫迦げた鼻藥でおさへ、安價な方法によつて勞働者の攻擊力を弱め、或は麻痺せしめようとする奸策に他ならぬから、それに乘つてはならぬと言ひくるめる。大衆は物を考へる力に乏しいから指導者の意のまゝになるのである。別に訝むには當らない。

ブルジョアの陣營では、社會民主黨のかやうな遣り口を不誠實極まるといつて憤慨したが、さうかといつて、かやうな遣り口からブルジョアの行動の方針となり得るほどの教訓を引き出すこともしなかつた。社會民主黨は勞働者が本當に向上して、教養も高くなり生活も豐かになることを恐れてゐるのであるから、ブルジョアはこゝに着眼して勞働者の生活改善に努力し、階級闘爭の代表者の手中からその道具を奪ひ取るべきであつたのである。

然るに、誰もかういふことをしなかつた。

進んで攻擊して對手の陣地を奪はうとはせず、專ら對手の壓迫するに委せて

置き、だんだん押し詰められて遂に仕方なしに應急手段を講じた。併し、その手段も既に時機を失してゐたから奏效せず、極めて不完全で用を爲さなかつたから忽ち排斥せられてしまつた。かくして、現實では何もかも舊態のまゝで、唯だ不滿ばかりがだんだんと深刻になつてゐた。

恰も此の時に當つて『自由勞働組合』なるものが宛ら入道雲の如く政界の一方に現はれ、個人の生活の上にも頭を擡げて來たのである。

自由勞働組合は國民經濟の安全や獨立を脅かし、國家の安泰や個人の自由を覆へす最も恐るべき暴力團の一つであつた。

民主主義の概念を莫迦げた空念佛に墮せしめ、自由を瀆し、『仲間に入らなければ頭を叩き割る』と言つて人情をひたすらに無視したのが此の自由勞働組合である。

當時自分の知り得た『人類の友達』はかくの如きものであつた。そして、かやうな連中に關する自分の見解は年を逐うて廣くなり、深くもなつたが、爾來

變更する必要はなかつた。

卐

社會民主主義の外貌を知るにつれて、その正體を摑まうとする心が日を逐うて强くなつて來た。

勿論、社會民主黨の公開する文書を讀んだだけでは正體は摑めなかつた。蓋し、社會民主黨の公刊物は、經濟に關するものは主張でも論證でも間違ひだらけであり、政治に關するものは嘘言でかためてある。三百代言風の新しがつた言ひ廻しは、特に厭であつた。內容の曖昧な言葉や意味の分らぬ文句を無數に並べたてて、意味の深い、といふが實はまるで意味のない文章を拵へ上げてある。これは理性の迷宮といふべきもので、こんなものを有り難がつてダダイズムの莫迦げた讃語の中から『內實の體驗』を汲み取らうとするのは、大都會に巢くふ頽廢しきつた浮浪人のみであらうが、自分に分らぬことでさへあれば何

でもかでも深遠な智慧であるかのやうに考へる謙讓の美德も周知の如く國民の一部にあることはある。

社會民主黨の間違ひだらけ嘘言だらけの理論と實際の行動とを比較して見てゐるうちに、自分はだんだんと社會民主主義の本當の底意を知るやうになり、それとともに暗い豫感や氣味の惡い恐怖を感じないではゐられなくなつた。そこに自分は恐るべき教義を見つけたのである。利己主義と憎惡とで固まつてゐて、それが勝てば必ず人類が滅びるに違ひないところの教義を見つけたのである。

かやうに研究してゐるうちに、この破壞の教義と、それまで自分の殆んど知らなかつた或る民族との關係も分つて來た。

社會民主主義の眞意を知らうとすれば、どうしてもユダヤ民族を知る必要がある。

ユダヤ民族を知れば、今まで社會民主黨の目的や行藏に就いて思ひ違ひをし

てゐたことが分かり、社會がどうのかうのと、唯だ言葉で飾つた化の皮がはげ、妖しげな雲や霧が一時に霽れて、その中からマルキシズムの歪んだ顔が齒をむき出してあざ嗤ひながら現はれて來るのを見るやうになるであらう。

卐

『ユダヤ人』といふ言葉に特別の考慮を拂ふやうになつたのは何時頃のことであつたか、今では自分もはつきり覺えてゐない。父の生きてゐた頃は、家庭で『ユダヤ人』といふ言葉を聞いたことさへなかつた。父はこの言葉を何か意味ありげに口にするのを教養の低い時代遲れと考へてゐたやうに思はれる。父はもともと國民主義的な嚴しい志操の人であつたが、生涯の間に幾らか世界主義的な思想を抱くやうになつてゐて、自分も何時の間にかその影響を受けてゐたやうである。

學校でも自分は父から承けついだ考へ方を變へねばならぬやうな機會を與へ

られなかつた。

尤も、實科學校では一人のユダヤ少年と知り合つた。この少年に對しては誰も餘りつき合つてゐなかつたが、それは少年が無口であつたためで、他に特別の理由があつたわけではない。無口な者はどうもつき合ひにくいといふことは誰もが色々の經驗で知つてゐたのである。

ユダヤ人といふ言葉を度々耳にするやうになつたのは十四、五歳の頃で、政治問題と關聯して聞くこともあつた。さういふ場合に、自分はユダヤ人を罵る者に對して輕い反感を覺え、何か信仰上の喧嘩を見る時にいつも感じるやうな不快を禁じ得なかつた。

其の頃の自分には尙ほ此の問題を別個の見地から觀察することが出來なかつたのである。

リンツにゐたユダヤ人は極く少く、それも數百年を一所に住み慣れて、見たところ、すつかりヨーロッパ化して人間らしくなつてゐたから、自分はこれ等

のユダヤ人をもドイツ人だとばかり思つてゐた。それがとんでもない考へ違ひであることもまだ分らなかつた。ドイツ人たることに違ひなく、唯だ宗教が違つてゐるに過ぎないと思ひ込んでゐたのである。自分はユダヤ人が宗教を異にするから迫害を受けるものと考へ、ユダヤ人を惡くいふものがあると、それに對して反感を抱いたのみならず、嫌惡をさへ覺えたものである。

ユダヤ人を排斥する組織的な運動のあることをもまだ少しも知らなかつた。

そのうちに自分はウィーンに住むことになつた。

ウィーンに來ても、初めの間は見事な建物に魂を奪はれたり、世路の嶮難に喘いだりしてゐたから、この大都會にどんな人間がどんな層を成して住んでゐるのか目に入らなかつた。その頃、ウィーンの人口は二百萬で、その中にユダヤ人が二十萬近くもゐたのであつたが、それも目に留らなかつた。一時に色々な事柄に觸れて、眼も心も暫くは爲すところを知らなかつたのである。併し、そのうちにだんだんと落ちついて來て、周圍の樣子を仔細に眺めるやうになつ

た。そして、自分はこゝに初めてユダヤ人問題なるものに衝き當つたのである。

ユダヤ人問題に注意するに至つた經緯は餘り愉快なものでなかつた。當時なほ自分はユダヤ人を唯だ單純な異教徒と見てゐたから、ユダヤ人を排斥するのは心が狹いためで、宗教が違ふからといつて壓迫するのは止めた方が良いと考へてゐた。ウィーンにはユダヤ人排斥の新聞があつたが、自分にはその新聞の論調が如何にも大國民の文化傳統に相應しからぬものと思はれて厭であつた。中世紀に於ける幾つかの事件が思ひ出されて不快であつた。自分はあゝいふ事件の繰り返されるのを見たくなかつた。それに、又、ユダヤ人排斥の新聞は一般に無力で重視せられてゐなかつたから——どういふわけでさうなのか當時の自分には分らなかつたが——かやうな新聞の書き立てることは決して深い研究の結果でなく、要するに商賣仇に對する嫉妬の所產であるやうに思はれた。根本的な主張があるのなら假令間違つてゐても遠慮なく述べたててよからうが、どうもさういふ主張があつて書いてゐるのだとは思はれなかつたのである。

當時の大新聞は非常に立派な態度をもつて攻撃に答へてゐたが、默殺してまるで對手にならぬこともあつた。これがまたひどく自分の氣に入つて、自分はいよいよユダヤ人排斥を不當と考へるやうになつた。

ノイエ・フライエ・プレッセや、ウィーネル・ターゲブラットなどは所謂世界的新聞で、報道は豐富、記事は公平らしく、調子は上品であつた。だから、自分はこれ等の新聞を愛讀してゐたが、唯だその書き振りが如何にも浮華で、幾度も不滿を感じ、時には不快をさへ覺えたが、これも世界的大都會の繁榮を反映したものであらうと思つてゐた。

その頃の自分はウィーンを世界的大都會と見てゐたから、かやうに考へるのも無理はなかつたのである。

併し、屢〻不快に思つたことは、これ等の新聞が如何にも下劣な態度を以てウィーンの宮廷に媚び諂つてゐたことである。およそ宮廷のことといへば、何でもかでも恐懼の至りとか悲痛の極みとかいつた調子で書き立てる。その騷ぎ

方が如何にも仰々しくて、特に事柄が『不世出の明君』(フランツ・ヨゼフ皇帝)に關する場合には殆んど山鳥の妻戀ふ聲にも等しいものがあつた。

こんなことはすべて作りごとであるやうに思はれ、自由なデモクラシーの名折であるやうに思はれた。かくも見苦しく宮廷に阿諛するのは國民の品位を汚すものである。

それまで自分の好きであつたウィーンの大新聞に厭氣のさし始めたのはこれがためである。

以前にもさうであつたが、ウィーンへ來てからも、自分は、政治でも文化でも、苟もドイツと關係のあることなら何でも熱心に研究し、ドイツの隆盛をオーストリアの衰亡に比較して竊かに誇ると共に喜んでゐたものである。ドイツの外交に就いては概して滿足を覺えたが、內政には餘り面白くない事件もあつて、屢〻暗い不安に襲はれざるを得なかつた。當時ウィルヘルム二世を對手に行はれてゐた鬪爭にはどうしても贊成できなかつた。ウィルヘルム二世は啻に

ドイツの皇帝であつたのみならず、ドイツの海軍の創設者であつた。故に、議會が箝口令によつて皇帝の口を封じたことは自分には非常に不快であつた。これは全くその資格のないものが敢て行つた禁止であつて、箝口令を布かるべきものは議會の鶩鳥でなければならぬ。勿論、ドイツの王室にも非常に暗愚な君主が現はれてゐる。さういふ君主をも含めて歴代の皇帝が何百年かの間に喋言り散らした譫語はどれほどあるか知らぬが、議會の鶩鳥が此の當時の議場で喚き立てた世迷語には遠く及ばないであらう。

白痴同然の人間でさへ發言の權利を有し、議會に於ては『立法者』として國民に臨み得る國ではないか。苟も王冠を戴く者が、前古未曾有の低俗な饒舌機關から『譴責』を受けたといふのは奇怪な話で、憤懣に堪へないところであつた。

それにもまして癪に障つたのはウィーンの新聞の態度であつた。宮廷のものといへば駄馬の端くれにまで最敬禮を捧げ、何かにつけて方圖もなく媚び諂つ

てゐる新聞が、事ある毎にさも心配さうな樣子を裝ひながら、その實、自分の見たところでは强ひて惡意を隱さうともせずに、ドイツ皇帝の惡口を言ふのである。ドイツの內政に干涉しようといふ氣持はない。決してそんな氣持はないが、痛い傷口に指を觸れるのも同盟國民の親切であり、また義務であつて、新聞人の職務に忠實な所以でもあるといひながら、傷口に指を突つ込んでやたらにかき廻すのである。

かやうなことを見ると身體ぢゆうの血が逆流するのを感じた。

自分はウィーンの大新聞に對してだんだんと警戒するやうになつた。

その頃、ウィーンにダス・ドイッチェ・フォルクスブラットといふ新聞があつた。ユダヤ人排斥の新聞であつたが、ドイツの問題を取り扱ふ態度が大新聞のそれと違つて非常に眞面目であつた。自分もいつかそれを認めて德とするに至つた。

尙ほ一つ癪に障つたことは、ウィーンの大新聞が不都合にもフランス禮讚を

やつてゐたことである。フランス人を『偉大なる文明國民』として賞めたゝへる甘美な讃歌ばかり聞かされては、誰だつてドイツ人たることが恥しくならざるを得ない。この憐むべきフランス崇拜が神經に障つて所謂『世界的大新聞』を放り出し、『フォルクスブラット』を手に取ることがだんだん多くなつた。勿論、この新聞は如何にも貧弱であつたが、ドイツに對する態度には純粹なところがあり、極端なユダヤ人排斥には贊成できなかつたが、その主張には聞くべく考ふべきものが少くなかつた。

兎に角、かやうなわけで、自分はその頃ウィーンの政界を支配してゐたカール・リューゲル博士といふ人物と、その率ゐる基督教社會黨の運動とをだんだん知るやうになつた。

ウィーンへ來た頃の自分は、リューゲル博士も、基督教社會黨も大嫌ひであつた。リューゲルといふ人間もその運動も『反動的なもの』としか思へなかつたのである。

併し、だんだんとリューゲルの人物や事業を知るに及んで自分は考へ直さざるを得なくなつた。でなければ平生の正義感が承知しないのである。そして一旦見直して眺めてゐると、この人物はだんだんと偉い人間になつて來て、自分はほとほと感心した。敬服せざるを得なかつた。今から考へると、ドイツ人でリューゲルほど腕の利いた市長は未だ曾て無かつたやうである。

基督教社會黨を見る目が變ると共に自分の頭も漸く變つて來た。

ユダヤ人排斥に關する考へ方もだんだんに變つた。これは自分にとつて實に最も重大な變化であつた。

勿論、こゝまで來るには心に激しい葛藤があつた。理性と感情とが二年も戰つた。そして理性が遂に勝つたのである。それからは感情も全く理性に服從して理性の最も忠實な監視人となり、警告者となるに至つたのである。

感情と冷たい理性とが激しく戰つてゐた頃の自分に非常な利益を與へたものは、ユダヤ人に就いてウィーンの街頭で受けた實物教育であつた。その頃には

自分も既に盲目滅法に大都會の中をうろつき廻つてばかりゐないで、どうやら建物のみならず人間にも觀察の眼を向けるやうになつてゐたのである。

ある日、ウィーンの都心で、通りすがりに長い上衣を着た黒い縮髪の人間を見た。

これもやはりユダヤ人であらうか。自分は初めから思つた。

言ふまでもなくリンツのユダヤ人はこんな風をしてゐなかつた。そこで、自分はその人物をそれとなく觀察した。すると、その珍らしい顔や姿を見てゐるうちに、初めに起きた疑問がだんだんと形を變へて來たのである。

これもやはりドイツ人であらうか。

何でも疑問が起きると先づ書物を讀んでそれを解決しようとするのが自分の習慣であつたから、今度も幾らかの金を投げ出して、生れて初めてユダヤ人排斥主義に關した書物を買ひ込んだ。併し、殘念ながらこれ等の書物は、ユダヤ人問題に就いて既に相當研究してゐる者でなければ讀んでも分らず、おまけに

論證も雜駁で、說明も科學的でなく、却つて疑念を起させるやうな調子のものが多かつたのである。

そこで、自分はまたしても逆戻りをするのであつた。何週間か或は何箇月か努力した結果が元の木阿彌であつた。

ユダヤ人問題は非常に重大で輕卒に解決すべきものでなく、況して何もかもユダヤ人の罪にするのは以ての外であるやうに思はれた。そこで、自分は何か不正を犯してゐさうな氣がして恐ろしくなり、再び不安動搖に陷るに至つたのである。

それにしても、此の頃の自分は、最早や、ユダヤ人が宗教を異にするドイツ人でなくて特別の民族に屬する人間であることを疑ひ得なくなつてゐた。ユダヤ人問題の研究を始め、漸くユダヤ人に注意を拂ふやうになつて以來、ウィーンはそれまでと違つた姿で自分の前に現はれるやうになつた。自分の行く先には到る所にユダヤ人がゐた。成る程、見れば見るほど他の人間と違つてゐる。

特に都心やドナウ運河以北の地區には、外見からしてドイツ人と少しも似てゐない人間がうようよ住んでゐたのである。

それでも、まだ、自分の胸の底には何か疑念が殘つてゐたらしいが、それも一部ユダヤ人自身の態度によつて遂に一掃せられたやうである。

シオニズムといふものがある。パレスティナにユダヤ人の國を建てようとする一大運動で、ユダヤ人の民族性格を最も明白に現はしたものであるが、これがウィーンでも當時甚だ盛んであつた。

ちよつと見ると、此の運動に贊成してゐるのはユダヤ人の一部だけで、大抵はこれを喜ばず、寧ろ內心で反對してゐるやうに思はれたが、立ち入つて檢べて見ると、この外見も實は煙幕であつた。まるつきり嘘の作り事ではないが、目的があつて拵へた僞裝である。所謂自由主義を標榜するユダヤ人もシオン主義をユダヤ人の思想に非ざるものとして排斥してゐるのではない。ユダヤ人としては、自分がユダヤ人であることを悟られぬやうにしてゐる方が處世に便利

である。然るに、シオン主義者は自分がユダヤ人であることをはつきり告白してゐる。これはどうも具合が悪い。そこでシオン主義者を排斥する。

排斥する者もせられる者も内實に於てユダヤ人たることに變りはないのである。

シオン主義のユダヤ人と自由主義のユダヤ人との喧嘩が外見だけのことだと分ると忽ち胸が悪くなつた。ユダヤ人はよく自讃してユダヤ民族は高潔であるといふが、それなら、こんなに不正直な見せかけだけの喧嘩をする道理はなからう。

そもそも、ユダヤ民族の高潔とか清潔とかいふことが既に問題である。ユダヤ民族が清潔好きでないことは見ただけで分るが、殘念ながら眼を閉ぢてゐても分る場合が多い。身體が臭いのである。自分はこの長い上衣を着た人間の悪臭で胸が悪くなることが何度もあつた。着物は不潔で、風采もあまり立派ではない。

これだけでも感心したことではない。然るにこの選民は身體がかく不潔であるのみならず、精神も不潔を極めてゐるのである。それが分つた時には全く厭な氣持にならざるを得なかつた。

ユダヤ人は色々な方面で活動してゐたが、注意してその仕事を見てゐるうちに自分はすつかり考へ込んでしまつた。

當時の生活は一般に頽廢して、特に文化生活は醜惡を極めてゐたが、よく注意して見ると此の墮落の蔭には必ずユダヤ人がゐたのである。

腫物を切開するやうにして汚い惡業の底を發けば、恰も腐屍の中から蛆蟲が出て來るやうに、小さなユダヤ人が不意に明るい光を受けて眼をぱちくりさせながら必ずそこから出て來るのである。

新聞、美術、文學、演劇などの方面でユダヤ人の働いてゐる有樣を知るにつれて、ユダヤ人の罪の容易ならぬことが分つて來た。ユダヤ人の物々しい誓言も信ずるに足りなくなつた。廣告塔を眺め、そこに仰々しく吹聽してある愚劣

な映畫や芝居の作家の名前を見るだけでも身の毛のよだつものがあつたのである。昔のペストも恐ろしい疫病であつたが、民族の精神を毒するユダヤ人の仕事は、それよりも尙ほ恐ろしい疫病であつた。而もユダヤ人はこの疫病の毒素を多量に製造して撒布してゐるのである。一體、作家といふものは、その精神や道義の水準が低いほどむやみやたらに製作するもので、靑二歲の生意氣なものになるとまるで石をばらまく器械のやうなもので、汚らしい泥細工を臆面もなく投げ散らす。ところが、かういふ連中が數へ切れぬほど澤山にゐるのである。ゲーテの如き偉大な詩人はなかなか現はれて來るものでないが、三文作者は同じ時代に何萬人も生れて來る。これが自然の常であるが、最も惡質の保菌者として精神界を毒するのも實はかやうな連中である。

澤山のユダヤ人が恥づべき仕事に携はつてゐる。これも天意であらうが、確かに見逃すべからざる事實であり、また、怖るべき事實である。神の選民といふのは、かやうな惡業を行ふために選ばれた民といふ意味であるかも知れぬ。

自分は先づ藝術方面で卑猥な作品の作者を丹念に調べてみた。その結果は、今までユダヤ人に就いて考へてゐたところとまるで違つてゐて、甚だ面白くなかつた。感情はそれでも尙ほ容易に承服しようとしなかつたが、理性は必然の結論を引き出さずにゐなかつた。

醜惡な文學、際物ばかりねらつた美術、愚劣な演劇、さういふものの九割までがユダヤ人の手で出來てゐた。而もユダヤ人はその數に於て國民全體の一分にも足らぬのである。嘘言ではない。事實は正にその通りであつたのである。

そこで、今度は日頃愛讀して來た『世界的大新聞』をも同じやうに調べてみた。

すると、調べるにつれて、曾て自分があれほど讃めてゐたものがだんだんとくだらぬものになつて來た。書き振りも氣障に思はれて來るし、內容も卑俗淺薄で、公平と思はれた記事も眞相を正直に傳へず、嘘言でかためてあるやうに思はれて來た。そして、その記者は何れもユダヤ人であつた。

かうして、自分はそれまで殆んど氣の付かなかつた事柄に新たに注意するやうになり、既に氣の付いてゐた事柄を更めて吟味し、理解するやうになつた。

所謂世界的大新聞の標榜する自由主義は僞せ物であつた。攻擊に對して上品に應酬したり、或は默殺して對手にならなかつたのも、すべて狡猾な詭計であつた。演劇の批評で讃めあげられる作家はいつでもユダヤ人で、貶される作家はいつでもドイツ人であつた。ウィルヘルム二世に對しては執拗に皮肉を浴びせ、他方でフランスの文化や文明を讃めあげる。小說の內容も際物から卑猥になり、その言葉には異民族の響があつて、全體の精神が明かにドイツ民族に有害であつた。すべて故意にドイツ民族を毒せんとしてゐるものとしか考へやうがない。

そもそも、誰がかやうなことに興味を持つてゐるのか。かやうなことも總べて偶然の結果であらうか。

自分はだんだん不安になつて來た。

そのうちに、自分は色々な事柄にぶつかつて漸くユダヤ人の正體を摑むことが出來た。道義にも表裏があつて、ユダヤ人の大多數が他人の眼の前で行つて見せてゐる道義がそのまゝユダヤ人の道義ではないといふことが分つて來た。

これに就いてもやはり街上で少し惡どい實物教育を受ける必要があつた。

南フランスの港町は別であるが、その他では、賣春や少女賣買とユダヤ人との關係を研究するのにウィーンほど都合のよい都會は西ヨーロッパの何所にもないやうに思ふ。夜分にレオポルド町の通や辻を歩いてゐると、誰でも殆んど一足毎に、否でも應でも奇怪な光景にぶつつかる。ウィーンがこんな狀態であらうとはドイツ國民の大部分が從來少しも氣付かずにゐたところで、世界大戰に於て東部戰線の兵士が偶〻類似の光景に接するに至つて、否、接せざるを得ざるに至つて初めてそれと知つたのである。

賣春は都會の芥屑のやうな人間のすることで、まことに憎むべき惡業であるが、而もこれが元締をしてゐるものは恥を知らず、氷の如く冷酷で、拔目のな

いユダヤ人であつた。初めてさうと知つたときに自分は背筋に惡寒の走るのを覺えた。

やがて、自分は燃えるやうな怒を感じた。

それからといふものは、自分はユダヤ人問題の研究を避けようとせず、寧ろ進んでするやうになつたが、文化や藝術のあらゆる方面で丹念にユダヤ人の有無を調べてみてゐると、殆んど夢にも思はなかつた所で不意にユダヤ人に衝き當つたのである。

社會民主黨の指導者はユダヤ人であつた。これを知つた時に、自分は初めて眼が覺めたやうに思つた。長い間胸の底にわだかまつてゐた感情と理性との葛藤もこゝに終りを告げたのである。

これは仲間の勞働者と毎日交際してゐる間に分つたことであるが、勞働者は意見といふものを持つてゐない。直ぐ豹變する。同一の問題に就いても數日中に意見を飜へし、甚だしきは數時間中に態度を變へるのである。單獨ではいつ

も筋の通つた話をする人間が群衆の魔力に縛られると、俄に理性を失つてしまふ。どうしてさうなるのか自分には分らなかつた。度し難いと思ふことも屢々あつた。何時間も説明して、今度こそ邪見を破り、迷蒙を啓いてやつたと思ひ心から成功を喜んでゐると、翌日になつて見れば何もかもすつかり元の木阿彌で、情ないことにまた初めからやり直さねばならなくなつてゐるのである。永久に往復する振子のやうに、邪見が絶えず元へ戻つて來るらしい。

かやうな勞働者がその生活に就いて絶えず不滿を感じてゐて、動もすれば辛く當る運命を呪ふ。それも良い。資本家をこの運命の無情な强制執行者と見て憎み、官憲を勞働者の境遇に同情しないものと見て罵る。それも良い。食料品の騰貴に反對し、その値下を要求して街上に示威運動を試みる。それも良い。かういふことは自分にもよく分る。すべて無理からぬことである。併し、さういふ勞働者が同じくドイツ人でありながらドイツ民族を憎み、ドイツ民族の偉大を誹謗してその歴史を汚し、その英傑を辱しめるのは何としても腑に落ちな

いことである。

己れの民族と戰ひ、己れの祖國と戰ひ、己れの故郷と戰ふが如きは、無意味であり、不可解であつて、また不自然である。

然るに、勞働者にはこのことが分らない。いくら言つて聞かせても駄目である。分つたらしく見えてもそれは唯だ一時のこと、數日のことであり、せいぜい數週間のことである。惡業から救はれて改心したらしく思へた人間に後日出會つてみると、當人はとつくに元の木阿彌になつてゐる。またしても不道德に囚はれてゐるのである。

五

社會民主黨の新聞が主としてユダヤ人によつて動かされてゐることもだんだん分つて來た。併し、これはどの新聞だつて同じであつたから自分は深く氣に留めなかつたが、國民主義の新聞といふとユダヤ人が一人もゐないので、これ

だけは不思議であつた。

自分は辛抱してマルキシズムの書物を讀み、讀むにつれてますます憎むやうになつたが、それと共にこの惡業の本元をも詳しく調べてみた。

すると、發行人を始めとしてすべてユダヤ人なのである。

自分は社會民主主義の書物を出來るだけ集めて、その著者の名前を調べてみた。すると、それもユダヤ人であつた。指導者の名前を調べてみると、代議士でも、勞働組合の書記でも、色々な團體の幹部でも、街頭の煽動者でも、その大半はやはり『選民』である。到る所に常に同じ不氣味な姿が現はれて來るのである。アウステルリッツ、ダヴィド、アドラー、エルレンボーゲンなどは隱れもないユダヤ人で、その名前は永久に自分の記憶に殘るであらう。そこで、自分も社會民主黨がドイツ民族でない他の民族の手に踊らされてゐるのをはつきり知ることが出來た。數箇月前から自分は社會民主黨の小さな代表者と激しく戰つて來たが、この政黨を動かしてゐるものは實はドイツ人ではなかつたので

ある。自分も遂にユダヤ人はユダヤ人でドイツ人でないことを知つて深い滿足を覺えるに至つた。

かうして、自分は我が國民を邪道に誘ふ者の正體をはつきりと突きとめることが出來た。

一年ほどウィーンに住んでゐるうちに、如何に沒分曉の勞働者でもそれほど頑迷なものでなく、道理をつくして上手に說明してやれば耳を傾けて來るものであるといふ確信が出來た。自分はだんだんと勞働者の信じてゐる敎義を研究して、それに精通し、自分の信念のために戰ふ武器に利用した。だから自分はいつも勝つてゐた。時間がかゝり、忍耐が要るが、兎も角も大衆は救ひ得るものであることが自分にも分つたのである。

然るに、ユダヤ人だけは何としてもその考へを變へなかつた。

その頃の自分は尙ほ頗る單純であつたから、ユダヤ人に對してもマルキシズムの迷妄を說伏してやらうとした。交際した仲間は澤山でもなかつたが、舌も

痛くなり、聲も嗄れるほど說いて聞かせた。そのたびに對手もマルキシズムが怖るべき害毒を流す謬見であることを納得したやうに思へたのであるが、事實は正にその反對で、ユダヤ人は、社會民主主義が理論でも實行でも破壞を目的としてゐることを知れば知るほど、ますます頑固に信ずるやうに思はれたのである。

ユダヤ人と議論を戰はしてゐるうちにその辯證法なるものをも知ることが出來た。ユダヤ人は初め對手を莫迦にしてかゝるが、對手が手硬いと自分の方で莫迦を裝ひ、それでもかなはぬとなると對手の言葉を聞き違へた眞似をし、追ひ詰められると不意に話頭を他に轉じてごまかしてしまひ、ごまかし切れなくなるとまた逃げて、詳しいことは何も知らぬと言ふ。こんな連中を攻めるのはねばねばした膠の塊を摑むやうなもので、分れ分れになつて指の間から拔け出たと思ふと、また、元の通りに集つて塊を作る。誰の眼にも降參の他はないと見えるくらゐに十分に叩きつけて、少しは效目があつたらうと思つてゐると、

翌日にはまた、すつかり驚かされる。ユダヤ人は昨日のことなど少しも知らぬかの如くで、まるで何もなかつたかのやうに昔ながらの譫語を語り、怒鳴られると吃驚した樣子をして、自說の正しいことは昨日既に證明せられた筈で、それ以外のことは何も全く覺えてゐないと言ひだすのである。

自分は何度か呆れかへつた。

ユダヤ人の口達者なことや嘘言の上手なことは全く無類で、驚歎すべきものがある。自分はだんだんとユダヤ人を憎むやうになつた。

かうしたことのお蔭で、自分は社會民主主義を支持してゐる者、少くとも宣傳してゐる者の正體を突きとめることが出來たが、それとともに國民が可哀さうになつた。惡魔のやうに老獪な誘惑者のゐることが分つても尙ほ憐むべき犧牲者を咎め得るものがあらうか。勞働者が誘惑に乘るのは無理もないことで、ユダヤ人の横着な詭辯を說破するのは、自分にだつてなかなか容易ではなかつた。また說破し得たところで何にもならない。對手は白を黑に言ひくるめ、今

の今喋言つたばかりの言葉を平氣で否認し、それを次の瞬間にまた自分の言葉として喋言り得るやうな人間なのである。效目も何もあつたものではない。

ユダヤ人を知れば知るほど、自分は勞働者を大目に見るやうになつた。

自分の考へるところでは、勞働者に罪はないのである。勞働者を憫まず、同じくドイツ民族の子たるに相違なき勞働者に對して公平に與ふべきものを與ふることをせず、誘惑者や犯罪人を罰しようともしなかつた者が惡い。さういふことに骨折甲斐を認めなかつた者が惡いのである。

日常生活の經驗に促されて、自分はマルキシズムの本源をも探つてみた。マルキシズムの影響は詳しく分つてをり、恐るべき勢ひで弘まりつゝあるのも自分の見て知つてゐるところで、その將來に就いてもほゞ豫想することが出來てゐた。殘るところの問題は、この運動の鼓吹者が教義の恐るべき結果を末の末まで見通しつゝ提唱したか、それとも鼓吹者自ら迷妄の犧牲になつたか、といふことである。

二つとも有りさうなことである。

鼓吹者自ら犠牲になつたのだとすれば、最悪の事態を未然に防止せんがために進んでこの有害な運動の戰線に割り込んだのかも知れない。さうすることを考へ深い人間の義務と思つたのであらう。そして何時の間にか犠牲になつたのであらう。さもなくて、有害と知りつゝ鼓吹したのだとすれば、曾て此の國際病を創り出した者はそれこそ本當の悪魔であつたに違ひない。窮極に於て必ず人類文化の潰滅と世界の荒廢とを招來せざるを得ないやうな運動を計畫し得るものは、人間でなく怪物であらう。人間にそんなことの出來る道理がない。

かやうな悪魔に對しては戰ふほかなく、運命は何方へ味方するか知れぬが、人間はその知能を傾け、意志を固めて、あらゆる武器で戰はねばならぬのである。

マルキシズムの眞相を深く探るために自分はこの運動の鼓吹者に就いて詳しく知ることに努めた。そして案外に早く目的を達することが出來た。これは自

分がユダヤ人問題について、まだ深くはなかつたが兎も角も既に相當の知識を得てゐたお蔭である。この知識のお蔭で、自分はユダヤ人の言葉を理解することが出來、社會民主黨を創設した連中の駄法螺を現實と比較して考へることも出來たのである。ユダヤ人の言葉には裏の裏があつて、そのまゝでは彼等ユダヤ人の考へてゐることを表はしてゐない。本當の目的は文章に出てゐず、巧妙に行間に伏せてあるのである。

かくして、自分の心にも重大な革命が起きた。自分は弱々しい四海同胞主義者から熱烈なユダヤ人排斥主義者になつた。

その後、尙ほ一度、自分は暗い考へに囚はれて深い不安に陷つたことがある。人類の長い歷史の上でユダヤ民族の活動の有樣を見てゐるうちに、ふと、心配な疑問が浮んで來た。最後の勝利を占めるものはユダヤ民族ではあるまいか。憐むべき我等人類には分らぬのであるが、或る理由があつて、かく永劫に豫定せられてゐるのではあるまいか。それが測るべからざる運命の希望ではあ

るまいか。

世界は永遠に唯だ此の地上にのみ住む民族の天下になるのではあるまいか。

我等が自己保存のために戰ふのは客觀的な權利ではないのか。それも唯だ主觀的な權利に過ぎぬのであらうか。

かやうな疑問が湧いて來て困つたが、マルキシズムを研究し、ユダヤ民族の活動を冷靜に觀察してゐるうちに、運命から直接に回答を與へられてすつかり解決をつけることが出來た。

ユダヤ人のマルキシズムは天然自然のアリストクラシーを拒ける。自然では優れた者、强い者が勝つ。優れた者、强い者に永遠の特權がある。然るにマルキシズムは精神のない數量や重量を重んじ、人格の價値を否定し、民族や人種の意義を否定し、かくして人類の存續と文化との前提を否定する。かやうな主義が宇宙の原則だとすれば、秩序といふ秩序は悉く破滅せざるを得なからう。宇宙といへば、人間の認識し得る最大の有機體であらうが、その宇宙でもかや

うな主義を應用すれば、結果は唯だ混沌のみで、まして地上に於ては人類の滅亡があるのみであらう。

ユダヤ人がマルキシズムを利用して世界の諸民族を征服した曉には、王冠に人類の死の舞踏を刻まざるを得なくなり、地球は再び何百萬年かの太古に還つて人影もなく、唯だエーテルの中を運行するほかなくなるであらう。

久遠の自然はその命令に背く者に對して假借なく復讐する。

今日では、自分はユダヤ人と戰ふのを神意にかなふことと信じてゐる。ユダヤ人と戰ふのは卽ち能主の大業のために戰ふのであると信じてゐる。

註　デンマークの建築家テオフィル・フォン・ハンゼンの建築にかゝる美術學校を指す。（譯者）

第三章　ウィーン時代批判

特別の天分のある者は別として、一般に三十歳未滿の者は政治に携はるべきでないといふのが自分の持論である。人間三十歳までは概ね修養の時代であつて、この時代に人事一般の修養を積んで初めて政治問題を考へ、それに對して獨自の意見を立て得るやうになる。根本の世界觀が出來て、日常の問題に對する見方が定まつてくれば、最早や徒らに他から動かされるやうなこともなくなるから、そこで初めて政治に關與してもよく、又關與すべきである。

若し、思想の根本がまだ固まらぬうちに政治に關與すれば、他日、重要問題に就いて從來の意見を變へねばならなくなり、或は、惡いと知りながら改めることが出來ないで、何時までも誤つた主張を固持しなければならぬやうなことになる。從來の意見を中途で變へるといふことは、本人にも非常に不快なこと

で、自分で動搖してゐるのであるから、配下の者に對して以前のやうに強いことが言へず、深い信頼を期待し得なくなる。また、配下の者は、首領の豹變で途方に暮れ、今まで戰つて來た對手に對しても面目を失ひ、恥辱を感ぜざるを得ない。惡いと知りながら改めることが出來ないで誤つた主張を固持してゐる場合はどうかといふと、自分ではもう今まで言つたことを信じてゐないのであるから、自說を押し通さうとしても言ふことが空疎で力がない。それを無理に押し通さうとするのであるから手段を選ばなくなる。これは非常に厭なことであるが、今日屢〻見受けるところである。政黨の首領が、內心では最早や從來の政見を眞面目に主張しようと考へてゐないくせに（自分で信じないことのために死を賭して戰ふものはない）、配下の者には强ひてこれを押しつけようとして色々の破廉恥なことを敢てし、遂に指導者の資格を失つて『政客』になり終つてしまふ。政客といふのは無節操を以て唯一の節操とし、厚かましくて鐵面皮で嘘言の上手な人間のことである。

思想の根本のまだ固まらぬ若い者が代議士として議會に出るやうなことになれば、唯だ自分と家族との糧道のために華やかに戰ふのが政治の全部であるかの如く考へるやうになる。これは初めから分り切つたことで、當人にとつても一生の不幸であるが、妻子をこれで養はねばならぬとなればいよいよ熱心に戰はざるを得なくなる。そこで、少しでも政治に興味を持つてゐる人間は誰でも自分の政敵であるやうに思はれ、政界に何か新しい運動が起きると先づ自分の地位が心配になり、自分よりも偉い人間を見ると、何時かこの人物が自分を蹴落してしまふのではないかと考へる。

こんなのを議會の南京蟲といふが、これについては尙ほ後に詳しく述べる。

勿論、人間三十歲を過ぎても尙ほ學ばねばならぬことは幾らもある。併し、世界觀の骨組は三十歲までに大體出來上るものであつて、その後に學ぶべきことは世界觀の內容を補足し、充實するだけのものである。卽ち、三十歲後の勉强はやり直しでなくて補習である。從つて、配下の者も今まで間違つたことを

教へられてゐたといふ重苦しい感情を無理に壓し殺さねばならぬやうなことも
なく、首領の修養のだんだん深まるのを見て滿足を感じる。首領の勉强は配下
の者の奉ずる主義をいよいよ深遠ならしむるものであり、その主義に關して從
來配下の者の抱いてゐた見解の間違ひでなかつたことを證明するものである。

政治家は、一旦自分の世界觀の誤れるを悟つたら、誤りは誤りとしてこれを
捨てて潔く自ら處決すべきで、少くとも政界から引退しなければならぬ。根本
認識を一度誤つたのであるからもう一度誤らぬとは限らぬ。何れにせよ、最早
や今まで通りに世人の信賴を期待したり、要求したりすることは出來ないので
ある。

併し、今日ではかやうな正しい作法を守るものは甚だ少く、政界にのさばつ
てゐるのは政治を『賣物にする』ことを天職と心得た悖德の賤民である。

本當の政治家は殆んど一人もゐない

他のことならいざ知らず、政治のことなら自分は誰にも負けは取らぬと思つ

てゐたが、右に述べたやうな理由から若くして政界の表面に乘り出すことはこれを避けて來た。唯だ自分の注意を惹いた事柄に就いて少數の仲間と語り合つただけである。併し、少數の仲間と語り合つたといふことは非常に良いことであつた。演說の勉强にこそならなかつたが、世の中には極めて幼稚な意見を抱いた人間や奇拔な質問をする人間のゐることを知ることが出來た。自分は努めてかやうな時間や機會を修養に利用したが、當時のウィーンほどかやうな修養の機會を與へて呉れた所はドイツの何處にもなかつたやうに思ふ。

卐

オーストリアの政治はその規模からいつて當時のドイツ——プロイセンの一部、ハンブルグ及び北海の海岸を除く——のそれより間口も廣く、奥行も深かつた。こゝにいふ『オーストリア』は言ふまでもなく大ハップスブルグ帝國の版圖であるが、そもそも、ハップスブルグ帝國といふ國家が成立するに至つた

歴史的動機は、このオーストリアにドイツ民族が移住して來たことにあり、政治的に甚だ不自然な帝國に數世紀の久しきに亙つて文化の生命を與へたのもこのオーストリアのドイツ民族であつた。つまりオーストリアはハップスブルグ帝國の芽胞といふべきもので、時代の進展につれて帝國の存立はいよいよ益々この芽胞の健在に依存するやうになつたのである。

この古いオーストリアをハップスブルグ帝國の政治や文化の動脈へ絶えず新しい血液を注ぎ込む心臓とすれば、ウィーンはその腦髄であり、同時にその意志であつた。

仰々しい外觀だけを見てゐると、ウィーンは雜多な民族の烏合の上にこれを統一する女王の如く君臨し、特有の美觀によつて國家全體の醜惡な老衰現象を忘れさせる力を備へてゐるやうに思はれる。

ハップスブルグ帝國の內面は既に血みどろな民族鬪爭の修羅場と化してゐたに拘らず、外國、特にドイツはウィーンの愛すべき姿だけを見てゐた。加ふる

に、當時のウィーンは恰も燃え盡きんとする蠟燭の如く最後の妖光に輝いてゐたから、外國のものには帝國の內面は一層分り難いものになつた。天才リューゲル博士がウィーン市長であつた時代に、ハップスブルグ帝國の神聖な首都には尙ほ一度不思議な若い生命が甦へつたのである。博士は、オストマルク移民の生んだ最後の偉大なドイツ人であり、所謂『政治家』ではなかつたが、『帝國首都』ウィーンの市長として經濟や文化の殆んどあらゆる方面に活動し、次ぎ次ぎに目覺ましい仕事をして帝國の心臟たるオーストリアの勢力を强め、外交の手腕に於ても當時の所謂『外交官』が束になつてかゝつても足許へも寄りつけないものがあつた。

かくの如きウィーンの隆盛も國家の衰運を挽回することが出來ず、多數の民族によつて合成せられた所謂『オーストリア』は遂に滅亡したが、これは併し、オーストリアのドイツ民族が政治的に無能であつたためではないので、實に已むを得ないことであつた。オーストリアは種々雜多な民族を擁し、人口は五千

萬を數へてゐた。その中でドイツ人は一千萬人に過ぎない。この少數を以て民族の雜多な國家を維持してゆくには、それだけの豫件が揃つてゐなければならぬ。然るにオーストリアにはこの前提條件が缺けてゐた。ドイツ人が政治の方面で十分に働けるやうになつてゐなかつたのである。

オーストリアのドイツ人には大きな抱負があつた。

オーストリアがドイツから離れた後でも、オーストリアのドイツ人は大ドイツ帝國の人民たることを忘れず、大ドイツ帝國の人民として成し遂ぐべき使命を感じてゐた。狹い帝室直轄地に滿足せず、依然として大帝國を思慕してゐたのである。東邊の國土は曾て祖先のドイツ民族が絕え間なき鬪爭によつて獲得した地域である。この地域をドイツ民族のために確保することを、オーストリアのドイツ人は祖國から引き離された後にも尙ほ自分等の一大使命と考へてゐた。勿論、オーストリアのドイツ人はかやうなことばかり考へてゐたといふのではない。優れたドイツ人は、一方に於てかやうに本國のことを考へながら、

他方に於て常に生國のことをも考へてゐたのである。

オーストリアは非常に複雜な國家であつたが、國内に於けるドイツ人の活動範圍は比較的に廣かつた。先づ經濟方面で見ると、ドイツ人は殆んど到る所で活躍してゐた。大きな企業といへば殆んどすべてドイツ人によつて行はれ、技術家でも、役員でも、主だつたものは大抵ドイツ人であり、外國貿易もユダヤ人がまだ手をつけてゐないものはドイツ人の手にあつた。政治方面で見ると、オーストリアを國家として纏めてゐたものはドイツ人であつた。軍隊に入つても、ドイツ人は狹い故郷にばかりゐたのではなかつた。オーストリアのドイツ人は新兵としてドイツ人の聯隊に入るが、聯隊はウィーンにもあれば、ガリチエンにも、ヘルチェゴヴィナにもあつたのである。將校團はドイツ人ばかりであり、官吏も高級のものは殆んどすべてドイツ人で、藝術も科學もドイツ人の手にあつた。黑人にだつて譯もなく出來るやうな際物を拵へる流行の藝術家は別であるが、精神の純眞な藝術家はすべてドイツ人で、ウィーンは音樂でも、

建築でも、彫刻や繪畫でも、絶えず滾々と湧き出でてオーストリアを潤ほして來た盡きざる藝術の泉であつた。

少數のハンガリー人を別とすれば、外交もドイツ人によつて行はれてゐたのである。

それにも拘らず遂にオーストリアの滅亡を防ぐことが出來なかつたのは、最も大切な豫件に缺けてゐたからである。

オーストリアは民族の寄合世帶であり、而も、各民族は乘ずべき間隙さへあれば勝手の方向へ離れ去らうとするものであるから、纏まつた國家として立つてゆくには、この離れ去らうとする力を抑へなければならぬ。卽ち、オーストリアは中央集權に據らなければ治まらず、中央集權の出來るやうに內部から組織してかゝるべき國であつて、さもなくば全く存立し得ない國であつた。

オーストリアの政府にもこゝに思ひ到つたものが無いではなかつたが、大抵は思つても間もなく忘れ、或は實行の出來にくいこととして諦めてしまつたの

である。併し、國家を聯邦組織にするといふ考へ方はオーストリアの場合では全く誤りで、國家の芽胞たり得る力の強い國が無いからどうしても失敗に終らざるを得ない。それに、聯邦の大切な豫件たるべき事情が、オーストリアとビスマルクのドイツとでは全く違つてゐた。即ち、ドイツでは各聯邦の政治的傳統が違つてゐるだけで、根柢は民族的文化で繋がつてゐたから、唯だ政治を統一すればよかつた。また、ドイツの國民は少數の異分子を別とすれば、すべて同一の民族に屬してゐたのである。

然るに、オーストリアに於ては事情がまるで違つてゐた。

オーストリアでは、ハンガリー以外の地方はその地方の政治の歴史をまるで記憶してゐなかつた。記憶してゐても明瞭でなかつた。そこへ所謂民族自決主義の時代が來て、色々な民族が色々な地方に勢力を張るに至つた。そればかりでない。オーストリアの構成民族と同種又は同系の民族がオーストリアの近隣に所謂民族國家を建てて、オーストリアのドイツ人よりも強い魅力で外から誘

惑し始めてからは、國内異民族の統御はオーストリアに取つていよいよ困難になつて來たのである。

ウィーンすら最早やこの成り行きを阻むことが出來なくなつた。

ブダペストが發展して大都會になり、これが先づウィーンと競爭するやうになつた。競爭の結果は、オーストリアといふ國家の結束が緩んで國家の局部が強くなつた。やがてプラーグがこれに倣ひ、レンベルグやライバッハなどもこれに倣つた。かくして從來の地方都市がだんだんと各民族の中央都市となり、各地方獨特の文化の中心となるに及んで、各民族の政治本能も精神上の基礎を得て深くなり、これがやがて國家といふ共通の利害の力よりも強くなつて、オーストリアの滅亡すべき時が來なければならなくなつたのである。

かやうな狀勢が外部から特に明白に看取し得るやうになつたのは、ヨゼフ二世の崩御以後のことで、事態があのやうに急速に進展したのは、一はオーストリアの國内事情に因るが、一は當時に於けるオーストリアの對外關係に因るの

である。

オーストリアの存立を眞劍に考へる以上は、假借するところなく中央集權を強行しなければならぬ。それには先づ國語を統一して諸民族が形式上でも同一の國家に屬してゐることを明かにし、統一國家の存立に必要な技術的手段を政府に與へなければならぬ。次で、學校教育によつて統一國家の觀念を養成しなければならぬ。固より、かやうなことは十年や二十年で能くなし得るところでない。植民地の統治でも、一時の努力より根氣のよい勉强が大切であるが、それと同じく國家觀念の養成も百年二百年の長い歲月を要するものと覺悟しなければならぬ。

言ふまでもなく、政治も嚴重に中央に統一しなければならぬ。

然るに、オーストリアではかやうなことが少しも行はれなかつた。何故に行はれなかつたか。或はもつと率直に言へば、かやうなことを何故に行はなかつたか。その理由を探り究めることは自分にとつても非常に大切であつた。この

中央集權の實行を怠つた者は卽ちオーストリアを亡ぼした者に他ならぬからである。

オーストリアほどその隆替が統御の强弱に依存してゐた國は他に無い。民族國家卽ち同一の民族で固まつてゐる國は、政府が無能でもそれがために直ちに亡びるといふことは少く、民族といふ土臺があつてこれが國家を維持し得る力を藏してゐる。民族に天與の惰性があり抵抗力があるから、民族國家は非常な秕政にも案外に長く堪へることが出來、內部から崩潰する虞は少いのである。秕政のために衰へて殆んど滅び去つたかと思はれるものもあるが、そんな國でも民族國家ならば何かの機會に勃然として不死の生氣を回復し、再起して世界を驚かすものである。

ところが、同じ民族で出來てゐず、卽ち血で繫がらず、拳骨で無理に固められてゐる國ではさうはゆかぬ。統御の力が弱いと雜多な民族の雜多な本能が頭を擡げて來る。卽ち、國家が唯だ衰微して冬眠狀態に陷るだけに留まらず、遂

に收拾の出來ないものになる。何れか有力な民族の意志が國家を指導してゐる間は、他の民族はそれに壓へられて思ひ思ひのことをなし得ないが、壓へる力が弱くなると忽ち勝手なことを始めるやうになるのである。勿論、雜多な民族で出來てゐてもその民族が既に共通の教育、共通の傳統、共通の利害などで結びつき久しく年を經てゐる國では、收拾の出來なくなる虞も比較的に少く、建國の日の淺い國ほど統御の强弱に依存することが多いわけである。寄合世帶の國は概ね優れた權力者や理想家の拵へあげたものであるから、孤獨な大建國者が死ぬと間もなく瓦解したのも珍らしくない。建國以來既に年久しく數百の春秋を經てゐても、寄合世帶は結局寄合世帶であつて遂に安全なものでなく、分裂の危險は常に國内に潛んでゐて、少しでも統御が弛めば、雜多な民族が各自勝手なことをするやうになり、教育の力も高尙な傳統も最早や役に立たず、國家は必らず瓦解せざるを得なくなる。

かやうなことに思を致さなかつたところにハップスブルグ家の悲劇があり、

罪過がある。

ハップスブルグ家にもこゝに思を致した者がないではなかつた。運命は尙ほ一度炬火をかゝげてオーストリアの未來を照して見せたのである。併し、その炬火もやがて永久に消えてしまつた。

ヨゼフ二世皇帝は、父祖が疎かにして來たことを今の內に早く取り返しておかなければ、オーストリアは必ず民族鬪爭の舞臺と化し、ハップスブルグ家はその犧牲となつて滅びゆくに違ひないと豫想せられて非常に心配せられた。そして、この『人類の友』は超人的な努力を以て父祖數百年の怠慢を一代で取り返さうとせられた。若しヨゼフ二世に假すに尙ほ四十年の歲月を以てし、且つヨゼフ二世の着手せられた事業を尙ほ二代も續けてゆくことが出來たら、オーストリアは或は滅亡を免れ得たかも知れぬ。然るに、ヨゼフ二世は卽位後僅か十年にして早くも心身ともに困憊して崩ぜられ、その事業も共に葬り去られて、カプチン敎徒の納骨堂の中に再び醒めることなく永へに眠られてしまつた

のである。

後繼者はその精神に於ても意志に於てもかやうな事業に堪へ得ない人物であられた。

新しい時代の前觸れとして革命の稻妻がヨーロッパ全土に閃き始めると、オーストリアもやがてこれに打たれて火を發するに至つた。當時のヨーロッパの革命は、社會問題や政治問題によつて惹き起されたものであつたが、オーストリアの革命は寧ろ民族問題が原因になつてゐた。

一八四八年の革命は他の國では悉く階級鬪爭の形で行はれたが、オーストリアではこれが既に新しい民族鬪爭の端緒をなしてゐた。然るに、當時のドイツ人はこれを忘れ、或はこれに氣が付かず、進んで鬪爭のために働いてドイツ人自身の運命を決したのである。卽ち、ドイツ人はやがてドイツ人の存立を脅かすに至るべき西ヨーロッパ民主主義の妖怪を喚び覺ます手傳ひをしたのである。

豫め國語を統一しておかずに直ちに議會政治を採用したから、オーストリアのドイツ民族は忽ちその優越的地位を失ひ、オーストリアの國家自身もこの時に事實上滅亡した。その後の出來事はすべてたゞ瓦解せる國家の殘務整理に過ぎぬのである。

オーストリアの瓦解を研究すると心が暗くなるが、教へられるところも多い。國家の瓦解といふこの重大な判決は幾百幾千とも知れぬ無數の種々なる形式で個々別々に執行せられたが、大抵の人間はそれを見ても土崩と知らず、潰滅と氣づかなかつたやうで、これこそオーストリアの滅亡が神々の意志であつた證據である。

併し、オーストリアの瓦解を詳しく記すことは本書の目的でないから、こゝでは唯だ重要な事柄に就いて述べることにする。民族や國家の滅亡には古今東西を通じて軌を一にした原因がある。かやうな原因は今日の時代から見ても甚だ重視すべきもので、又、自分にとつても政治を考へる基礎になつたものであ

るから、先づこれをこゝに取り上げてみたいと思ふ。

卐

オーストリアの腐敗は色々な施設に現はれてゐたが、中でも最もよくこれを現はしてゐたのが議會である。本來最も堅固であるべき筈の議會が最も脆弱で、四分五裂の國情をそのまゝ反映してゐた。どんなに莫迦な平民でも、これを一目見ればオーストリアの內情を察知するに苦しまなかつたであらう。

言ふまでもなく、オーストリアの議會は所謂典型的な『民主主義』の國イギリスの制度を眞似たもので、イギリスでは人民を幸福にする制度といつてゐるが、それをそのまゝ承け繼いで殆んど何の變化も加へずにウィーンへ持つて來たのである。

オーストリアが議會を衆議院と貴族院とに分けたのは、イギリスの二院制度を移したのである。勿論、『議事堂』そのものは多少違つてゐる。テームス河畔

にイギリスの議事堂を建てたバリは、世界にまたがる大英帝國の歴史を繙いてその中からこの殿堂の一千二百の壁龕や彎柱や圓柱を裝飾するに足る事蹟を探り出して來た。故にイギリスの上院や下院は彫刻や繪畫に於ても國民の誇り得る聖堂になつたのである。

ところが、ウィーンの議事堂はかやうな具合にゆかなかつた。議事堂はデンマーク人ハンゼンの建てたもので、大理石で出來てゐて立派であるが、このハンゼンが最後の破風を仕上げてさて裝飾しようとすると、材料になるものが無かつた。何もかも古代のものを借用するほかなかつた。そこで、ローマやギリシアの政治家や哲學者がこの『西ヨーロッパ民主主義』の劇場を飾ることになつたのである。兩院の建物の屋根には、四頭立の二輪馬車が四方に向いて驅け出しさうな姿で立つてゐるが、これは當時のオーストリアの國情を明白に表現した皮肉な象徴とも見ることが出來よう。

オーストリアは『多民族』の寄合世帶であるから、議事堂をオーストリアの

歴史で飾ることは具合が悪い。それを侮辱と感じ、挑戰と思ふ民族も必ずあるに違ひないのである。ドイツでさへ、世界大戰の砲聲を聞くまでは、ヴルロットの建てた議事堂にドイツ國民を讃へる言葉を刻んで、それをドイツ國民に獻げようとはしなかつたのである。

自分が初めてフランチェンスリング街の議事堂で衆議院の議事を傍聽したのは、まだ二十歳にもならぬ頃のことであつたが、自分はその時に非常な反感を覺えた。

自分は早くから議會を憎んでゐたが、議會制度そのものを嫌つてゐたのではない。自由を尊ぶ人間として議會政治以上に良い政治を考へることが出來なかつた。ハップスブルグ家を憎む自分には、獨裁の政治はどのやうな種類のものでもすべて自由に反し、理性に悖る犯罪としか思はれなかつたのである。

それに、又、自分は若い頃頻りに澤山の新聞を讀んだ。その爲めであらう、知らず識らずの間にイギリスの議會を讃美するやうになり、この氣持からなか

なか脱けられなくなつてゐた。イギリスでは、下院さへも立派な品位を保つて任務を遂行してゐる（我が國の新聞が麗々しく書き立てたところではさうであつた）。その態度が自分に深い印象を與へたのである。國民自治の形式としてイギリスの議會政治よりも尙ほ高尙なものが他にあり得ようか。

然るに、オーストリアの議會はこの立派な模範を手本にしたものとは思はれぬほど下司であつた。それ故、自分はオーストリアの議會を憎んだのである。おまけに、次のやうなこともあつた。

オーストリアに於けるドイツ民族の運命を支配したものは、議會に於けるその地位である。普通選擧施行前は、ドイツ人は議會に於て僅かながら多數を占めてゐた。併し、社會民主黨は元來ドイツ民族中心の政黨でありながら、その態度には我等の信賴し難いものがあり、他民族黨員の離反を恐れるの餘り、ドイツ民族に重大な關係のある問題に就いて常にドイツ民族の要求に反對してゐたから、僅かながら過半數を占めてゐたといふ狀態もあまり當にはならなかつ

た。卽ち、社會民主黨は當時既にドイツ民族の政黨と見做すことの出來ぬものであつたのである。そこへ普通選擧を施行したから、ドイツ民族は議員の頭數に於てさへ優越的地位を失ひ、爾來、オーストリアは何等の妨害をも受くることなく着々としてドイツ民族の勢力を國內から驅逐し得るに至つたのである。

自分は既にこの頃からかやうな代議制度を好まなかつた。民族の自己保存といふ本能が然らしめたのであらう。自分は議會がドイツ民族を少しも代表せず、常に裏切つてゐるのを見て不滿に思つたのであつたが、併し、考へて見れば、これは何も代議制度そのものが惡いためでなく、オーストリアの國情がさうさせるのである。不滿なことは啻にこればかりでなく他に幾らもあるが、すべて國情のせゐであるから、オーストリアといふ國家が滅亡せずに存續して、ドイツ民族が再び議會の過半數を占めるに至らば、原則として代議制度に反對すべき理由も無くなるに違ひなからう、と自分はかやうに思つたのである。

オーストリアの代議制度に就いてかやうに考へてゐた自分が初めて議會の傍

聽に行つたのである。議會は見方によつて、或は神聖な場所であり、或はさうでない場所であつた。自分が議會に神聖を感じたのは大建築の崇高美に打たれたからで、ギリシア風の大殿堂がドイツ民族の土地に聳立してゐたのである。

併し、間も無く眼下に繰り展げられた悲慘な芝居を見ると、自分は憤慨せずにはゐられなかつた。

議場では數百の議員が重要な經濟問題を討議してゐた。

自分は此の一日の見學で何週間も考へ込まざるを得なくなつた。

演說の內容は聞いてゐると全く氣も滅入るほど貧弱であつた。勿論、自分にもよく分つた演說のことをいふのである。議員の或る者はドイツ語を使はず、スラヴ語やその方言で話すのであるから何のことだか自分には分らなかつた。それまでにも新聞で知つてはゐたが、野蠻な群衆が互に怒鳴つたり、喚叫いたり、身振り手振りで騷ぎ立てる實況を自分で目擊するのはこれが初めてであつた。一人の老人が高い所から見おろしてゐて、額に汗を流しながら、鈴を振り

鳴らし、嚴めしげな聲で威したり賺したりして、議會の品位を取り戻さうとして懸命になつてゐたのは傍の見る目も氣の毒なほどであつた。

自分は遂に笑はざるを得なかつた。

その後二、三週間を經て再び議會へ行つてみた時には、議場の光景はがらりと變つて、先日の面影はどこにも殘つてゐなかつた。議場は殆んど空つぽで、議員はゐるかと思へば眠つてゐたり、席にこそ着いてはゐたが欠伸ばかりしてゐた。壇上では一人の議員が何か演說してゐた。そして副議長が如何にも退屈さうに議場を見廻してゐた。

代議制度に對する疑念が初めて自分の腦裡に湧いて來た。そこで、自分はその後も暇さへあれば議會へ行つて、注意して議場の模樣を見たり、演說も自分に分るものに耳を傾けたり、オーストリアといふ憫むべき國家の色々な民族が選出した所謂國家の選良の賢愚とりどりの容貌をも研究したりして、だんだんと代議制度に就いて自分一個の意見を纏めあげたのである。

靜かに觀察することこゝに一年、代議制度に關する自分の意見はすつかり變つてしまつた。否、すつかり腦裡から消え去つてしまつた。同じく代議制度といつてもオーストリアのは出來損ひであるから、今さら兎や角いふほどのこともないが、オーストリアのばかりでなく、一般に議會政治そのものが宜しくない。自分はこんなものを認めることが出來なくなつた。それまでは、自分も、オーストリアの議會政治が旨くゆかぬのは、ドイツ人が議場に多數を占めてゐないからであると思つてゐたが、禍根は實にこの制度そのものにあつたのである。

自分の腦裡には幾多の疑問が湧いて來た。

代議制度はデモクラシーの原理に從つて多數決を基礎としてゐる。故に自分は先づこの多數決主義なるものの檢討を始めると共に、代議制度の運用に當るべき所謂國家の選良諸君の人物にも注意を拂ひ、制度とそれを運用する人間とを併せ研究した。

かうして暫く熱心に研究した結果、新時代の最も重要な產物である代議士の正體がはつきりと分つて來た。そして、この時に自分の腦裡に刻み込まれた姿は、今日に至るまで殆んど少しも變つてゐないのである。

代議制度の理論はそれだけ聞いてゐると如何にも結構に思へるが、畢竟は空論で人類の墮落現象にほかならぬ。自分がかやうな空論に溺れなくてすんだのは議會政治の實際を目のあたり見たお蔭である。

今日の西ヨーロッパ民主主義はマルキシズムの先驅であつて、デモクラシーが無くてはマルキシズムは考へられない。マルキシズムはペストであり、デモクラシーがその溫床になつたから黴菌が繁殖した。デモクラシーが形をとつて現はれたのが議會政治で、所謂『泥と火とで出來た怪物』であるが、その『火』は最早や燃え盡きたらしく、『泥』だけが遺憾ながら尙ほ殘つてゐるやうに見える。

自分が議會政治の問題をウィーンで勉强することが出來たのは非常に幸福で

あつた。ドイツに住んでゐたとすれば、問題を輕卒に解決する虞があつた。當時のドイツでは帝政思想が盛んに行はれてゐて、皇帝の權力を强めさへすれば國民も國家も幸福になり得るかの如く考へて、時代に眼を閉ぢ人類に背を向けた連中が勢力を張つてゐたから、『議會』と稱する制度の莫迦々々しさを初めて知つた場所がウィーンでなくベルリンであつたとすれば、自分も恐らく何か尤もらしい理由をつけてかやうな連中の仲間に加つてゐたかも知れないのである。

ところが、オーストリアではかういふことが出來なかつた。

オーストリアではそれほど簡單に極端から極端へ飛ぶことは出來なかつた。議會が惡いからといつて直ちに王室中心の運動へ奔ることは出來なかつた。議會は役に立たぬが、ハップスブルグ家は尙更役に立たぬのである。それ故『議會政治』を葬つただけでは駄目で、そのあとに何を持つて來るかといふ問題が出て來る。議會を廢すればハップスブルグ家が唯一の政權としてあとに殘らね

ばならぬが、これは考へるだに厭なことであつた。

これはオーストリアだけの獨特の事情であつたが、兎に角厄介で困難な問題であつた。そこで、自分はまだ若かつたが精を出して代議制度そのものをもつと根本から研究することにした。

眞つ先に考へさせられたのは、責任をとるものがゐないといふことである。たまたま、國家や國民に有害な議案が議會を通つても、それに就いて責任をとる者がゐない。どんな失敗をやつても、當の政府が辭職するか、聯立內閣の顏觸れを變へるか、それとも議會を解散するかすれば、それで一切合切事濟みである。それで責任をとつたことになるものであらうか。

多數黨といつても黨員の頭數は絕えず增減する。そんなものに責任を負はせようとしてもそれは駄目で、責任といふ觀念は元來が人格と結びついたものである。

然らば、政府の首班たるものが責任を負ふかといふと、政府は多數黨の意志

なり意向なりをそのまゝ施行するのであるから、そんな政府の行動に就いて一切の責任を負ふといふのは道理に合はない。

獨創の抱負經綸などはどうでもよく、沒分曉の議員連中に對して政府提出の法案が如何にも優れたものであることをよく說明して、その通過をはかるのが政府の首班たるものの仕事であるといふ者もある。

機敏に大方針を樹て、大決斷を下す手腕と沒分曉の議員連中を說伏する手腕とを兼ね具へてゐなければ、政治家の資格はないといふ者もある。

併し、ちよつとした偶然で集つた連中を說き落すことが出來なかつたからといつて、政治家の資格が無いとはいはれないのである。

事實、どんな經綸でも、その成果が世に現はれて本當に立派なものと知れるまでは、大衆にはまるで分らないのが常である。

凡そ古來の大事業にして、怠惰な大衆に對する偉人の顯著な抗議でないものはない。

然らば、議會に媚びることが出來ず、議會をして政府の提案に贊成させることが出來なかつた場合には、政治家は一體どうすればよいか。

議員を買收すべきか。

政府の提案した方策が國家百年の大計として是非とも斷行しなければならぬものであつても、議會が沒分曉で贊成して呉れなければ、政府はこれが實施を斷念して挂冠すべきではないか、それともなほ留任すべきか。

本當の政治家はかやうな場合に出所進退を誤らず、個人の面目と公共に對する義務とを使ひ分けるやうなことをしない。

恬然として居坐るやうな政治家は本當の政治家でなくて破廉恥な政治屋である。

責任は議會といふ得體の知れぬ群衆に在つて己れの知つたことでないとすれば、破廉恥な政治屋が政治を『賣物』にすることを天職と考へるに至るのも理の當然である。

要するに、代議制度の多數決主義は指導者原理と相容れざるものである。而も、世界は大衆の頭腦によつて進歩せず、偉人の頭腦によつて進歩するもので、將來に於ても人類の文化は偉大なる個人を要求するに違ひない。

現に、偉人の出世を待望すること今日ほど切實なるはないではないか。

代議制度の多數決主義は個人の權威を認めず、頭數に重きを置くから天然自然の原則たるアリストクラシーに反する。但し、こゝにいふアリストクラシーは今日の腐敗墮落した上流階級とは何の關係もないものである。

デモクラシーを基礎とする議會政治の弊害を知る者は少い。これは國民が概ね自分で考へたり調べたりせず、ユダヤ系新聞に誤られて事物の眞相に觸れ得ないからである。今日の政治は一般に極めて低調で、取るに足らぬ莫迦げたことが到る所に氾濫してゐるが、これも議會政治の弊害の一つである。議會政治に於ては、政治家の生命は抱負經綸を行ふことでなく、大衆の機嫌をとることであるから、本當の政治家は政界から引退し、斗筲の輩ばかりが集つて來て跋

扈するやうになる。

かやうな連中は腕も無ければ頭も無い。無能であることは自分でよく知つてゐる。それだけにかやうな連中には代議制度といふものが有り難いのである。議會政治では、偉人の力も天才も要らず、田舍の村長のこざかしい智慧だけで足りるからである。否、田舍の村長の智慧の方がペリクレスの智慧よりも歡ばれるのである。言ふまでもなく、かやうな連中は己れの行爲に就いて少しも責任を負はない。任期が來れば誰かと交代しなければならぬのは分つてゐるから、『政治家』として己れのやつてのけた莫迦げた事があとでどんな結果にならうと知らぬ顏でゐることが出來る。責任などは初めから考へてゐないのである。人物を測る尺度が縮まつて『大政治家』の數が殖える。これも墮落した時代の特徴である。政治家の人物が小さくなるのである。偉人は低能者や饒舌家の奴僕となることを拒み、多數卽ち愚衆の代表者は傑出した頭腦を何よりも强く憎むから、政治家の人物は議會の多數黨が幅をきかすに從つて小さくならざ

るを得ない。

議長も議員と同じに莫迦だといふことが愚衆の議會にとつては何よりの慰めで、それでこそ誰もが時々勝手な機智を閃めかして、したり顔することも出來るのである。まして、太郎兵衛でも議長になれるものなら、次郎兵衛だつてなれぬ道理はないではないか。

所謂『指導者』も多くは卑怯者である。これなどは現代の恥辱ともいふべきもので、やはりデモクラシーの弊害であるが、何か重大なことをきめる段になると、指導者なるものは所謂多數決の背後にかくれてしまふのである。

何か事を行ふ場合に、懸命に多數の賛成を求めて必要な仲間を確保すると共に、何時でも責任を回避し得るやうに逃げ路をつくつておく。こんな指導者を政界の護摩の灰といふのである。小人はかやうな政治行動を喜ぶが、眞面目で氣骨のある人物はこれを好まず、これを憎む。己れの行動に就いて責任を負はず、專ら辯護の口實を求めんとする者は人間の屑といはねばならぬ。國民の指

導者がかくの如く淺ましき徒輩のみとなれば、その弊害は忽ち現はれて、國民は思ひ切つたことをする勇氣がなく、重大な決意に奮ひ立つよりも甘んじて卑屈な不名譽に生きるやうになり、心身を擧げて大事を決行し得るものは一人もゐなくなるに違ひない。

人間が如何に澤山にゐても凡人ばかりでは一人の偉人に代り得ない。これは常に忘れてならぬことである。多數は常に暗愚を代表し、また、卑怯を代表する。百人の愚者は一人の賢者に如かず、卑怯者が何百人寄つても果斷の勇者にはなれないのである。

指導者に責任がないのであるから誰も彼も指導者になりたがる。素質の貧弱なことなどは忘れて、己れに不死の力があるかの如く考へ、國民のために働くのが天職であるかのやうに自惚れる者が殖えて來る。ところが、かやうな連中が殖えて來ると今度は順番がなかなか廻つて來なくなる。長い列を作つて自分の前に立つてゐる者の數を數へては溜息をつかざるを得ない。どうやら順番が

來さうな頃には命がなくなるかも知れないのである。そこで、自分の狙つてゐる椅子の空くのを待ち焦れ、何か醜い事件でも起きて列の前の方がすいて呉れるのを祈るやうになる。何時までも嚙りついて動かぬ者があれば、まるで神聖な約束を破られたやうに感じ、その厚かましい恥知らずがたうとう追ひ出されて暖い席を誰かに讓るまでは腹が立つて堪らないのである。併し、厚かましい恥知らずが出て行つたからといつて、それだけ順番が早く廻つて來るわけではない。追ひ出された者も、他の連中が騒ぎ立てたり罵つたりして邪魔をしさへしなければ、再び列に割り込んで順番の來るのを待つことになるから、後の方にゐる者が思ふ地位にありつくのは容易なことではない。

誰も責任を負はず、唯だ地位ばかりねらつてゐるやうな國家では、自然の結果として、政府の重要な役人が恐ろしく頻繁に更迭せられざるを得なくなるが、これは非常に忌むべきことであり、時として國家の破局を來すことさへある。更迭が頻繁であれば莫迦や無能な者が早く淘汰せられる利益はあるが、何

かの拍子で眞の指導者が政府の椅子についてゐた場合に、その指導者が何等の經綸を行ふ能はずして匆々に政府から去らねばならなくなるといふ不利もある。政黨內閣では本當に手腕のある人物はいやがられるのが常で、特に當人が政黨出身でなくて重要な地位についた場合は、政黨出身の役人は忽ちこれに對して共同戰線を布く。黨人は元來が仲間同志水入らずで居りたがるもので、少しでも己れより優れたものが外から入つて來ると、これを共同の公敵として憎む。他のことでは失敗ばかりしてゐても、かういふことにかけては非常に鋭敏に働くのが黨人の本能である。

かやうなわけであるから指導者の人物は益〻小さくならざるを得ない。これが國民や國家に與へる影響に就いては、自分自身かやうな政治家でない限り誰でも十分に推察し得る筈である。

オーストリアの議會政治は既に救ひ難く、度すべからざるものがあつた。總理大臣の任免は皇帝によつて行はれてゐたが、これだつて實は議會の意志

をそのまゝ執行したに過ぎず、各大臣の任免に至つては純西ヨーロッパ風といふべく、任免といふよりも椅子の取引であつた。デモクラシーの原則がこゝにも應用せられてゐて、閣僚は極めて頻繁に更迭した。大臣になつたかと思ふともう翌日には辭めてゐるのである。從つて『政治家』の貫祿もだんだんに下つて小型の政治屋ばかりが殘り、政治家の能力も唯だ政黨と妥協苟合する才能の如何によつて判斷せられ、下等な政治的取引を行ふことが出來さへすれば實務の手腕があるといふことになつた。

かくの如く、自分はウィーンに於て議會政治の內情を剩すところなく看て取ることが出來た。

所謂國家の選良の能力や知識をその使命と比較して見ることも大切である。勿論、それには否でも應でも選良の人物を立ち入つて檢討しなければならず、又、公共生活に議會政治といふ華やかな制度を採り入れた先人に對しても相當の吟味を加へなければならぬ。

國家の選良はその實力をどのやうに働かして祖國に仕へてゐるか、卽ち、選良の活動の技術的過程はどんなものか、といふことに就いても根本から研究して見る必要がある。

議會政治の內情に立ち入つて、その人物や制度の根本を飽くまでも公平に觀察すると、代議制度の全貌は甚だ慘めなものになつて來る。代議制度を擔ぐ連中は、二こと目には『公平』を持ち出して、調査でも意見でも公平でなければ取るに足らぬといふから、こちらもその積りで公平に研究しなければならぬが、兎に角、選良の諸君と、その慘めな存在を支配してゐる法則とを吟味して見れば、その結果は唯だ唯だ驚くべきものがあるのである。

公平に見て代議制度の原則ほど不當なものはない。

代議士は如何にして選ばれるものか、如何にして官途に上り、如何にして權勢にありつくものか、といふことは兎も角として、一般の希望や要求を少しでも充たしてやるために選ばれるのでないことは分り切つた話で、大衆には政治

の頭が無く、獨自の見識から適當の人物を代議士として選び出すといふことは出來るものでない。

輿論と稱せらるゝものは、多くは圖々しい所謂『啓蒙』(Aufklärung) から生れるもので、各人の體驗や認識から生れたのは少い。

宗教上の信條は所屬宗派の教育の結果であつて、宗教心そのものはこれとは別に人間の內實に潛んでゐる。それと同じく、大衆の政見は、大衆の感情や理性を人爲で執拗に歪曲する『政治教育』の結果である。

『政治教育』は卽ち宣傳で、宣傳の最も重要な機關は新聞である。新聞は主として『啓蒙』に任じ、謂はば一種の成人學校をなしてゐるが、而もこの學校は國家によつて營まれず、往々甚だ下等な連中の手に握られてゐるのである。自分は若い頃、ウィーンに於て大衆の教育機關たる新聞の所有者や新聞記者などを詳しく觀察する絕好の機會を與へられたが、先づ驚かざるを得なかつたことは、この下等な連中が國中に一大勢力を成してゐて、それが何事につけても

僅かの間に輿論といふものを拵へ上げ、世間の實際の希望や意見を捩ぢ枉げて、それと全く違ふものを造り出してしまふといふことである。この連中は、巷間の莫迦げた事件を東の間に國家の重大事件に揑つちあげることもあれば、反對に、國家の死活問題を世間の記憶から拔き取つて早く忘れさせてしまふこともあつた。

名も無い者が僅か一月も經たぬ間に俄に天下の名士になつて絶大の輿望を擔ひ、眞に優れた人物が一生かゝつても得ることの出來ぬやうな人氣をさらつてゆくこともある。さうかと思ふと、政界やその他の公共生活で從來信用せられてゐた人物が、まだ十分に働けるに拘らず簡單に時代から葬られ、或はこの上もない不德漢のやうに罵られて、その名が卑劣や破廉恥の代名詞になるやうなこともある。清廉潔白の人物を俄に四方八方から中傷し誹謗するのは、まるで何かの咒文に應じて一齊に汚物を投げかけるやうな遣り方で、この惡戯もすべてユダヤ人の細工であるが、兎に角、惡德新聞の害毒がどんなものであるかを

知るには、先づかやうな遣り方を見ておかねばならぬ。

惡德新聞は謂はば精神の匪賊であるから手段を選ばない。惡どい目的を達するためには何だつて利用する。

家庭の祕事を嗅ぎつけると、忽ち獵犬の本能を働かせて、哀れな犧牲者を葬り去るやうな痛ましい事件を發き出す。嗅いでも探しても當人の公私の生活から何一つ後暗いことを見つけ出すことが出來ないと、根も葉もないことを書き立てて中傷する。一旦新聞に書き立てられたことは幾ら取り消してもきれいに消えるものでなく、また新聞仲間が言ひ合せてかはるがはる何遍も書き立てれば、濡れ衣でも干す由がない。新聞の方ではかういふことをちやんと心得てゐて誹謗するのである。無論、無賴の徒輩のすることであるから、何事にも世間の合點し得るやうな動機などはない。他人を勝手に惡しざまに罵りながら、自分は墨汁にかくれる烏賊のやうに勿體らしい文句の雲にかくれて『新聞人の義務』とか、何とかいい加減な駄法螺を吹き、集會や議會など厄病神のやうな連

中の澤山集る所では、新聞人の特權とか『名譽』とかいふやうなことを喋言り立て、それを、又、集つた賤民が物々しく承認するのである。

所謂輿論の凡そ三分の二はこんな連中の揑造にかゝるもので、議會政治の女神はかうして出來た輿論の泡の中から生れたものである。

新聞が輿論を造り、輿論が議會政治を生む、この關係を詳しく述べて、嘘だらけごまかしだらけの內情を發かうとすれば幾ら書いても書き切れまいが、そんなことをしないで、現前の議會とその活動とを觀察するだけでも、代議制度が徹頭徹尾狂氣の產物であることは、頑迷な信者にもはつきり分る筈である。

代議制度は人間の過失の中でも甚だ莫迦げたものであり、又、甚だ危險なものである。これを知るには、西ヨーロッパのデモクラシーをゲルマン民族の眞のデモクラシーと比較して見るに如くはない。

西ヨーロッパのデモクラシーを基礎とする議會主義の特徵は、四、五百人の男性を——最近では女性をも——選び出して、これに國家の政治を支配させる

ところにある。この四、五百人の代議士が事實上の政府である。勿論、內閣といふものがあつて政府と稱して國務を指導してゐるが、それは唯だ外觀だけのことで、實際は、內閣も元來が議會によつて選ばれたものであるから、事前に議會の承認を經なければ何事をもなし得ない。最後の決定を下すものは政府でなく、常に議會の過半數であつて、政府は何事に對しても責任を負はず、議會の過半數の意志を執行するに過ぎないのである。そこで、政府は專ら議會の過半數と妥協苟合し、或は過半數を操縱する手腕の如何によつて政治能力を判定せられることになり、まるで乞食の如く多數黨の機嫌を取ることにこれ努めるやうになる。從つて、多數黨の好意を獲得することや、與黨として新しい多數黨を組織することなどが政府の最も重要な仕事になり、それに成功すれば、政府は又暫く居坐つて『國を治め』得るが、失敗すれば、內閣を明け渡さざるを得ない。政府の經綸の如何などはまるで問題でないのである。

卽ち、責任觀念の入り込む餘地は何所にもなく、これが結果は多言を要せず

して明瞭である。

議會は職業や能力を異にする五百人の選良が雜然と集つてゐるだけであるから、內部は支離滅裂で洵に憫むべきものがある。所謂國家の選良は、精神に於ても知力に於ても選良であるとは限らず、たいして賢くもない選擧人の投票用紙から直ちに澤山の有爲な政治家が生れて來るとは恐らく誰も考へないであらう。

そもそも普通選擧から天才が生れるなどといふのは愚の骨頂であつて、眞の政治家が國民中に一人でもゐるといふことさへ極く稀れなことで、偉人は百人も二百人も一度に世に出るものではない。それでなくとも、天才を排斥するは大衆の本能であつて、選擧によつて偉人を『發見』せんとするは、駱駝が針の孔を通るよりも困難であらう。

世界歷史を見ても、偉人は概ね自力によつて世に現はれてゐる。

然るに議會政治にあつては、凡庸な五百の頭顱が重大な國事を票決し、政府

を任免し、政府は何事にも一々議會の協贊を得なければならぬ。卽ち、政治は事實上、五百の凡人によつて行はれるのである。

政治の實際の運用でもやはり同じことである。

議員の天才の有無は問はないにしても、議會で處理すべく解決すべき問題は千差萬別種々雜多であるのに、當面の問題に就いて適當な知識や經驗を有する議員は幾らもゐないことを考へれば、かやうな議會に最後の決定權を委ねる政治制度の如何に不適當なものであるかが分るであらう。例へば、經濟上の重要措置を討議する委員會を見ると、經濟上の豫備知識を有する議員は委員全體の一割にも足りない。これは、つまり、全然資格の無い連中に問題の處理を委ねることにほかならぬのである。

他の問題でもやはり同じことで、議會の顏觸れがきまつてゐるから、最後の決定を與へるものは常に議員の多數を占めてゐる無知無能の連中である。處理すべき問題は公共生活のあらゆる方面に亙つてゐるから、これを審議すべき議

員の顔觸れも問題毎に變つて來なければならぬ筈で、外交上の高等政策を審議すべき者が交通問題をも處理するといふが如きはもともと有るべからざることである。何百年に一人現はれるかどうかといふやうな萬能の天才ならそれもよからうが、議會の選良は殘念ながらそんな『頭腦』を持ち合せてゐず、固陋で、自惚の强い、思ひあがつた生半可であり、最も質の惡い精神的娼婦であるから、偉人でさへ頭を惱ますやうな問題をも平氣で手輕に論議したり、片づけたりする。國家、國民の將來に關する重大政策を扱ふ場合でも、何か、かう、骨牌でも弄んでゐるやうで、民族の運命を問題にしてゐるやうには見えない。

併し、かやうな議會の代議士でも皆が皆最初から無責任ではないのである。確かにさうではないのである。

唯だ、議會政治にあつては、分りもせぬ問題をも否應なしに處理しなければならぬから、誰もがだんだん墮落して、『諸君、この問題は我等にはまるで分らぬ。少くとも自分には分らぬ』と、正直に白狀する勇氣のある者が一人もゐな

くなるのである。尤も、こんな勇氣のある者が一人や二人ゐたところで大勢はどうにもなるまい。もともとかやうな勇氣は誰も理解することの出來ないもので、莫迦正直といはれて皆の物嗤ひになるにきまつてゐる。名士の社會の內で自ら進んで莫迦になりたがる者のゐないことは、人間をよく知つてゐるものには合點のゆくことで、或る社會では、正直は常に莫迦と同義である。

かやうにして、最初は正直であつた代議士もだんだんと虛僞と欺瞞との惡風に染まり、自分一人反對したとて大局に變りはないのだから、と惡いと知りながら贊成するやうになり、遂には、自分も他の連中に較べればまだまだそんなに惡い人間でなく、自分が協力するのは、もつと惡い事態の發生を豫防するためである、などと思ひあがつたことを考へるやうになる。

勿論、中には異議を唱へて、成る程代議士は一々の問題に就いて特別の知識を持つてゐないが、當人の屬する政黨が方針を示して呉れるから、それに依つて意見を立てればよく、政黨には問題毎に特別委員會があり、それぞれ專門家

があつて十分に研究してゐる、といふものもあらう。

一應は尤もであるが、併し、それなら何だつて五百人もの人間を選擧するのか、重要問題を片づけるのに數人の智慧で足りるのなら、五百人なんて多數の人間は要らぬではないかと反問せざるを得なくなる。

實は、かく多數の人間を集めておくところに尨犬の正體があるのである。

デモクラシーを基礎とする今日の代議制度は天下の賢人を集めることを目的とせず、附和雷同の外に能のない愚人を集めることを目的とする。人間は莫迦なものほど操り易い。今日見るが如き惡い政黨政治が行はれ得るのも、黑幕が裏にかくれて責任を免れ得るのも、すべて操り易い愚人が集つてゐるからで、國家や國民に有害な政策を決定した場合でも、元兇は責任を莫迦な議會や政黨になすりつけておいて、自分は世間の目から遁れてしまふのである。

從つて、責任は事實上存在しない。責任は各人の義務と結びついたもので、饒舌家の烏合に外ならぬ議會の義務などと結びつけて考へ得るものではないの

である。

かくの如き代議制度を愛し喜ぶものは、唯だ虚偽を好み、日光を怖るゝ土龍の如き徒輩のみで、苟も責任を解し公明を尊ぶ廉直の政治家ならばこれを憎まざるを得ない。

畢竟、この種のデモクラシーは日光を怖れねばならぬ野心家の道具である。今日に於て既に然り、將來に於てもさうであらう。唯だユダヤ人のみが、ユダヤ人自身の如く不正直で汚はしいこの制度を喜び得るのである。

卐

ゲルマン民族の眞のデモクラシーは此の如き不正直な議會政治と全く趣を異にする。ゲルマン民族のデモクラシーでは、一人の指導者を自由に選擧して、これに行動の全責任を負はせる。事ごとに多數決で決するといふが如きことをせず、一人の指導者に決めさせる。一旦決めた以上は、指導者は生命がけでこ

れが全責任を負ふのである。

一人が全責任を負はねばならぬやうでは、そんな危い仕事に進んで身命をなげうつものはゐなからう、といふ者があるかも知れぬが、それに對しては唯だ次の如く答へればよい。

御心配は有り難いが、實は、下等な野心家や臆病者が拔け路や廻り路を經て國民を支配する地位に辿りつくことが出來ないやうにし、責任を重くして無能な者や柔弱な者は聞いただけでも尻込せざるを得ないやうにしてあるのがゲルマン民族のデモクラシーである。

ゲルマン民族のデモクラシーでは、斗筲の輩は、誤つて指導者の地位に就くことがあつても、長くはそこに留まり得ない。周圍のものが直ちに發見して容赦なく怒鳴りつけてしまふのである。『出て行け、卑怯者！ 足をひつ込めろ、階段が汚れる。歷史のパンテオンに登り得るものは英雄であつて、お前のやうな曲者ではない。』

以上は議會政治に關して自分の得た結論である。自分はこれがため二年もウィーンの議會に通つたが、かやうな結論を得てからは二度と傍聽に行かなかつた。

卐

ハップスブルグ帝國は近年になつて著しく衰亡の度を加へたが、その原因の一は議會政治にある。議會政治になつてからは、ドイツ民族は國内に於てだんだんと優位を失ひ、種々雜多な民族が互に競り合ふやうになり、議會に於ても色々な民族が跋扈してドイツ民族はだんだんと勢力を失ふに至つた。ドイツ民族の衰微は結局に於てオーストリア帝國の滅亡である。帝國の色々な魅力も最早や諸地方の分離運動を阻止し得ないといふことは、如何なる愚者にも前世紀の終り今世紀の初め頃に既にはつきりと分つてゐたのである。

實際にオーストリアの瓦解は到底免れぬところであつた。

オーストリアは國家の綱紀の弛緩するにつれて一般の輕蔑を買つた。ハンガリーのみならずスラヴ民族の諸州に至るまで、最早やオーストリアを自分等が組み立てて共同の君主を戴いてゐる國家とは考へず、オーストリアの衰微を自分等の恥辱とは感じてゐなかつた。却つて、老朽の兆候を見て喜び、健康の回復よりも死滅を願つてゐたのである。

それでもなほオーストリアが完全に崩潰するに至らなかつたのは、議會ではドイツ民族が卑屈にも讓歩に讓歩を重ねて强請を容れ、地方では雜多な民族が互に軋轢し合つてゐたからである。而も、大勢は日を逐うてドイツ民族に非であつた。オーストリアは社會の上流からだんだんとチェッコ化しつゝあつたが、特にフランツ・フェルディナンド太公が皇儲になつて勢力を振ひ始めてからは、このチェッコ化にも計畫と組織とが與へられるに至つた。未來の君主であるところの太公があらゆる手段を以てドイツ人排斥に加勢し、或はそれを促進し、少くとも保護したのであるから、純粹のドイツ人ばかり住んでゐた地方も、太公

の勢力が役人を通じて加はるに從ひ、徐々に、而も確實にチェッコ化して、國語の混合した危險地帶になつた。下オーストリアさへ急速にチェッコ化して、ウィーンはまるでチェッコ人の都のやうになつてしまつたのである。

フェルディナンド太公の家族はチェッコ語を使つてゐた。（太公の妃はチェッコの伯爵の娘で、太公と身分違ひの結婚をしたものであるが、元來がドイツ嫌ひを傳統とする社會の出身である）。太公の本願はギリシア正教を奉ずるロシアに對抗して中央ヨーロッパに加特力教を奉ずるスラヴ民族の國家を建設するにあつたのである。宗教を政略に利用するのは、從來に於てもハップスブルグ家の人々によつて屢〻企てられたことであるが、太公もまたこれを敢てした。而もその政略は、少くともドイツ民族から見れば甚だ邪惡なものであつて、ドイツ民族をも同時に壓迫することを目的としてゐたのである。

併し、これが結果は悉く期待に反して甚だ慘めなことになり、ハップスブルグ家も、加特力教會も、共に意外の應報を受けるに至つた。

ハップスブルグ家は帝位を喪ひ、ローマ法王廳はオーストリアといふ一大教區を失つたのである。

ハップスブルグ家が宗教をも政略に利用したから意外な幽靈が飛び出した。あらゆる手段によつて國内のドイツ民族を掃蕩せんとしたから、却つて國内に汎ドイツ運動が起きることになつたのである。

八十年代に入ると共にユダヤ主義を基礎とするマンチェスター自由主義がオーストリアでも盛んに行はれたが、これに對する最初の反動は社會的な理由からでなく國民的な動機から起きたのである。尤も、オーストリアでは何か反動の起きるときはいつでもかうである。だから自由主義の横行に對しても先づドイツ民族が自己保存の本能から斷乎として抵抗した。經濟上の理由はそのあとでだんだんと幅をきかすに至つたのである。かくしてオーストリアの混亂した政界の中から二つの政黨が出て來た。その一は多分に國民的であり、他の一は多分に社會的であつたが、共に甚だ興味の深い政黨であり、示唆に富む政黨で

あつた。これからこの二つの政黨に就いて述べる。

一八六六年の敗戰以來、ハップスブルグ家は絶えずドイツに對する復讐戰を考へてゐたが、メキシコのマックス皇帝が崩ぜられたためにフランスと提携して事を起すことが出來なくなつた。つまり、マックス皇帝が遠征に失敗せられて悲慘な最後を遂げられたのは、主としてナポレオン三世の無責任に因るものであるから、オーストリア人は當時一般にフランス人を怨んでゐたのである。それでもハップスブルグ家はなほ諦めずに絶えず機會を窺つてゐた。それ故、若し一八七〇—七一年戰爭があんな具合にドイツの勝利に終らなかつたとすれば、ウィーンの宮廷は或は中途から參戰してサドワの復讐を企てたかも知れない。それをしなかつたのは、ドイツの勝利が大き過ぎて手が出せなかつたからで、全く不思議で信じられぬやうな思ひがけぬ勝報が嘘でなく本當に戰場から到着すると、歴代中最も『英明』な君主は直ちに時の非を認められて、出來るだけ嬉しさうな顔をして見せられたのである。

ところで、この二年間の戰爭は尙ほ一つ非常に大きな奇蹟を成就してゐた。ハップスブルグ家が態度を變へてドイツに笑顏を見せたのは、心からでなく事情已むを得ざるためであつたが、オーストリアのドイツ民族は、これと違つてドイツの勝利を心から喜び、祖先の夢が立派な現實になつてオーストリアをドイツに合併すべき時機の到來せんとするのを、深い感動をもつて眺めたのである。

ケーニヒグレッツの敗戰も、既に朽ち果てたハップスブルグ帝國の腐臭に染まらぬ新しい國家を建設するに必要な條件であつた。悲痛ではあるが必要な前提であつた。少くとも心からドイツびいきのオーストリア人は普佛戰爭の頃からかやうに考へてゐた。これは否むべからざることで、實際にこれ等のオーストリア人は、ハップスブルグ家の歷史的使命が既に終りを告げてをり、新しい國家は心術高邁にして『ラインの冠』にふさはしい人物を皇帝に選ばねばならぬといふことを切實に痛感してゐたのである。曾て國運の衰微してゐた時代に

輝かしい興隆の象徴としてフリードリヒ大王を出した王家の子孫をこゝに皇帝として迎へ得れば、どんなに幸福であるかも知れない。心あるオーストリア人はかやうに考へてゐたのである。

ドイツ民族の本心は既に明瞭で最早や疑ふべくもない。そこで、普佛戰爭後ハップスブルグ家は、國内の危險なドイツ民族を、徐々に而も容赦なく剿滅することに肚を決めた。これはスラヴ化政策の必然の結果であるが、こんなことをしてドイツ民族の憤激を買はない筈はない。剿滅せられんとする民族はこゝに奮起して、ドイツ近代史上に未だ曾て見なかつたほど猛烈に抵抗し始めたのである。

心根に於て國民的であり愛國的である人々がこゝに初めて叛逆者になつた。叛逆者とはいふものの、國民に對して叛逆したのでも、國家に對して叛逆したのでもなく、唯だ同胞民族の沒落を來す政治の遣り方に對して叛逆したのである。

かくして、ドイツ近代史上に於てこゝに初めて在來の王黨的愛國主義と國民的愛國主義との區別を見るに至つた。

そもそも、國權は國民の利益と合致し、或は少くとも國民に危害を加へないものでなくてはならぬ。さもなくば尊敬と防衛とを要求し得ない。このことを明かにしたのは、九十年代にオーストリアのドイツ民族によつて捲き起された汎ドイツ運動の功績である。

國權なるものは國權の爲めに存在するものではない。さもなくば如何なる暴政も批難するに當らず、神聖なものになるであらう。

政府が權力を利用して民族を滅ぼさんとする場合に、これに對して反抗するのはその民族の權利であり、又義務である。

如何に邪惡な國權でも、或は如何に屢〻國民の要求を裏切るやうな國權でも、國權である限りは維持しなければならぬものと心得るのがあらゆる政府に共通した傾向であるから、自己保存の本能の命ずるところに從つてかやうな政

府を打倒し、自由や獨立を確保せんとする民族は、政府のそれと同じ武器を以て戰はねばならぬ。政府が『合法的な手段』を用ひてゐる間は、民族の方でも『合法的』に戰ふべきであらうが、壓制する者が非合法の手段を用ひれば、壓制せらるゝ者も躊躇するところなくそれを用ひて戰ふべきである。

そもそも、人生の最高目的は種の保存であつて、國家の維持でもなければ政府の維持でもない。誰もこの道理を忘れてはならぬ。

種が政府によつて抑壓せられ、或は全く剿滅せられることになつては、手段の合法、非合法などは最早や問題でない。政府の手段は尙ほ表面上『合法的』であつても、壓制を受ける者の方ではあらゆる武器を用ひて戰つて差し支へない。種の保存といふ立派な理由がこれを許すのである。

かやうな道理があればこそ古來幾多の民族は、或は內より壓制を蒙り或は外より壓迫を受けた場合に、敢然反抗して史上に見る如き自由戰爭を起したのである。

人間の權利は國家の權利を破る。

人間の權利のために戰つて敗れた民族は地上の存在を續け得ない。自己の生存のために戰ふ用意も能力もない者は、公正久遠の攝理によつて滅亡の運命を與へられてゐるのである。

世界は怯懦な民族のためには存在しない。

卐

暴虐な政治は動もすれば所謂『合法』を裝ひたがるものであるが、これを最も切實明瞭に示してゐたのがオーストリアの政治である。

當時のオーストリアでは、ドイツ人以外の民族が多數を占めてゐる反ドイツ的な議會と、同じく反ドイツ的な王室とが所謂合法的な國權の基礎になつてゐた。かやうな議會と王室とが國家のあらゆる權威を具現してゐたのである。それ故、王室や議會のなすがまゝに放つて置けば、オーストリアに於けるドイツ

民族の運命は決つてしまふ。然るに、『合法的』な方法に拘泥したり、國權そのものを崇拜したりする連中に言はせれば、すべて反抗は合法的な手段を以てしては爲し得ないものであるから、これは止めねばならぬことになる。併し、それではオーストリアに於けるドイツ民族は否でも應でも近い將來に滅亡せざるを得ない。事實に於てドイツ民族はオーストリアの崩潰によつて漸くかやうな運命から救はれたのである。

勿論、世には眼鏡をかけた學者がある。同胞國民のために死なうとせず、自說のために死にたがる連中で、人間が法律を作つたことを忘れ、人間の作つた法律でも一旦出來てしまへば、それからは人間が法律のために存在するかのやうなことを言ふ。

此の如き邪見を一掃して、杓子定規の形式論者や國家を咒物の如く崇拜する連中の迷夢を覺醒したのは、當時のオーストリアに於ける汎ドイツ運動の功績である。

ハップスブルグ家があらゆる手段を盡してドイツ民族の根絶を圖ると、汎ドイツ運動は愈〻無遠慮に此の『高貴な』王室に對して反擊を加へ始めた。國家の腐肉に初めて探針を差し込み、世人百千の眼を開き、祖國愛といふ立派な概念を王朝といふ淺ましい概念から引き離したのも、この汎ドイツ運動の功績である。

併し、この汎ドイツ運動も、最初は恰も燎原の火の如く熾んで、將に一世を風靡せんとする勢を示してゐたが、長くは續かず、自分がウィーンに來た頃には既に凋落して、基督教社會黨がいつの間にかこれに取つて代り、汎ドイツ運動は殆んど全く有るか無きかの哀れな狀態になつてゐたのである。

汎ドイツ運動が起きたかと思へば忽ち衰へ、代つて基督教社會黨が日の出の勢で乘り出して來たのには何か深い事情があるに違ひない。自分はその間の消息を探ることに努めた。

ウィーンに來た當時の自分は心から汎ドイツ運動に共鳴してゐた。

議會で誰かが憚るところなく『ホーヘンツォルレルン萬歳』と叫ぶのを聞くと、自分は非常な感激と歡喜とを覺えたものである。オーストリアは今こそドイッ帝國から分れてゐるが、これは一時のことで、オーストリアが帝國の構成分子たることに變りはない、と機會のある毎に畏るゝところなく叫ぶのを聞くと、自分は心から汎ドイッ黨を信頼する氣になつたものである。また、汎ドイッ黨がドイッ民族に關する問題に於て、常に旗幟を鮮明にして斷じて妥協しないのを見ると、自分は、ドイッ民族の救濟を諦めるのは尙ほ早く、まだまだ一縷の望がある、と思つたものである。それ故、自分には、この汎ドイッ運動があのやうに華々しく勃興したに拘らず忽ちにして無慘に凋落するに至つた理由が分らず、基督教社會黨があのやうな大勢力を占めるに至つた理由も分らなかつた。基督教社會黨は丁度この頃が全盛であつたやうである。

そこで、自分は汎ドイッ黨と基督教社會黨との比較研究を始め、第一着手として先づ、それぞれ黨の指導者とも創立者ともいふべき二人の人物、卽ちゲォ

ルグ・フォン・シェーネレルとカール・リューゲル博士とを比較して見たのである。

人間としては二人とも所謂議會政治家の水準を遙かに拔いてをり、生活も廉潔で、腐敗墮落した政界にあつて一度も醜聞を立てられたことがない。自分は初めは汎ドイツ黨のシェーネレルが好きであつたが、基督敎社會黨の首領もだんだんと好きになつた。

二人の能力を比較して見ると、原則的な問題を徹底的に考察する點では確かにシェーネレルの方がリューゲルよりも優れてゐた。シェーネレルはオーストリアの滅亡の避け難きことを誰よりもはつきりと見通してゐた。若しオーストリアのみならずドイツでも、ハップスブルグ帝國に關するシェーネレルの警告にもつと深く耳を傾けてゐたならば、世界大戰でヨーロッパ全體を敵に廻して戰はねばならぬやうな慘めなことにはならなかつたかも知れないのである。

併し、惜しいことに、シェーネレルは問題の核心を摑むことには長じてゐた

が、それだけに人間を見誤ることが多かつた。

リューゲル博士はこれと反對であつた。

リューゲル博士は世間を知り人生の表裏に通じた稀有の人物であつて、從つて、すること爲すことがすべて實際的であつたが、シェーネレルには此の實際的手腕がなかつた。汎ドイツ主義者シェーネレルの考へたことは理論上から見ればすべて正しかつたが、この理論上の認識を大衆に傳へることが出來なかつた。物分りの惡い大衆に分り易く說いてやるといふことが出來なかつた。それ故、シェーネレルの考へてゐたことは遂に現實になり得ず、單に豫言者の智慧たるに留つたのである。

又、シェーネレルは人生の表裏に通じてゐなかつたから、新しい運動や古い制度の效力をも見誤らざるを得なかつた。

汎ドイツ運動も歸するところは世界觀の問題である。このことはシェーネレルも知つてゐたに違ひないが、世界觀といふものは殆んど宗教的な信念であつ

て、これを支持するものは就中國民大衆であるといふことがシェーネレルには分らなかつたのである。

所謂『ブルジョア階級』は失ふを恐れて保守に傾きたがる。これは經濟上の利害關係が然らしめるもので、從つて鬪志が鈍い。然るにシェーネレルには遺憾ながらこのことが分らなかつた。

總じて世界觀といふものは、大衆が新しい主義を支持して必要な鬪爭を引き受けて吳れるのでなければ、到底勝利の見込はない。

シェーネレルが社會問題を十分に理解し得なかつたのも、かやうな下層大衆の重要性を理解しなかつたからである。

リューゲル博士はこれ等の點に於てシェーネレルと反對であつた。

リューゲル博士は人生の表裏に通じてゐたから、あらゆる勢力を正しく評價した。從つて、現存の制度を輕視することなく、却つてこれを目的達成の手段に利用し得たのである。

今日のブルジョア階級には政治的闘爭力が無い。有つても甚だ微弱で、そんなものに頼つてゐては新運動の勝利は覺束ない。これに反して中間階級は、その生活を絶えず脅威せられて既に沒落の危機に瀕して居り、從つて闘志も熾んである。それ故、リューゲル博士は政治運動の重點をこの階級に置いた。同時に、博士は現存の權力をも利用し、强大な施設をも味方に引き入れてその勢力を出來るだけ運動に活用することを忘れなかつたのである。

リューゲル博士は沒落に瀕した中間階級を中心に新黨を組織して、旺盛な犧牲的精神と强靭な戰闘力とを備へた鞏固な支持者層を確保すると共に、加特力教會へも極めて巧妙に接近して忽ち多數の青年僧侶を味方に引き入れた。そこで、從來の加特力黨は政戰場裡から退却するか、或はもつと賢く新黨に參加して徐ろに頽勢を挽回するか、何れかの方法を執らざるを得なくなつた。

リューゲル博士はかやうにやり手であつたが、唯だこれだけをリューゲルといふ人物の身上と見るのは大きな間違ひで、策士には違ひなかつたが、偉大な

天才的改革者の性質をも具へてゐたのである。併し、する事も考へる事も甚だ實際的であつて、自身の能力をも知り過ぎるほど知つてゐたから、活動が地味になり、天馬空を行くの趣を缺くに至つたのは當然のことである。

本當に優秀な人物であつたリューゲル博士の追求した目的は、徹頭徹尾實際的なものであつた。博士は先づウィーンを手に入れようと考へた。オーストリアは既に腐りかけた身體であり、ウィーンはその心臟である。病み衰へ老いさらばへた身體が僅かに餘命を保つてゐるのもこの心臟がなほ鼓動してゐるからで、心臟が丈夫になれば全身に活氣が蘇つて來るに違ひない。かやうな考へ方は原則としては正しいが、併し、オーストリアの場合では最早やそんな事を考へてゐる餘裕はなかつたのである。つまり手遲れであつた。

かういふところに博士の弱點がある。

ウィーン市長としてリューゲル博士の成就した仕事は不滅といつても過言でないが、さういふ仕事によつてもオーストリアを救ふことは最早や出來なかつ

た。すべて遲すぎたのである。

この點では政敵シェーネレルの方が賢かつた。

リューゲル博士のウィーン復興は立派に成功したが、それによつてオーストリアを救ふことは遂に出來なかつた。リューゲル博士の期待は實現しなかつたのである。

シェーネレルの汎ドイツ運動は遂に失敗に終つたが、心配してゐた通りオーストリアは遂に滅亡した。シェーネレルの豫想は遺憾ながら恐ろしいまでに的中したのである。

此の如く二人ともその遠大な目的を達し得なかつた。リューゲルはオーストリアを救ひ得ず、シェーネレルはドイツ民族の滅亡を防ぎ得なかつたのである。

兩者失敗の原因を明かにすることは、今日、特に我が黨に取つて非常に大切である。今日の情勢は幾多の點に於て當時のそれに似てゐるから、兩者失敗の原因を明かにすれば、同樣の過誤を再び繰り返さなくてすむであらう。

オーストリアに於ける汎ドイツ運動の崩潰には、自分の見るところによれば三つの原因がある。

第一は、元來革命運動であるべき汎ドイツ運動が社會問題の意義を明瞭に理解してゐなかつたことである。

シェーネレルとその汎ドイツ黨とはブルジョア階級を根城にしたから、運動は活氣のない生溫いものにならざるを得なかつた。

ドイツのブルジョア階級、特にその上層は非常におとなしくして、內政問題に對しては成るべく嘴を容れないやうにし、まさか、誰も彼も意識した上でさうするわけでもなからうが、殆んど完全な自己否定に近いほどの事なかれ主義を執る。かやうな態度は天下泰平の善政時代では國家に甚だ有益であるが、惡政時代では甚だ有害である。それ故、汎ドイツ運動も本氣に戰ふ積りなら先づ大衆を味方にすべきであつた。如何なる運動も元氣がなくてはやがて衰へざるを得ない。而も、この元氣を與へるものは大衆である。然るに汎ドイツ運動は

大衆を味方にしようとしなかつたから最初から元氣がなかつたのである。

大衆を味方にしなければならぬといふ原則を全く無視して運動を起したのは取り返しのつかぬ失策であつた。如何なる運動でも、生溫いブルジョアが澤山入つて來れば、運動の方向は常にこの連中によつて定められることになるから、大衆の中から澤山の味方を集め得る見込はまるで立たず、從つて運動は革命たり得ずして單に批評や非難を事とするやうになり、宗教的な信念や犧牲的精神は何所にも見當らず、却つて在來の勢力に所謂『積極的に』協力して、言ひ換へれば、だんだんと鬪爭の手を緩めながら現狀を承認して苟合妥協せんとする努力が現はれて來る。

汎ドイツ運動も正にこの通りであつた。同志を普く大衆に求めることをしなかつたから、汎ドイツ運動は遂に『ブルジョア的で、上品で、生溫い急進主義の運動』になり終つたのである。

汎ドイツ運動の急速な凋落の第二の原因は上に述べた第一の過誤から生れた

ものである。

汎ドイツ運動勃興當時に於けるオーストリアの情勢は、ドイツ民族に取つて既に絶望的なものであつた。議會は逐年漸次にドイツ民族を徐々に剿滅する機關になつてゐた。それ故、何か最後の手段を講じてこの機關を廢止するのでなければ、ドイツ民族を救ひ得る見込はまるで立たなかつたのである。

かくして、汎ドイツ黨は極めて重大な問題に逢着するに至つた。議會を解消するにはどうしたらよいか。議會に入つて行つて、謂はばこれを『内から喰ひ破る』べきか、それとも外から叩きこはすべきか。

汎ドイツ黨は議會に入つて行つた。そしてそこから叩き出されたのである。

考へて見れば、汎ドイツ黨としては議會に入つて行くほかなかつたであらう。議會のやうな一大勢力を外から叩きこはすには、不撓不屈の勇氣が要り、無數の犧牲を覺悟してかゝらねばならぬ。角を摑んで牛と鬪ふやうなもので、幾度か激しく突かれ、投げ倒され、恐らく手も折れ、足も傷つくであらうが、

かやうな惡戰苦鬪にもめげずに勇敢に攻擊する者には必ず勝利の榮冠が輝く。新しい鬪士を得て犧牲を厭はずに飽くまでも戰ふのでなければ議會を對手にして勝つことはむづかしい。

それには大衆の子弟が鬪爭に參加して呉れねばならぬ。血塗れになりながら斷乎たる決意を以て執拗に最後まで戰ひ得るものは、ひとり、此の大衆の子弟のみである。

然るに、汎ドイツ黨は大衆を摑んでゐなかつた、それ故、議會へ入つて行くほかなかつたのである。

汎ドイツ黨が議會主義に奔つたのは、右のやうなことを十分に考へぬいた揚句であらうとか、長いこと煩悶に煩悶した揚句であらうとかいふのは間違ひで、そんなことはまるでなかつた。惡い制度と知りながらそれへ參加するのが既に誤であるが、汎ドイツ黨はさういふ行動の意味と結果とに就いて十分に考へてゐなかつた。『全國民の廣場』たる議政壇場で演說することが出來れば、

國民大衆を啓蒙することも容易であらうと思ひ、害惡の根源はこれを內より攻撃する方が外から攻撃するよりも有效であるに違ひないと信じ、不可侵權の保護があるから議會では何を喋言つても安全であり、從つて鬪士の攻撃力も增大するであらうと考へたのである。

ところが、實際はまるで違つてゐた。

汎ドイツ黨の議員が國民に對して演說した廣場は豫期に反して少しも擴がらず、却つて狹くなつてゐた。議員の演說を聞いて吳れるものは、他の議員や傍聽人に限られて居り、然らざればこれを新聞で讀む者に限られてゐるからである。

聽衆に對して直接に訴へ得る最大の廣場は議會の議場でなくて、公開の國民大會である。

國民大會では數千の聽衆が專ら演說を聞くためにやつて來るが、議會の議場には唯だ數百の議員が集つてゐるに過ぎず、それも概ね日當を貰ふためであつ

て『國民代表』某々の智慧に啓發して貰ふために出席してゐるのではないのである。

おまけに、議會では聽衆の顏觸れが常に同じである。頭もなければ勉强する氣もなく、何時まで經つても賢くならない聽衆が坐つてゐるのである。

かやうな國民代表が眞理を尊び、眞理のために身命を擲つといふことは斷じて有り得ぬことで、次回の選擧で必ず當選し得るといふ希望が成り立たなければ轉向する者は無い。所屬の政黨が次回の選擧でどうやら失敗しさうだと思はれると、そこで初めて男らしさを裝つて脫黨し、成功しさうな政黨を物色してそれに接近する。そして、道德上の理由を口實にして黨籍を變へるのである。だからして、何れかの政黨が既に國民の人氣を失つて、どう見ても選擧で負けさうになつてゐると、いつでも政客の大移動が生じる。議會鼠が政黨船を見棄てるのである。勿論、眞理を求めて行くのでもなければ良心に從つて移るのでもなく、まるで南京蟲のやうに專ら千里眼的な天分によつて大切な時機を豫知

しながら他の政黨の溫かい寢臺へ匐ひ込むのである。

此の如き選良の集つた『廣場』で演說するのは、それこそ本當に豚に眞珠で、勞して功なく、全く無駄なことである。事實またその通りであつた。汎ドイツ黨の代議士は聲を嗄らして怒鳴つたが、效果はまるで無かつたのである。

新聞は新聞で、汎ドイツ黨員の演說といへば全く默殺して書かなかつた。書いたのがあるかと思へば滅茶苦茶に寸斷して前後の連絡も分らぬものにしてある。或は故意に意味を變へてあつたり、甚だしきは全く意味の無いものにしてあつた。從つて、世間は汎ドイツ運動の眞意に就いて惡い印象ばかり受けたのである。誰が何所でどんなことを喋言つたにしても、一般大衆は唯だ新聞に載つてゐることしか知らない。然るに、新聞に載つてゐるのは演說をところどころ勝手に切り拔いたものであつて、意味が通らぬから讀んで分らぬばかりでなく、却つて誤解をおこさせた。おまけに、黨員が實際に演說した唯一の廣場には五百の議會人がゐただけである。汎ドイツ黨の努力の畢竟徒勞に終るべきは

これだけでも既に明白であつた。

その上に、もつと惡いことがあつた。

元來、汎ドイツ運動の目的は新しい政黨の組織でなく、新しい世界觀の展開でなければならぬ。このことを最初から十分に理解してゐなければ、汎ドイツ運動は失敗に終らざるを得ない。世界觀があつて初めて大鬪爭を遂行するに足る精神力が湧き出て來るのである。從つて、運動を率ゐる者も勇氣のある優秀な人物でなければならぬ。

世界觀の鬪爭はこれを率ゐる者が犧牲を畏れざる英傑であつて初めて成功する。然らざれば決死の鬪士は跟いて來ず、影をひそめて一人もゐなくなるであらう。專ら一身の利害を計る者には公共を思ふ餘裕のある道理がない。運動の先頭に立つ者は現世の毀譽褒貶を度外に附し、知己を百年の後世に俟つ覺悟が無くてはならぬ。如何なる運動でも、專ら俗界の地位や利權を追求すれば、下等な人間がだんだんと割り込んで來るから、政黨としては羽振りがよくなる

が、日傭勞働者のやうな政治屋ばかりが氾濫して、昔の面影は黨内のどこにも見ることが出來ず、最初から戰つて來た誠實な鬪士は後から割り込んで來た連中に排斥せられ『煩さい邪魔者』扱ひを受けるやうになる。かうなれば運動の『使命』もお終ひである。

汎ドイツ運動が議會に身を賣つてその代りに得たものは、立派な指導者や鬪士でなくて『議會人』であつた。かくして、汎ドイツ黨はその日暮しの平凡な政黨に墮し、殉國の氣魄を以て艱難を克服すべき力を失ひ、戰ふことの代りに『雄辯』を練り『駈引』を覺え、黨員は議會演說といふ『精神的な』武器を以て新しい世界觀のために戰へば危險も無く立派に義務を果し得るかの如く考へるに至り、信念のためなら勝負を度外に附し、損得を顧みず、必要とあらば生命をもかけて惜まぬといふ氣概の士は何所にも見られなかつた。

汎ドイツ黨が議會に席を占めると、院外の同志は奇蹟を期待し始めた。勿論そんなものは現はれもしなかつたが、現はれる道理もなかつた。そこで、同志

はあせりだした。汎ドイツ黨の議員の口から聽き得たことは少しも選擧人の期待に副はないからである。政敵の新聞が汎ドイツ黨員の活動を國民に忠實に報道してやらなかつたから、かうなるのも當然であらう。

汎ドイツ黨の代議士は、中央や地方の議會で生溫るい『革命鬪爭』を行ふことに興味を覺えるにつれて、いよいよ大衆の啓蒙といふ仕事から遠ざかつてしまつた。大衆對手の仕事は演說ほど容易でないからである。

大衆を味方にするには大衆と接觸してこれに直接に訴へる國民大會によるに越したことはないが、汎ドイツ黨は今述べたやうなわけでこの國民大會をもだんだんと退けてしまつたのである。

大衆集會所の麥酒の卓子に飛び上がつて怒鳴つてゐたのが議會の演壇で喋言りだし、國民よりも所謂『選良』を對手に演說するやうになると、汎ドイツ運動も國民運動でなくなり、屁理窟を弄ぶ討論倶樂部になり終つた。

大會で直接に大衆に對して運動の眞意を徹底させれば、新聞が世間に流布し

た惡評も消えたであらうが、それをしなかつたから『汎ドイツ』といふ言葉は惡い印象を與へるに至つたのである。

今日、文筆の戰士を以て自任する人々は、古來筆の先で指導せられた大革命なるものは一つもないといふことを篤と心得てゐて貰ひたいものである。

筆は唯だ革命に理論を與へるために使はれるだけで、宗教上でも政治上でも歴史的な大變動を捲き起したものは、古今東西常に雄辯の魅力にほかならなかつたのである。

特に、大衆は演說の力によらなければ動くものでない。凡そ、古今の大運動は、一として大衆運動たらざるはなく、すべて人間の情熱や感動が冷たい貧苦の壓迫を押し返し、或は火を吐く辯舌に煽られて火山の如く爆發したものにほかならず、文章屋や伊達者などの鬱さ晴らしではないのである。

國民の運命を左右し得るものは唯だ情熱の嵐であり、國民の情熱を喚び起し得るものは自ら情熱を抱けるものである。情熱を抱けるものでなければ、國民

の心の扉を叩き破る鐵鎚の如き言葉を吐き得ない。

情熱もなく、口に言葉のなき者は天意を宣べ得ないものである。

文筆の士は、それぞれ分相應にインキ壺を抱へて『理論』を考へるのは差し支へないが、指導者としての天分を持たず又選ばれてもゐないことは自らよく心得てゐなければならぬ。

總じて大目的を有する運動は、國民大衆に對する接觸を失はぬやうに絶えず細心に努力しなければならぬ。そして、如何なる問題をも大衆本位の立場から處理しなければならぬ。

大衆の反感を買ふやうなことは心してこれを避けねばならぬ。『大衆を煽動する』必要からかく言ふのではない。如何に高遠なる理想と雖も、大衆の威力を無視しては實現し得ないからである。

苟も大事を成さんとすれば現實の困難を冒して進まねばならぬ。荊棘の道を避けるのは目的を諦めることである。

汎ドイツ黨は議會政治に奔つて運動の重點を國民よりも議會に置いたから、一時の安價な成功は收めることが出來たが、將來に發展することが出來なくなつた。卽ち、易きに就いて最後の勝利を失つたのである。

ドイツ民族の指導を天職として勃興したかに思はれた汎ドイツ運動がやがて崩潰するに至つた原因の一つは、此の如く大衆に着目せずして議會政治に奔つたところにある。自分はウィーンにゐた頃に深く研究してこれを知ることが出來たのである。

社會問題を理解せずして運動の根城をブルジョアに置いたことと、大衆に着目せずして議會政治に奔つたこととは共に汎ドイツ運動の挫折した原因であるが、この二つの問には密接な關係がある。革命の動力が何であるかを知らぬから大衆の何であるかを知らず、大衆の何であるかを知らぬから、社會問題に興味を有せず、從つて大衆の魂を摑むことが出來なくなり、議會政治へ奔らざるを得なかつたのである。

古來の革命に於て大衆が如何なる役目を演じ、如何なる威力を示したかを知つてをれば、汎ドイッ黨は社會問題の處理でも宣傳でももつと旨くやつたに違ひなく、運動の重點を議會に置かず、工場や街頭に置いたであらう。

汎ドイッ運動の失敗には尙ほ一つ原因がある。これが第三の過誤であるが、禍根はやはり大衆の何であるかを知らぬところにある。元來大衆は偉人の指圖に從つて一旦一定の方向へ動き出すと、それからは恰も機勢車（はずみぐるま）の如く働いて運動に機勢をつけ、惰性を與へるものである。

汎ドイッ黨はかやうな大衆の心理を知らなかつたから、加特力教會を敵として惡戰苦鬪するに至つた。

汎ドイッ黨が加特力教會を猛烈に攻擊したのは、左の如き理由によるのである。

ハップスブルグ家はオーストリアを變じてスラヴ民族の國たらしめんとし、これがためには手段を選ばなかつた。良心を失つたハップスブルグ家は宗教上

の制度をすら新しい『國家觀念』のために利用して憚らなかつたのである。

オーストリア全般をスラヴ化せんがために執つた手段の一例はチェッコの僧職や僧侶を利用したことで、どんな具合にやつたかといふと、ドイツ人の居住地域にチェッコ人の僧侶を任用する。すると、このチェッコ人の僧侶は教會の事をそつちのけにして着々とチェッコ民族の利益ばかりを圖り、率先してドイツ排斥を鼓吹し、ドイツ民族の間にチェッコ民族の勢力を扶植した。然るに、遺憾ながらドイツ人の僧侶はかやうな成り行に對して殆んど施す術を知らなかつた。チェッコ人の僧侶がかやうなことをする以上はドイツ人の僧侶も進んで爲すところがなければならぬ。然るにドイツ人の僧侶は何も爲し得なかつたのみならず、對手の攻擊に對して必要な抵抗をさへ行ひ得なかつた。かくしてドイツ民族は、一方では宗教の惡用といふ方法によつて徐々に壓迫せられ、他方では抵抗の不足によつて間斷なく後退せざるを得なくなつたのである。

これはほんの一例であるが、一事が萬事で、殘念ながら何もかもかういつた

具合であつた。

高級の加特力僧侶を初めとして誰も彼もハップスブルグ家の反ドイツ政策に少しも反對せず、ドイツ民族の利益の擁護を全く忘却してゐたのである。

加特力教會はドイツ民族の權利を不法に蹂躙せるものと言はざるを得なかつた。加特力教會はドイツ民族に與せず、不法にも敵側に廻つてゐるやうに思はれたのである。シェーネレルの意見によれば、加特力教會を指導するものがドイツ國内にゐないといふことがそもそもの間違ひで、ドイツ國内にゐないからドイツ民族の要求に反對するやうになるのである。

所謂文化の問題が何時の間にか政治の問題になるのは、當時のオーストリアでは珍らしいことでなかつたが、教會問題もその例に洩れず、宗教問題から政治問題になつた。汎ドイツ黨が加特力教會を攻擊したのは、科學やその他に對する教會の態度が怪しからぬからといふのでなく、教會がドイツ民族の權利を十分に擁護せず、逆に就中スラヴ民族の尊大と貪慾とを絶えず助長してゐたか

らである。

ゲオルグ・シェーネレルは因循な人物でなかつたから、自分を措いてドイツ民族を救ひ得るものは他にないといふ信念の下に教會と戰つた。この鬪爭が所謂『ローマよりの離脱』運動で、如何にも困難ではあるが必ず敵の牙城を粉碎せずには止まぬものがあるやうに思はれた。これに成功すれば、ドイツに於ける宗教の軋轢は解消して國力は無限に增進したに違ひない。

然るに鬪爭の結果は豫期に反してゐた。出發點が誤つてゐたからである。

ドイツ人加特力僧侶の民族觀念が非ドイツ人、特にチェッコ人僧侶のそれよりも薄く、ドイツ民族の利益に關する問題に於て必要な抵抗力を現はし得なかつたのは疑を容れざる事實である。

ドイツ民族の利益を積極的に擁護するといふことはドイツ人僧侶の夢想だにしなかつたところで、これもまた否むべからざる事實である。

併し、これは强ち僧侶に限つたことではない。一般にドイツ人は自民族に對

しても他民族に對すると同じに客觀的な態度を取る惡習がある。ドイツ人全體に有害な傾向であるが、僧侶の態度も畢竟はこの傾向の現はれたものにほかならない。これも識者の認めざるを得ざる事實である。

チェッコ人僧侶の態度は、チェッコ民族に對して主觀的で、教會に對して客觀的であつたが、ドイツ人僧侶の態度は教會に對して主觀的で、ドイツ民族に對して客觀的であつた。殘念ながら、他の方面に於てもドイツ人は一般にかくの如き態度を取るのである。

かくの如き態度は、唯だ加特力僧侶だけの傳統的特性ではなくして、ドイツの政治や文化を初めとして殆んどあらゆる方面に何時の間にか浸潤した傾向である。

試みに、ドイツの官憲が國家の獨立を回復せんとする國民運動に對して執つた態度と、他國の官憲がかやうな場合に執る態度とを比べて見よ。ドイツでは『國權』の名の下に國民の利益を蹂躙するのが五年前から當然のこと、否、手

柄にさへなつてゐるが、一體何處の國にこんなことをする官憲があらうか。例へば、今日のユダヤ人問題に對する新舊兩教會の態度はどうか。國民の利害とも、宗教の眞の要求とも合致してゐないではないか。どんなに小さな問題でもユダヤ人のこととなれば決して放つておかないユダヤ人法師の態度と、ドイツに於ける新舊兩派の僧侶の大部分の態度とを比べて見れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

ドイツ人の客觀的な態度は、特に抽象的な觀念の主張に現はれてゐる。『國權』、『デモクラシー』、『平和主義』、『國際連帶』などはすべて空虛な概念に過ぎぬが、それがドイツでは固定して教理となり、主義となり、國民一般の死活問題も專らこれ等の主義から判斷せられるに至つた。

何でも彼でも先入見の立場から見るのは非常な間違ひで、こんなことをすると、自分の信條と客觀的に矛盾してゐる事柄を主觀的に吟味することが出來なくなり、遂に手段と目的とを全く顚倒するやうになる。國家の興隆を圖るのに

は先づ腐敗墮落せる惡政府の顚覆を必要とすることもある。然るに、ドイツ人は政府の顚覆は『國權』に對する反抗であるから不可といふ。客觀性の信者から見れば『國權』は目的達成の手段でなくて、この上もなく尊い目的にほかならぬのである。そこで、また、議會に跋扈してゐる政治屋が如何に無能な侏儒であらうと、如何に下等な代物であらうと、そんなことには一向に平氣であるが、獨裁といへばフリードリヒ大王の如き偉人の政治でも一概に排斥する。頑迷な形式主義者にはデモクラシーの法則の方が國民の福利よりも神聖なものに思はれるのである。それ故、國民を滅ぼす虐政も現に『國權』を代表してゐるから是認せられ、如何なる善政も『デモクラシー』の觀念と一致しないから否認せられることになる。

國民が如何に酷い目に合ひ、擊たれたり、切られたりして血みどろになつてゐても、ドイツの平和主義者は唯だ默つて見てゐるだけである。かやうな運命を免れようとすれば抵抗しなければならず、抵抗するには暴力を用ひねばなら

ぬが、暴力を用ひることは平和團體の趣旨に反するといふのである。かくして、ドイツの社會主義者が國際連帶に心中立てをしてゐる間に他國の社會主義者は何時の間にか寢返りを打つた。それでもドイツの社會主義者は、ドイツ人なるが故に、返報は勿論、抗議をさへ考へなかつたのである。

こんなことをあばき立てるのは不快であるが、何事にまれ、改めるには先づ以て事の實相を究めておかねばならぬ

一部の加特力僧侶がドイツ民族の利害に無頓着であるのも、由つて來るところは社會主義者の場合と同じである。

ドイツ人が此の如く形式にこだはつて國民として必要な斷乎たる態度を缺くに至つたのは、國民が生來惡性でねぢけてゐるためでもなければ『上から』の命令によるのでもなく、幼時からドイツ魂を涵養すべき國民教育を受けず、偶像化せる觀念の奴隷になつたからである。

デモクラシー、國際社會主義、平和主義などの教育は頗る徹底してゐて、非

常に排他的であるから、この方の教育を受けた者は何事につけても主義に囚はれ、主義の立場から主觀的に考へるが、ドイツ民族に對しては幼時以來の教育のおかげで飽くまでも客觀的な態度を取るやうになつてゐる。そこで、例へば平和主義者は平和主義の理想に後生大事に嚙りついて、ドイツ國民が不法な壓迫を受けてゐる時でも（本人もドイツ人であるから）何よりも先づ客觀的な權利を搜し、決して自己保存の民族本能から國民の中に飛び込んで國民と共に戰ふといふことをしないのである。

宗教の各派にも同じ弊がある。新教は舊教よりもドイツ的で、ドイツ民族の利益をよく擁護してゐるが、それも新教の發生した理由や其の後の傳統と合致する部面に於て擁護してゐるだけで、新教の觀念や傳統の中に存在しない部面、或は新教が何等かの理由で拒否してゐる部面に於て國民の利益を擁護しなければならぬことになると、忽ち態度が變つてくる。

精神の純潔とか、國民情操の涵養とか、或はドイツ魂、ドイツ語、ドイツの

自由の擁護とかいふやうなことになれば、これは總て新教の精神と合致することであるから、新教は必ずドイツ民族の復興に與するが、ユダヤ人問題になるとさうでない。ユダヤ民族に對する新教の態度は既に教義上に於て確定してゐるから、ドイツ國民をこの極めて危險な怨敵の手中から救ひ出さうとする運動に對しては猛烈に反對する。ユダヤ人問題を解決しないでドイツ民族の復興を圖るが如きは無意義であり、不可能であるに拘らず、新教はかやうな態度を取るのである。

ウィーンにゐた頃、自分は餘暇と機會とのあるにまかせて、ドイツ人の『客觀性』といふ問題をも虛心坦懷に檢討し、更に日常の生活によつて如上の判斷の誤りでないことを確めることが出來た。

ウィーンには種々雜多な民族が集つてそれぞれの國民性をさらけ出してゐたが、それで見ると、同胞國民の利害をいつでも客觀的に冷淡に眺めてゐるのはドイツ人の平和主義者ばかりで、ユダヤ人は決してユダヤ民族の利害を忘れよ

うとしない。ドイツ人の社會主義者は『國際的』であるといつても、唯だ世界の同志に泣きついてドイツ國民を公正に取扱ふやうにお慈悲を願ふだけで、その外に何の能もなかつたが、チェッコ人やポーランド人の社會主義者は決してそんなものではなかつた。此の如きは、一は國際社會主義そのものの弊に違ひないが、一はドイツ人の國民教育が甚だ惡く、ドイツ人が同胞國民に對して冷淡になつてゐたためである。

加特力教會はドイツ民族に與せず、ドイツ民族の權利を不法に蹂躪してゐるから排斥すべきである、といふのが加特力教會に對する汎ドイツ黨の鬪爭の第一の理由であつたが、一切の禍根が國民教育にあると知れては此の理由は成り立たない。

ドイツ人が幼時から同胞國民の權利を十分に認めるやうに育てられ、生死の境に立つて尙ほ且つ『客觀性』の呪から遁れ得ぬやうな不都合が無くなれば、アイルランドに於けると同じく、又ポーランドやフランスに於けると同じく、

ドイツに於ても（本當に國民的な政府がありさへすれば）加特力教徒もやはりドイツ人たるを失はぬであらう。

これが顯著な證據は、ドイツ國民が歴史の法廷に於て生死を賭してその存在を主張せんとした世界大戰に在る。

當時、國民は政府の指導を受けてゐた間は立派にその義務と責任とを果してゐた。新教の牧師も、舊教の僧侶も共に手を携へて活動し、銃後に於ては勿論戰線に於てもドイツの抵抗力の維持に貢獻したのである。當時、特に大戰の勃發當初に於ては、新舊兩教徒の眼底に映じてゐたものは唯だ神聖なるドイツ帝國のみで、新教徒も舊教徒も共に唯だ此の帝國の存在と將來とのために天を仰いで祈念したのである。

そこで、汎ドイツ黨としては、先づ、オーストリアのドイツ民族は加特力教を信仰してもドイツ民族の存在を維持し得るや否やといふ問題を考へるべきであつた。存在を維持し得るとすれば、汎ドイツ黨は宗旨のことをかれこれ心配

しなくともよく、また、維持し得ないとすれば、宗旨を改めねばならぬことになるが、これは宗教改革の問題であつて決して政黨の出る幕ではない。

政黨の運動で宗教改革が出來るかの如く考へるのは、宗教上の觀念や教義がどうして生じるものか、それが教會でどんな働きをしてゐるかといふことに就いて何も知つてゐない證據である。

二人の主人に仕へるといふことは人間には出來ない。政治は政治、宗教は宗教である。そして、自分の見るところでは、宗教の興亡の方が國家の隆替よりも遙かに重大である。況して政黨の浮沈などは物の數でもない。

或は、汎ドイツ黨が宗教を攻擊したのは反對黨が宗教を利用せるがためであつたと言ふものがあるかも知れぬ。

何れの時代にも政治を取引と心得て、宗教をもこれに利用して憚らぬ輩がゐる。こんなのは總て良心のない輩であるから何でも下劣な本能の用に供して殘すところがない。併し、かやうな輩が宗教を惡用したからといつて直ちにその

宗教を非難するのも確かに誤りである。

狡猾な議會人から見れば、政治上の闇取引を後からでもよいから是認して貰へるやうな機會の現はれるほど都合のいいことはない。世間が當人の邪曲をも宗教のせゐにして攻擊すれば、狡猾な輩は直ちに大聲で騷ぎ出し、己れを攻擊する者を以て恰も宗教を冒瀆する者であるかの如く言ひ觸らし、己れは俯仰して天地に愧づるところなく專ら宗教や教會を辯護して來たかの如く吹聽する。すると愚かで忘れつぽい世間は大きな聲にだまされて鬪爭の原因を見損ひ、或は思ひ出すことが出來ず、良心のない輩が目的を達することになるのである。

かやうな莫迦げた騷ぎが宗教と何の關係もないことは狡猾な狐の百も承知してゐるところで、それ故、正直で迂濶な對手が遂に人間の誠實と信仰とを疑つて、すつかり手を引いてしまふのを見ると、祕かに舌を出して嗤ふのである。

併し、右の如き理由からでなく他の方面から見ても、個人の邪曲を宗教や教會のせゐにするのは確かに誤りである。教會の規模と人間の瑕瑾とを較べて見

ると、他の如何なるものよりも教會の方が確かに良いのである。確かに僧侶の間には、聖職を政治上の野望を遂げるための手段に使ひ、政爭に當つて嘘八百を並べ立て、自分が崇高な眞理の保護者であることを忘れてゐるやうな者もある。誠に歎かはしい話であるが、併し、僧侶といふ僧侶が悉くかうではないので、こんなのが一人ゐれば、他方に傳道に忠實な僧侶が千人もゐるのである。尊敬すべき僧侶がなほ今日の濁世に恰も沼に浮ぶ小島の如く清らかに存在してゐるのである。

僧衣を纏つた惡人が道德に悖つて穢はしいことをしたからといつて教會そのものを非難するのは當らない。上から下まで爛れきつて同胞國民を冒瀆したり裏切つたりすることが日常茶飯になつた世の中である。偶〻一人や二人の墮落坊主が何をしたところで、それによつて直ちに教會そのものを非難すべきではなからう。特に今日では、妖魔に憑かれた墮落坊主ばかりでなく、血の涙を流しつゝ國民と共に國民の不幸を歎き、再び朗かな天日を仰ぎ見る日を待ち焦れ

てゐる僧侶も澤山にゐるといふことを忘れてはならぬであらう。

或は、宗教の問題はそんな日常の瑣事にあるのでなく、原則の眞僞、教義の內容にあるといふ者もあらう。それなら訊くが、傳道の自信があるなら自分で宗教の改革に乘り出すがよいではないか。決して政黨の力を借りてはいけない。政黨によつて事を行ふのは陰謀を企むにほかならぬ。現在の僧侶が惡いのなら追ひ出して自分で僧侶になるべきであらう。それだけの勇氣があるか。

自分で僧侶になるだけの勇氣もなく、また自分で宗教を改革し得る自信もなければ初めから手を出さぬがよい。何事に限らず公明正大な方法で成し遂げ得る自信のないことを政治運動といふ間接な方法で騙取しようとしてはならぬ。

宗教上の問題が國民の信仰と相容れず、國民の倫理道德を破壞するやうなものであれば兎も角、然らざる限り、政黨は宗教上の問題に關與すべきでなく、宗教も亦政黨の喧嘩に介入してはならぬのである。

教會の顯職に在る者が宗教の教理や制度を利用して國民を傷けてゐても、政

治に携はる者は斷じてこれに倣つてはならず、同じ武器をもつて戰つてはならぬのである。

國民の信仰する宗教の教理や制度は政治家の觸れてはならぬもので、これに觸れ得る力量のあるものは政治家にならず、宗教改革者になるべきである。

さもなくて、政治と宗教とをごつちやにすれば、特にドイツに於ては國家の破滅を來すであらう。

汎ドイツ運動や汎ドイツ運動と加特力教會との闘爭を何年か研究して漸く自分の到達した見解を要約すれば、汎ドイツ運動は社會問題に深い理解がなかつたから、闘志の熾んな大衆を味方にすることが出來なかつた。汎ドイツ運動は議會政治に參與したから、大きな國民運動になることが出來ず、却つて議會政治固有の弊風に染まることになつた。汎ドイツ運動は加特力教會を敵としたから中產階級に勢力を張ることが出來ず、國民の子弟として最も健實な澤山の優良分子に見放されたのである。

即ち、オーストリアに於ける汎ドイツ黨の文化闘爭は完全に失敗した。

成る程汎ドイツ運動は加特力教會から約十萬の信者を奪ひ取つたに違ひないが、そんなことぐらゐで痛痒を感じる教會ではない。汎ドイツ運動へ飛び込んで來た信者は、それでなくても信仰が薄くて内心既に教會から離れかゝつてゐた連中であるから、教會としては迷へる『小羊』のために涙を流す必要はなかつた。こゝに新しい宗教改革と昔のそれとの相違がある。昔の改革では、信徒の中でも特に立派な人々が信仰のために教會を去つたのであるが、今度の改革では、謂はば俗人だけが政治的な『打算』から出て行つたに過ぎぬのである。

政黨の方から見ても、かやうな加特力教徒を收容したのは全く笑ふべく、また悲しむべきことであつた。

ドイツ國民を救はんとする政治運動は前途洋々たるかに見えたに拘らず忽ち挫折した。飽くまでも眞面目に一途に進むべきを、つい、道草に氣を取られて運動の分裂を來さざるを得ざる方面に迷ひ込んだからである。

こゝにはつきり言へることが一つある。

大衆の心理をよく理解してゐたら、汎ドイツ運動は加特力教會を對手に喧嘩などしなかつたに違ひない。凡そ勝利を收めんとすれば目標を一つに限つておかねばならぬ。二つも三つも目標を立てると戰鬪力の分裂を生じて失敗するにきまつてゐる。こんな事は人間の心理を考へれば直ぐ分る筈であるが、汎ドイツ運動の領袖はこれを知らなかつた。實際には何一つ成就し得ないくせに何でもかんでもやりたがる山師に引きずられて決心に迷ふことほど政黨にとつて危險なことはない。

歷史を見るに、宗旨が本當に惡くて確かにどうにかしなければならぬものがあつても、純然たる政黨が宗教改革に手をつけて成功したためしは未だ曾てない。これは政黨として夢寐にも忘れてならぬことである。政治に携はる者は歷史より學んだ教訓を實地に應用しなければならぬ。現實に臨んで教訓を忘れたり、事情が違ふから久遠の眞理もこゝには通用しなからうなどと考へるのは駄

目なので、現在に適用して有効な教訓を歴史に學ばねばならぬのである。これの出來ないやうなものは政治の指導者たるかの如く自惚れてはならぬ。自惚れてゐても正體は阿呆で、意志は如何に善良でも、それは無能の言ひ譯にはならぬのである。

古今東西を問はず、本當に偉大な國民指導者は色々な祕訣を心得てゐるが、國民の注意を唯一の目標に集中して散漫ならしめないこともその一つである。國民の鬪志を統一すれば、對手へぶつつかる力が強くなる。それ故、巧妙な指導者は、多くある敵をも一つのものにして見せるやうに工夫する。氣の弱い者は一時に多くの敵を見ると動もすれば味方の正義を疑ひだすものである。四方八方敵ばかりといふのでは、心の定まらぬ者は忽ちうろたへて所謂客觀的に物を考へだし、これほど敵が多いので見ると、先方が惡いのでなくて此方が惡いのではないか、此方の運動が間違つてゐるのではないか、などと疑ふやうになる。

かやうな疑が起きると力も痺れる。それ故、種類の雜多な敵をも一つに纒めて、味方の者には一つの敵と戰つてゐるやうに思はせなければならぬ。かくすれば味方の正義を信ずる心が強くなり、この正義を犯す者を憎む心も深くなる。

汎ドイツ黨はこの祕訣を知らなかつたから失敗した。

汎ドイツ黨のねらつたところは正しく、心も純であつたが、進んだ道が誤つてゐた。譬へて見れば、汎ドイツ黨は輕はずみな登山家の如きもので、登るべき高嶺を見つけて勢ひ込んで出發したが、山頂ばかり見つめて脚下の山道に注意せず、そのために遂に轉落したのである。

有力な競爭對手の基督教社會黨の行き方はこれと全く反對であつた。基督教社會黨の選んだ道は正しかつたが、狙ひが外れてゐたのである。

汎ドイツ黨は色々な問題で失敗してゐるが、その同じ問題で基督教社會黨はいつも正しく賢く立ち廻つてゐる。

基督教社會黨は大衆の重要なる所以を心得てゐたから、黨の社會的性格を最

初から公然强調して、大衆の一部を味方に引き入れることが出來た。中間階級の下層や職人階級にも喰ひ込んで、根氣があつて誠實で生命をも投げ出して惜まぬ味方を集めることが出來た。宗教方面の事には干渉しなかつたから教會の强力な援助をも贏ち得たのである。從つて基督教社會黨には、本當の大敵は一つしかなかつた。また、基督教社會黨は宣傳の威力を認め、巧妙に宣傳を行つて味方大衆の心理へ働きかけてゐた。

然るに拘らず、基督教社會黨も遂にその夢想を實現し得ず、オーストリアを救ふことが出來なかつたのは、畢竟は狙ひが外れてゐたためであるが、方法にも二つの缺點があつたからである。

基督教社會黨はユダヤ人を排斥したが、それは、ユダヤ人が異教徒であるからいけないといふのであつて、ユダヤ人を特殊の民族として排斥したのではない。

これがそもそも誤りであるが、かくの如き過を冒すに至つた原因から今一つ

の誤りが出て來た。

基督教社會黨の領袖に言はせると、オーストリアでは民族問題を取りあげてはならぬ。さもなくばオーストリアは忽ち土崩瓦解して救ふべからざるに至るに違ひない。特に種々な民族の集つてゐるウィーンでは民族間の離反を促すやうなことは出來るだけ避けて、常に多を一に纏めるやうに心掛けねばならぬ。これが基督教社會黨の持論であつた。

當時のウィーンではチェッコ人が最も幅を利かしてゐたから、民族問題をやかましく言ひ立てたら、元來ドイツ的でない基督教社會黨は黨の分裂を免れず、異民族は黨から出て行つたに違ひなからう。併しオーストリアを救ふには異民族をも黨内に引き留めておかねばならぬ、といふのが黨の持論であつたから、マンチェスター流の自由主義を排斥してウィーンに非常に澤山ゐるチェッコ人小賣業者を味方に引き入れ、ユダヤ人を攻撃する理由を宗教に求めてオーストリアに於ける民族の區別に觸れないやうにしたのである。

宗教を異にするからといふ理由で攻撃するのでは、ユダヤ人にさしたる痛痒を與へ得ないのは勿論で、いざといへば、ユダヤ人は直ちに改宗して相變らずその商賣を續けるから、何にもならないのである。

かやうな皮相に留つてゐては、ユダヤ人問題を眞面目に科學的に說明し得ない。從つて、世間はユダヤ人排斥の必要なる所以を理解し得ず、却つて反感を抱くやうになつた。基督教社會黨は感情を離れて現實を摑まうとしてゐなかつたから、その言ふ所に附和する者は固陋な連中ばかりで、知識階級は原則としてユダヤ人排斥に反對した。かくして、基督教社會黨のユダヤ人排斥はユダヤ人を改宗させる運動か、或は宗教上の嫉妬であるかの如き觀を呈し、高尙な感激を伴はず、これに贊成する者は下劣な連中のみで、大抵の人はこれを道德に悖つた怪しからぬことと思ふに至つた。要するに、基督教社會黨のユダヤ人排斥には、これが全人類の死活に關する問題であつて、ユダヤ人以外の全民族の運命はこれが解決の如何にかゝつてゐるといふ信念が缺けてゐたのである。

基督教社會黨のユダヤ人排斥はかくの如く中途半端であつたから役に立たなかつた。これはユダヤ人排斥主義の僞せ物であつて、無い方がましである。こんな主義にだまされて安心して、對手をしつかり抑へつけたと思つてゐると、何時の間にか鼻毛を拔かれるやうなことになる。

かやうなユダヤ人排斥では、ユダヤ人はすぐ慣れてしまふ。迷惑を感じるよりも、排斥せられなくなれば物足りなく思ふくらゐなものであらう。

かうまでして、多民族國家のために大きな犧牲を捧げるほどなら、ドイツ民族を擁護するためにもつと大きな犧牲を捧げたらよかつたであらう。

ウィーンに於ては、地盤を失ひたくない政治家は『國民主義者』たり得なかつた。それ故、基督教社會黨も民族問題をそつとしておいてハップスブルグ帝國を救はうとした。そして却つてこれが滅亡を促したのである。かくして基督教社會黨は、政黨に絶えず新鮮な活力を供給する巨大な力源を失ひ、他の政黨と少しも變るところのないものになり終つたのである。

自分は此の如く汎ドイツ黨の運動と基督教社會黨の運動とを注意して觀察した。汎ドイツ黨を研究したのは內心の要求に驅られたからであるが、基督教社會黨を觀察したのは黨首のリューゲル博士が好きであつたからである。博士はまことに稀有の人物であつて、オーストリアに於けるドイツ民族の悲壯な象徵であるやうに思はれた。

市長リューゲル博士が亡くなつて、その葬式の大行列が市役所から環狀道路へ進んで來た時、自分も數萬の群衆にまじつてこれを見送つたが、深い感動を覺えざるを得なかつた。オーストリアの滅亡は遂に避くべからざる運命であつて、カール・リューゲル博士の事業も徒勞に終らざるを得ないであらう。博士がドイツに生れてゐたら必ずやドイツの偉人の列に加はつたに違ひなく、オーストリアのやうな有るべからざる國で働いたことは、博士とその事業との不幸であつた。博士の柩を見送りながら自分はかう思つた。

リューゲル博士が亡くなつた時には、小さな焰が既にバルカンに燃えあがつ

てだんだんと擴がつてゐた。それ故、オーストリアの崩潰を阻止し得るかの如く考へてゐた博士がこの崩潰を見ずに逝つたのは、寧ろ幸福であつたかも知れない。

さて、今までのところで汎ドイツ黨の無爲と基督教社會黨の失敗との原因を明かにしたが、これで見れば、オーストリアといふ國は最早や何としても救ふことが出來なくなつてゐたに相違ないが、兩黨にもそれぞれ缺陷があつたことは確かである。

汎ドイツ黨はドイツ民族の更生といふ目的をねらつた。それはよかつたが、手段の選擇を誤つた。國民主義的ではあつたが、遺憾ながら社會的でなく、大衆の心を摑み得なかつた。汎ドイツ黨のユダヤ人排斥は民族問題を正視した結果であつて、信仰の相違を理由としたものではなかつたが、加特力教に對する鬪爭はどう見ても汎ドイツ黨の誤りである。

基督教社會黨はドイツ民族の更生といふ目的をねらつてゐなかつたが、政黨

として進むべき路を選擇することにかけては甚だ悧口であつた。基督教社會黨は社會問題に理解があつたが、ユダヤ主義に對する鬪爭に失敗し、國民主義の思想に潛んでゐる力に就いて少しも氣が付かなかつたのである。

大衆の重要なる所以をよく心得てゐた基督教社會黨が汎ドイツ黨と同じに民族問題の重要なる所以をも正しく會得して、國民主義に立脚してゐたか、或はユダヤ人問題の目的や國民主義の思想を正しく理解してゐた汎ドイツ黨が、基督教社會黨と同じに實踐の智慧を具へ、特に社會主義に對して基督教社會黨と同じ態度を取つてゐたかすれば、どちらかの黨が成功してドイツの運命に有效に干涉し得るやうな運動になつたに違ひない。それがさうならなかつたのは勿論黨の罪であるが、結局はオーストリアの國柄に因るのであらう。

汎ドイツ黨や基督教社會黨でさへこの通りである。その他の政黨で自分と同じ信念を抱いて動いてゐるものは一つもなかつた。それ故、自分は既成政黨へ入らうとか、既成政黨と共に戰はう、とかいふ氣になれなかつた。既成政黨は

すべて駄目なもの、ドイツ民族を大規模に且つ徹底的に更生せしむべき任務に堪へ得ないものと見切りをつけたのである。

併し、ハップスブルグ帝國を憎惡する心は益〻深くなつた。

特に外交問題を研究するに及んで、他日ドイツ民族に不幸をもたらすものはオーストリアに違ひないといふ信念がいよいよ固くなつた。ドイツ民族の運命をオーストリアによつて開拓することは出來ない、ドイツ民族の運命はドイツによつて開拓せられねばならぬ、といふことがいよいよ明かになつた。これは單に政治方面のみならず、文化方面の全般に就いても言ひ得ることで、ドイツによつて指導せられなくては大陸に於けるドイツ民族は斷じて發展し得ないのである。

オーストリアは、純然たる文化乃至藝術方面に於ても既にあらゆる衰弱の徴候を示し、少くともドイツ民族から見れば存在の意義を失つてゐた。建築方面に於て特にさうであつた。新しい建築術がオーストリアに於て格段の成功を收

め得なかつたのも、要するに建築の需要が減退し、少くともウィーンでは環狀道路の建設以來萎縮して、ドイツに勃興しつゝある計畫に較べて殆んど言ふに足りないものになつてゐたからである。

かくして、自分はだんだんと二重生活を營むやうになつた。オーストリアは政治でも外交でも勉强するにはよい所である。つらいけれども得るところの多い道場である。それ故、自分の理性は飽くまでもオーストリアに留つて修業をつゞけるやうに勸めたが、心は最早や他所へ飛んでゐたのである。

オーストリアは既に中味が空つぽで、救ふべからざる國であり、何を見てもドイツ民族の不幸を表現してゐないものはない。自分はかう思つて不安で不安でたまらなかつた。

オーストリアは眞に優れたドイツ人を迫害して、ドイツ人ならざるものを援助してゐる。自分はかう思つた。

忌々しかつたのはオーストリアの首都が人種の展覽會場のやうになつてゐる

ことであつた。チェッコ人、ポーランド人、ハンガリー人、ルテニア人、セルビア人、クロアティア人など、雜多な民族がうようよと集つてゐるのが忌々しかつた。就中、永遠に人類の黴菌たるユダヤ人が到る所にのさばつてゐるのが忌忌しかつた。

自分にはこの大都會が亂倫の權化であるやうに思はれた。

自分が子供時代に使つてゐたドイツ語は下バイエルンでも行はれてゐた方言であるが、自分はいつまでもこれを忘れることが出來ず、また、ウィーンの奇妙な言葉を覺えることも出來なかつた。ウィーンに永く住んで、曾てドイツ文化の榮えたこの古い都で色々な民族の異樣な合の子がだんだんと幅を利かして來るのを見ると、癪に障つてたまらなかつた。

こんな國がいつまでも滅びずに榮えるであらうとは考へるだに笑止である。

當時のオーストリアは古びた寄木細工のやうなもので、一つ一つの石片を接合する漆喰が既に朽ちてぼろぼろになつてゐたのである。觸らないでそつとし

て置けば形だけはまだ何年か保たれてゐようが、一と突き衝かれゝば忽ち瓦解せざるを得ない。それ故、問題はオーストリアが立ち直るかどうか、といふことでなく、何時衝き倒されるかといふことであつた。

自分の心臓は未だ曾てオーストリア帝國のために鼓動したことがなく、常に唯だドイツ帝國のために鼓動してゐた。自分はオーストリア帝國の崩潰する時がドイツ民族の解放せられる時であると思つてゐた。

それでなくとも自分は小さい時からドイツへ行きたいと思つてゐた。ドイツが好きであつた。だから、オーストリアに厭氣がさすと共に、思ひ切つてドイツへ移つて行きたいといふ憬れの心が募る一方であつた。

曾ては、自分はどうにかして一かどの建築家になり、大なり小なり運命の命ずる仕事によつて忠實にドイツ民族に奉仕しようと考へてゐた。

併し、終には、自分はドイツで仕事をしたらどんなに嬉しいであらうと思ふやうになつた。ドイツは何時か必ず自分の熱烈な希望を實現して自分の生れた

故郷を共同の祖國ドイツに併合して呉れるに違ひないと思ひ、さういふドイツで働きたいと思つたのである。

かくまでもドイツを戀しがつた自分の心は今日でもなほ多くの人には恐らく分るまい。それが分るのは今日までドイツに併合せんとして未だ併合し得ざる地方の人々である。或は一度併合して殘酷にも再び引き離された地方の人々である。或は祖國から離れても神聖な財寶たるドイツ語を捨てずにこれを守つて戰ひ、或は祖國に忠なるが故に迫害を受け、或は悲歎の涙に暮れながらもやがて再び溫かい母のふところへ歸る日を待ち焦れてゐる人々である。かゝいふ人人には必ず自分の心もよく分つて貰へるに違ひない。

ドイツ人でありながらその愛する祖國の民たり得ざることほど詰らぬことはない。自らさういふ境遇にあつて身を以てこれを味つた者でなければ、祖國から引き離された者の胸に燃える憧れは分らない。祖國から引き離された者には再び祖國へ歸り得る日が待たれてならぬのである。再び祖國に歸つて同胞と苦

樂を共にし得るやうになるまでは、平和も安靜もなく、幸福も滿足もない。唯だ苦しい惱みがあるだけである。

色々のことを述べて來たが、兎に角、ウィーンは自分にとつて終生忘れることの出來ぬ生きた學校であつた。自分が此の都へ來たのはまだ何も分らぬ子供の時であつた。そして此の都を去つた時には、自分は無口で眞面目な大人になつてゐた。大にしては自分の世界觀が確立したのもこの都であれば、小にしては政治の見方を會得したのも此の都であつた。勿論、この世界觀も政治の見方も尙ほ後に細かなところを補ふ必要はあつたが、自分は爾來これを捨てなかつた。尤も當時の修業の眞價を本當に悟り得たのは、實は近頃のことである。

ウィーン時代のことをやゝ詳しく述べたのも、つまりは此の時代が自分の修養時代であつたからである。我が國民社會主義勞働者黨は極めて小さな集會に始まつて五年足らずの間に一大大衆運動になつたが、黨の綱領の中には自分がウィーンで受けた實物敎育に基いて立案したものが少くない。かくも若い時代

に運命のお蔭や勉强によつて意見の基礎が出來あがつて呉れてゐなかつたならば、ユダヤ主義や、社會民主主義、否、一般にマルクス主義や社會問題などに對する自分の態度は今日どうなつてゐるか分つたものでない。

成る程祖國の不幸は何千、何萬の人間を促して崩潰の眞因を考へさせるであらうが、さうして考へたところで徹底は期し難く、深い洞察に到り得ず、多年の苦闘によつて自ら運命を開拓したものには及ばないのである。

第四章　ミュンヘン

一九一二年の春、自分は遂にミュンヘンに移つた。

この都のことは自分にはもう何年も前から城内に住んでゐたかの如くによく分つてゐた。自分は豫てからこのドイツ藝術の都を委しく研究してゐたのである。ミュンヘンを見ざるものはドイツを語る能はず、ミュンヘンを知らざるものはドイツ藝術を解せざるものである。

兎に角、世界大戰前のこの時代は自分の生涯のうち最も幸福で最も平和な時代であつた。相變らず貧乏であつたが、もともと自分は繪を描くために生きてゐるのでなく、生きんがために、否、生きて研究をつゞけ得んがために繪を描いてゐるのである。國民社會主義者としての自分の目的はいつか必らず成就するといふ信念があつた。この信念があつたればこそ、自分も日常生活の様々な

煩累をも氣にも留めずに容易に耐へ忍ぶことが出來たのである。

のみならず、自分はミュンヘンに住み始めると直ぐ此の都が非常に好きになつた。自分の知つてゐる町でこれほど氣持のよい町はどこにもない。ドイツ人の町！　ウィーンに較べて何たる相違であらうか。ウィーンは色々な人種の雜居する所で、思ひ出すだけでも胸の惡くなる町である。また、ミュンヘンの方言は自分の言葉と甚だよく似てをり、特に下バイエルンの人々とつき合つてゐると、その言葉によつて自分の幼年時代が思ひ出されて來るのであつた。ミュンヘンには自分の好きで好きでたまらぬものが、或は好きで好きでたまらなくなつたものが幾つもある。その中でも最も強く心を惹きつけたものは、自然のまゝの荒々しい力と纖細な藝術的氣分とが不思議に渾然と融合した美しい線、即ち、ホーフブロイハウスからオデオン劇場へ、また十月祭會館から繪畫館へと連なるあの獨特の美しい線であつた。今日でも自分が世界の何れの町よりもミュンヘンに愛着を感じてゐるのは、この都が自分の生涯と不可分に結びつい

てゐるからであるが、特に自分が既にあの頃に本當に心から滿足し得る境地に到ることが出來たのは、この不思議なウィッテルスバッハ城下の魅力の賜物であり、冷靜な理性のみならず、多感な情緒をも惠まれた人間なら誰でも魂を奪はれずにはゐない美しい都のお蔭であつた。

ミュンヘンに來てからも自分が最も熱心に勉强したのは、職業上の仕事以外では、やはり政治、特に外交であつた。ところで、ドイツの外交を理解するには先づドイツの同盟政策を研究する必要があつた。ドイツの同盟政策がまるで間違つた政策であることは既にウィーン時代から自分の考へてゐたところであるが、何れにしても、ウィーンにゐた頃の自分には、まだドイツのこの自己欺瞞の程度が十分に分つてゐなかつた。オーストリアが同盟國として如何にも弱く如何にも當てにならぬものであることは、恐らくベルリン當局もよく知つてゐるに違ひなからうが、何か言ふに言はれぬ理由があつてわざと眼を閉ぢてゐるのであらう。また、オーストリアとの同盟はビスマルクの創意に成るもので

はあり、これを俄かに廢棄すると機會を窺つてゐる第三國に乘ずべき間隙を與へ、或は國内の凡俗に不安を感じさせる虞もあり、甚だ好ましくないから、そこでこんな同盟政策を堅持してゐるのであらう。自分はこんな具合に考へようとしてゐた。否、何か言ひ譯のやうに自分で自分に語つてゐたのである。

ところが、驚いたことには、自分のかやうな考へ方の間違ひであることがミュンヘンに來てみて、特にその大衆と接してみて直ぐ分つた。教養の高い連中でもハップスブルグ帝國の正體に就いては殆んど何も知つてゐない。誰もがさうなのである。自分は呆れざるを得なかつた。特に一般の國民はオーストリアを以て一朝有事の際には直ちに同盟の本分を盡して吳れる眞面目な强國と考へ、『ドイツ民族』の國家と思ひ、賴りになるものと信じてゐた。オーストリアの兵力もドイツのそれと同じく何百萬かを數へるであらうと考へ、オーストリアがとつくの昔にドイツ民族の國家でなくなつてゐることをも、オーストリアの内情が土崩瓦解の危機をはらんでゐることをもすつかり忘れてゐたのである。

オーストリアといふ國家に就いては、當時の所謂本職の『外交當局』よりも自分の方がよく知つてゐた。外交當局といふものは大抵さうであるが、當時の當局もやはり盲目の如くよろめきながらだんだんと災禍へ、災禍へと辿つてゐた。元來、國民の氣分は、上から輿論へ注ぎこまれたものの發露にほかならぬので、國民が『盟邦』を黄金の犢の如く崇拜するやうになつたのは、上の方がさうさせたのである。オーストリアにはドイツとの同盟に誠意がなかつた。その有りもしない誠意を愛嬌で補はうとし、唯だ言葉を弄んでゐたのである。然るに、ドイツの外交當局はそんなことと知らずにオーストリアの言ふことをそのまゝ信用してゐた。

ウィーンにゐた頃にも、自分は三國同盟に就いてオーストリア政府當局の言ふところと、ウィーンの新聞の書き立てるところとの間に喰ひ違ひがあるのを見て腹を立てたものであつた。併し、それでもウィーンは少くとも外觀上ではなほドイツ人の町であつたが、ウィーンを去つて、否、主としてドイツ民族の

居住する本部オーストリアを去つて、スラヴ民族の居住する地方へ行つて見ると、事態はまるで違つて來る。プラーグの新聞を手にするだけでも、スラヴ民族が三國同盟といふ崇高な手品をどんな具合に見てゐるかを知るに十分であつた。三國同盟は『政治家の傑作』ださうであるが、プラーグの新聞では唯だ辛辣な冷笑と侮蔑とを受けてゐたに過ぎなかつた。皇帝と皇帝とが親好の挨拶を交し合つてゐられる平和の最中に、スラヴ民族は、この同盟がニーベルンゲン民族の甘い理想に過ぎず、實行に移されんとする日に終を告げるに違ひない、といふことを公然と喋言つてゐたのである。

それから數年後に世界戰爭が勃發して、愈〻同盟の眞價を發揮すべき時が來たが、イタリアはその時になつて三國同盟から離脱し、盟邦のドイツとオーストリアとを見棄てたのみならず、その敵國にさへなつた。ドイツ人はどんなに激昂したことか！　併し、そもそもイタリアがオーストリアと手を携へて戰ふといふことは有り得べからざることであつて、有つたらそれこそ奇蹟である。

さういふ奇蹟を瞬時と雖も信ずることが出來たといふのは外交に盲目であればこそである。

オーストリアに就いても同じことが言へる。オーストリアとの同盟を頼りにするのは奇蹟を當てにするのである。

オーストリア國内に於て同盟思想を支持した者はハップスブルグ家の人々とドイツ人とだけであつた。ハップスブルグ家の人々が同盟思想を支持したのは自分の方の都合と已むを得ざる事情とによるものであり、ドイツ人が支持したのは迂濶で政治の頭がなかつたからである。迂濶だといふのは、ドイツ人は三國同盟が大いにドイツの役に立ち、ドイツはこれによつて益〻安固を加へるに至るであらうと考へてゐたからで、こんな間違つたことを考へながらドイツを腐屍の如き國家に結びつけて兩國を共に奈落の底へ引きずり込み、その上に尙ほこの同盟によつて知らず識らずの間にドイツ排斥に與するに至つたのは政治の頭がなかつた證據である。蓋し、ハップスブルグ家から見れば、ドイツと同

盟してさへをればドイツの干渉を免れることが出來るから――殘念ながら實際にその通りで、ドイツは少しも干渉しなかつた――國内のドイツ民族を徐々に驅逐すべき政策を實行するに都合がよい。所謂『客觀性』なるものがドイツに行はれてゐる間は、ドイツから抗議の來る虞はなく、また國内のドイツ民族が餘り下劣なスラヴ化に腹を立ててぐづぐづ言ひ出しさうな場合には、逆に同盟を笠に被てそれを壓し默らせることも出來た。卽ち、オーストリアのドイツ人は同盟を支持したがために結果に於てドイツ人排斥の政策に與するに至つたのである。

ドイツ帝國のドイツ民族がハップスブルグ政府を承認し信賴してゐる以上、オーストリアのドイツ民族はどうすればよかつたか？　反抗すべきであつたか。反抗すればドイツ帝國のドイツ民族から同胞民族に對する反逆者の烙印を押されるではないか。而も、數百年この方、同胞民族のために未曾有の犧牲を拂つて來たものはこのオーストリアのドイツ民族ではなかつたか。

ところで、ハップスブルグ帝國のドイツ民族が剿滅せられてしまつたら三國同盟はどうなるか。何の役に立つか。オーストリア國内に於けるドイツ民族の優勢を維持しなければ、三國同盟はドイツにとつて何の値打もないではないか。それとも、スラヴ化したハップスブルグ帝國であつてもなほドイツはこれと同盟してゆけるものと思つてゐたか。

オーストリア國内の民族問題に對するドイツ外交當局の態度は、一般輿論の態度と同じく愚昧を通り越して狂氣の沙汰であつた。ドイツは國を擧げて同盟に信頼し、七千萬國民の將來と安全とをこれに委託した。而もドイツは對手のオーストリアが、同盟の唯一の基礎たるドイツ民族の勢力を年を逐うて計畫的に確實に驅逐しつゝあるのを傍觀してゐた。從つて、ウィーン政府との『契約』は殘つても、同盟國としてのオーストリアの援助は全く期待し得なくなる日が必ず來なければならなかつたのである。

イタリアに對しては最初から何も期待してはならなかつた筈である。

ローマ政府とウィーン政府との提携などは、多少とも歴史を學び民族心理を知つてゐるドイツ人ならば、寸時と雖も考へ得ない筈である。イタリア人はオーストリアを心から憎んでゐるから、若しイタリア政府がオーストリアを敵とせず、オーストリアの味方としてオーストリアのために一人でもイタリア人を戰場へ送らうものなら、イタリアは忽ち國を擧げて沸騰するであらう。自分も曾てウィーンに於て、イタリア人がオーストリアに對して抱いてゐる底知れぬ憎惡や激しい侮辱の幾度も爆發するのを見た。ハップスブルグ家は數世紀に亙つてイタリアの自由と獨立とを妨害した。これはイタリア人の忘れんとして忘れることの出來ない大きな怨である。況んや、この怨を忘れんとする意志がイタリアの國民にも政府にも全く無いのであるから、イタリアにとつては、オーストリアと天日を同じくするには、同盟するか戰爭するかの二つの道しか無かつた。そこで、イタリアは同盟を擇んで靜かに戰爭を準備したのである。

オーストリアとロシアとの關係が次第に緊迫して戰爭の危機をはらむに至つ

てからは、ドイツの同盟政策は愈〻意味の無いものになり、危險なものにさへなつて來た。

此の同盟政策などは、大所高所から物を見ることを忘れた政治の適例である。

一體、同盟は何のために締結するのか。專ら自力によるよりも同盟による方がドイツ帝國の將來の安全を圖るに都合がよいからではないか。そして、ドイツ帝國の將來の安全を圖るといふことは取りも直さずドイツ國民の前途を確保するといふことである。

要するに、ドイツ國民はこれから先きどういふ具合に生活を進めて行くべきか、現在のヨーロッパに見るが如き勢力關係の下に於て、ドイツ國民は如何にせば生活の基礎を確保することが出來るか、如何にせば生活の安全を確保することが出來るか、といふことが大切な眼目であつて、ドイツとオーストリアとの同盟もこの見地から考へねばならなかつた筈である。

ドイツの外交の根本條件を仔細に觀察すれば、左の如き確信に到達せざるを得ない。

ドイツの人口は毎年約九十萬を增加するから、國民の食糧は年を逐うて不足を來すにきまつてゐる。故に、豫め適當の手段を講じて饑餓の危險を防止しておかなければ、國民はいつか必ず破滅するに違ひないのである。

この恐るべき成行きを豫防するには四つの方法がある。

第一は、フランス流に人爲で產兒を制限して人口過剩を防止することである。

非常な災厄があつたり、陽氣が惡かつたり、或は飢饉があつたりすると、その地方の種族の人口が減る。これは自然の行ふ人口制限であつて、假借のない賢明な自然淘汰である。生殖能力そのものを抑制するのでなく、子供の存續を妨害するのである。生れて來た子供は至難な試煉を受け、困苦缺亡に曝されるから、さほど强くない者、健かでない者は再びあの世へ歸らざるを得なくなるが、生活の困苦に堪へて生き殘つた者は、幾度となく試みられ、幾度となく鍛

へられて剛毅になつた者であるから増殖に適し、これから生れて來た者は再び假借のない淘汰を受ける。即ち、自然は個人に對しては殘酷であり、個人が生活の嵐に堪へ得ないと見れば直ちにこれを召還し、かくして種族そのものを強くし、その性能を極度に昂めるのである。つまり、數は減るが質が良くなり、結局、種が強くなるのである。

ところが、人爲の人口制限では結果が違つて來る。人間は木の股から生れたものでなくて『人間的な』ものである。この事は殘酷な運命の女神よりも人間の方がよく知つてゐる。だから、人間は生きることを制限せずして生むことを制限する。常に唯だ自己のみを考へて種族を考へない者には、この方が一層人間的であり正當であるやうに思はれるのである。併し、殘念ながら結果はその反對である。

自然は生れて來ることに制限を加へずして、生れて來た者に苛酷な試煉を課し、夥しい數の中から生存に堪へ得る優秀なものだけを選び出してこれに種の

保存を委ねるが、人間は生むことを制限すると共に、一旦生れて來た者は何とかしてこれを總て生かさうとし、神意をかやうに修正するのが如何にも悧口なことであり、人間的であるかの如く思ひ、この點でも自然に打ち克ち、自然の不完全を證明し得たかの如く考へて喜ぶ。成る程、かやうにすれば人間の數は減少するに違ひないが、同時に質も低下するにきまつてゐる。然るに猿智慧の人間にはこれが分らないのである。

生むことを制して產兒の數を減らすと自然淘汰が行はれず、最も强健な者だけが生き殘るといふことがなくなつて、脾弱な者でも病人でも生れて來た者なら何とかして『救つて』生かしてやらうとする欲望が當然に現はれて、こゝにまた子孫のために悲慘な種子を蒔くことになる。これは自然とその意志とを愚弄するもので、愚弄すること久しければ子孫の悲慘も從つて愈〻甚しいものになる。

結局、かやうな國民は、いつかこの世から跡を絕つに至るであらう。成る程

人間も一時は永遠に生きんとする意志の法則に反抗し得ようが、晩かれ早かれ必ずその報を受けずにはゐない。強い種族は弱い種族を驅逐するにきまつてゐる。永遠に生きんとする意志が、所謂人間の人道主義の莫迦げた桎梏を悉く破碎して自然の人道主義を顯はし、弱者を亡ぼして强者にその場所を與へるのである。

即ち、人爲の產兒制限によつてドイツ國民の生活を保障せんとするものは、畢竟ドイツ國民の將來を奪ひ去るものである。

第二の方法は國內開發である。これは今日でもなほ色々な方面から提案せられ、或は推奬せられてゐるところの方法である。世の中には正しい計畫でも誤解せられて、そのために思ひもかけぬ大きな害毒を流すに至ることがあるが、國內開發もさういふ提案の一つである。

確かに土地の生產力は或る程度まで高め得るが、或る程度までであつて、際限もなく高め得るものではない。そこで或る期間はドイツの人口が殖えても土

地の利用を高めればよく、直ちに飢ゑる心配はないと考へて差し支へなささうである。ところが、一般に生活上の欲求は人口數よりも急速に增大するといふ事實が一方に嚴存する。衣食に關する人間の欲求は年毎に增大し、既に現在に於ても、例へば百年も前の祖先の欲求とは比較にならぬものになつてゐる。故に、生產を擴充しさへすれば人口が增加しても差し支へないと一概に考へるのは誤りで、一方に於て人間の欲求も增大するから、增加した生產物の全部でなくても少くとも一部はこの增大した欲求を充たすために使はれることになり、全部を增加した人間の食料に振り向けることは出來ない。而も、この傾向は逐年增大するのである。一方で欲求を極度に壓へ、他方で勤勉に働くとしても、これにもやはり際限があつて、今度は土地そのものが承知しなくなる。いくら耕しても土地の生產は最早や增加せず、暫く猶豫してゐた宿命がこゝに頭を擡げて來るのである。最初は凶作などの年をねらつてゐた飢饉が人口の增加するにつれてだんだんと頻繁に現はれ、やがては餘程の豐年でないといつでも飢饉

といふことになり、遂には貧乏があたりまへで飢餓が國民の永遠の伴侶になる時が來るに違ひない。さうすると、自然が再び救ひの手を伸べるか、卽ち自然淘汰が行はれるか、或は人間が再び自助する、卽ち人口の增加を人爲で制限する。この人爲の方法が人種や民族に重大な結果を及ぼすことは旣に述べた通りである。

或は異議を立てて、何時か食べる物が無くなつて亡びるのは全人類共通の宿命であつて如何なる國民も免れ得ないところではないか、といふ人もあらう。

一應は尤もであるが、こゝでも考へねばならぬことがある。

人口の遞增に卽應して土地の生產力の增加をはかるといふことは到底不可能であるから、或る時機が來れば、人類は人口の增加を制限しなければならなくなり、自然淘汰によるか、或は出來れば人爲——勿論、今日のそれよりも正しい方法——によつて調節を行ふの已むなきに至るであらう。これは確かである。併し、その時にはあらゆる民族が殘らずさういふことになるのである。と

ころが、現在ではさうでなく、唯だ自力によつて生活に必要な土地を世界の何處にも新たに獲得することの出來ぬ弱い種族だけがかやうな災厄に見舞はれるのである。世界には今なほ廣大な土地が少しも利用せられずに放置せられて、耕す者の來りて開發するのを待つてゐるといふのが現在の實情であるが、これ等の土地は自然が或る一定の國民や種族の將來のために豫備地として押へてゐるものでなく、これを獲得する力と開拓する熱意とを具へた國民のために存在するものであるといふ考へ方も間違ひではない。

自然は政治的國境を知らない。自然は地上に生物を產み、これを自由に競爭せしめ、勇氣と勤勉との最も優れたる者を自然の寵兒としてこれに生存の權利を與へる。

他の民族がだんだんと世界に擴がつて廣い土地を占めつゝある時に、內に引き籠つて專ら國內開發によつて生存を續けんとするならば、その民族は他の民族の發展を餘所に見て早くも自己制限を行はざるを得なくなるであらう。否、

必ずさういふことになるに違ひなく、民族の生活する土地が愈〻狹ければ、自己制限を行はざるを得ざる時期も愈〻速く來る。遺憾ながら、現在に於ては最も優秀にして人類の進歩を雙肩に擔へる眞の文化民族が、動もすれば平和思想に眩惑せられて領土の擴張を諦め、專ら『國內』の開發を以て甘んぜんとするに反し、劣等な國民が地上に廣大なる土地を占有せんとしてゐる。これが結果はどうなるかといふと、文化的に劣つてゐても野蠻で押しの强い民族は廣い土地を擁してゐるから尙ほ繁殖を續けてゆくことが出來るのに、文化的に優れてゐても遠慮がちな民族は土地が狹いから早くも繁殖を制限せざるを得なくなる。卽ち、この世界は何時か文化的に劣つてゐても元氣のある民族の有に歸するであらう。

そこで、他日、この世界が今日の所謂デモクラシーの觀念によつて支配せられることになれば、人數の多い民族が勝ち、世界が自然力の法則によつて支配せられることになれば、意志の强い民族が勝つことになり、何れにしても自己

制限を行ふやうな民族は敗れざるを得ない。遠い將來の話ではあるが、兎に角さういふことになる。

世界の人類は何時か激烈な生存競爭を展開するに違ひないが、その場合に最後の勝利を占めるものは自己保存の本能の强い民族でなければならぬ。所謂人道主義なるものは元來が魯鈍と卑怯と半可通との混合物にほかならぬから、自己保存の本能の前には春の淡雪の如く消え失せざるを得ない。人類は永遠の鬪爭によつて偉大になり、永遠の平和によつて滅亡する。

『國內開發』といふ言葉はドイツ國民に對して非常に惡い影響を與へた。近頃ドイツには、國內開發を以て平和主義の精神に相應しく穩かな假睡をむさぼりながら生存し得る手段であるかの如く考へるものが多くなつた。こんなことを眞面目に考へるやうになれば、ドイツ民族の生存に必要な土地を確保せんとする努力は悉く終を告げざるを得ない。一般ドイツ人が專ら國內開發の方法によつてもドイツ民族の生活とその將來とを保障し得るかの如く考へるに至れば、

ドイツ民族の生存の必然性を積極的に有效に主張せんとする企圖は悉く影を潜めるに違ひなく、また國民の態度がこのやうでは眞に有益な外交は望まれず、ドイツ民族の將來は暗黑と言はざるを得ない。

かやうな結果から考へて見ると、國內開發といふ有害な思想をドイツ國民に植ゑつけることに努め、また植ゑつけることに成功したものがユダヤ人であつたのも決して偶然でないやうに思はれる。ユダヤ人はドイツ國民のことなら何でも知り拔いてゐた。それ故、山師が出て來て、烈しい生存競爭などしなくても各自の『都合次第』で或は働き、或は遊びながら世界の主人になり得る方法を發見したかのやうに法螺を吹き、自然を愚弄しても、ドイツ國民が少しもそれを疑はず、直ぐ信用して、喜んでその犧牲になるくらゐのことは、ユダヤ人には夙に分り切つてゐたのである。

くどいやうであるが尙ほ一度言ふと、ドイツの國內開發は社會の弊害を除き特に土地の一般投機を封ずるところに眼目を置くべきもので、國外に土地を求

めずに國民の將來を保障し得るものでは決してないのである。

若し、國內開發の眼目を他に置かうものなら、嘗てドイツ國內には開發すべき土地が無くなり、それと共にドイツ民族の力も盡きるであらう。

最後に尙ほ一つ言つて置くが、國內開發を以て滿足したり、人口を制限したりすると、國民は狹い領土に跼蹐することになり、惹いて國防上非常に不利な狀況に陷らざるを得なくなる。

國土の廣狹も國防上の要件である。國土が廣いと自然の與へる保護も大きい。狹い國に對する攻擊は比較的に迅速に、容易に、また完全に目的を達し得るのが普通であるが、廣い國に對してはなかなかやうな具合にゆかぬから、國土が廣いと敵國も輕率に攻擊して來ない。攻擊に成功するには長期に亙つて困難な戰鬪を行はねばならぬ。それ故、特別の理由がなければ無謀な侵入は過度の冒險と思はれるからこれを差し控へるやうになる。卽ち、國土の廣大は國民の自由と獨立との維持を容易ならしむる要素であり、國土の狹小は攻略の欲

望を挑發する原因になる。

今まで述べて來たのは、增加する人口と膨張しない國土との關係を調節する二つの方法であるが、かういふ方法に對してはドイツの所謂國民主義者も反對してゐた。勿論、國民主義者が反對するに至つた理由は上述の理由と違つてゐる。產兒制限に就いては一種の道德感からこれに反對し、國內開發に就いてはこれを以て大土地所有制に對する攻勢の準備と見、私有財產制に對する一般的鬪爭の端緒と考へて憤然としてこれに反對したのである。尤も國內開發といふ福音は社會民主黨の弘めたものであつたから國民主義者がかやうに考へるに至つたのも無理はないのである。

そこで、遞增する人口のために仕事と食料とを確保し得る方法は二つしか殘らぬことになる。卽ち、

第三の方法として、新しい領土を得て年々過剩人口を送り出し、國民の生活に自給自足の基礎を與へるか、それとも、

第四の方法として、工業や商業によつて外國の需要に應じ、その收益によつて國民の生活を維持するか、

卽ち、領土政策を取るか、それとも海外植民乃至貿易政策を取るかである。

ドイツでは右の三つの方法に就いて色々研究し、賛否の議論を重ねた後に遂に海外植民乃至貿易政策を採用するに至つた。

併し、何れが健實な方法かといへば、それは言ふまでもなく領土政策であらう。

現在のことばかりでなく將來のことをも考へれば、過剩人口を送り出すべき新しい領土を獲得する方がどれほどよいか分らぬ。

健全な農民を國民の基本として維持し得るといふことは、それだけでも非常に大切なことである。今日、ドイツには種々の惱みがあるが、その多くは農村の人口と都市の人口との不均衡から來てゐる。古今東西を問はず、强固なる小中農階級の存在は今日のドイツに見る如き社會的疾患に對する最善の防壁であ

り、國民の食料自給を確保し得る唯一の方法でもある。商工業が今日占めてゐる如き不健全な指導的地位から退いて國民の需給組織の一環になり、國民の生活の基礎でなく補助手段になつて、生産と需要とを過不足なく調節することになれば、國民の食料を多少とも外國から獨立せしめ得べく、有事の日に於て國家の獨立自由を防護し得るに至るであらう。

勿論、かやうな領土政策は海外のカメルンなどで實行し得るものでなく、新しい土地は今日ではどうしてもヨーロッパ大陸にこれを求めねばならぬ。故に我等ドイツ人は或る國民が狹い土地に跼蹐し、他の國民がそれより五十倍も廣い土地を占有してゐるのは天意に反するといふ考へ方を率直に承認すべきで、政治的國境にこだはつて自然の與へた權利を放棄してはならぬのである。世界が果して萬物の棲息し得る所であるならば、我等ドイツ人も亦生活に必要な土地を與へられて然るべきである。

勿論、喜んでドイツ人に土地を與へる者はゐなからう。併し、與へられない

となれば、こちらも自己保存の權利に物を言はせなければならぬ。穩便な方法でゆかなければ、拳固を振りあげねばならなくなる。現在では誰も彼も平和平和と言つてゐるが、若し我等の祖先がやはり平和主義に囚はれて思ひ切つた事をなし得なかつたとすれば、ドイツの國土は今日のそれの三分の一にも足りないであらうし、ドイツ民族はヨーロッパに於て兎や角と口を利くだけの力も無くなつてゐよう。然るに、幸にドイツ民族は自己保存のために斷乎として戰はんとする本能を失はなかつた。ドイツ民族が東部國境の兩州を獲得して自然の保護の大きな廣い國土を確保し、以て今日まで存續するを得たのは一にこの本能の賜物である。

領土政策は次の如き理由から見ても正しい。

今日のヨーロッパ諸國は概ね逆立したピラミッドのやうなものである。これ等諸國のヨーロッパに於ける本土は、その植民地や外國貿易の規模に較べて可笑しいほど小さい。謂はばヨーロッパに頂點を置いて全世界を底面にしてゐる

のがヨーロッパの列强である。アメリカ合衆國はこれと違つて、今日でもなほアメリカ大陸に底面を置き、頂點を以て他の世界に觸れてゐるに過ぎぬ。これ卽ち、アメリカ合衆國の國礎が非常に固く、ヨーロッパに於ける植民帝國の大多數が脆弱なる所以である。

それならイギリスはどうか、イギリスの國礎は今日でもなほ固いではないかといふ者もあらう。確かにさうである。併し、イギリスはヨーロッパに於ける他の諸國と事情が違つてゐる。イギリスを考へる場合にイギリス帝國といふものに氣を取られて、アングロ・サクソンの世界全體を忘れる者が多いが、これは誤りで、イギリスが强いのはイギリス帝國の大なるがためでなく、アメリカ合衆國と共に言語や文化を通じてアングロ・サクソンの世界を形成してゐるからである。

そこで、ドイツとしてもヨーロッパに新しい土地を求めるのでなければ健全な領土政策を實行することは出來ない。海外の植民地はヨーロッパ人の大量移

住に適しないものがあるから、これを得ても人口問題の解決にはならぬであらう。それでなくても、十九世紀に入つてからは、平和手段によつて海外に植民地を獲得することは既に出來なくなつてゐたから、海外に植民するには困難な戰爭をしなければならなかつたに違ひない。どの途戰爭をするのなら、海外に植民地を求めて戰爭をするよりもヨーロッパ大陸に移住地を求めて戰爭をする方が得策であらう。

勿論、ヨーロッパに於て領土を擴張せんとすれば、ドイツは全力を擧げてこれに當らなければならぬ。姑息な手段を取つたり、實行を逡巡したりしては駄目で、これは最後の精力をも傾注して初めて成就し得る大事業であるから、政治方面でもこれを唯一の目的として追求し、此の目的とその手段以外の事に頭を使ふべきでない。此の目的は武力によらざれば達成し得ないものであることを自覺して、冷靜に、沈着に戰爭を準備しなければならぬ。

故に、ドイツは同盟政策をも專ら右の如き見地から檢討し、その效用の如何

によつて判斷すべきであつた。ドイツがヨーロッパに於て領土を擴張せんとすれば、ロシアを犧牲にするほかに途がない。卽ち、新しいドイツは曾て騎士團の進んだ道を進み、ドイツの劍を以てドイツの鋤のために土地を獲得し、ドイツの國民のために食料を獲得しなければならぬのである。

併し、かやうな政策を實行せんがためにドイツがヨーロッパに於て同盟を結び得る國は唯だ一つしかない。卽ち、イギリスである。

イギリスと同盟しさへすれば、ドイツは後顧の憂を絕つて新たに軍を進めることが出來る。新たに軍を進めるのは我等の祖先が曾て軍を進めたのと同じくドイツの權利であり、正義である。曾て東方を開拓した最初の鋤は『劍』と呼ばれたが、ドイツの平和主義者と雖も、東方の麵麭を口にすることを肯じないものは一人もゐないではないか。

イギリスの好意を得るためには、ドイツは如何なる犧牲をも忍ばねばならぬ。植民地の要求を放棄し、海上制覇を斷念し、イギリスの產業との競爭を差

し控へねばならぬ。

領土を東方に擴張することに根本方針が定つてをりさへすれば、世界貿易や植民地を斷念することも出來れば、ドイツ海軍の建設を斷念することも出來、國家の全力を陸軍の建設に集中することも出來る筈である。

世界貿易や植民地を斷念し、海軍の建設を斷念すれば、ドイツは如何にも屏息したかに見えるであらうが、それは一時の屈伏であつて、必ずややがて洋々たる將來が開けて來るのである。

イギリスが同じ趣旨からドイツに接近して來た時代もあつた。ドイツの人口は年々增加してゐるから、ドイツとしては何とか適當な方策を講じなければならなくなるに違ひなく、それにはイギリスと提携して過剩人口の捌け口をヨーロッパに求めるか、或はイギリスと提携しないでこれを世界に求めるほかないといふことはイギリスにも良く分つてゐた。そこで、ロンドン政府は前世紀の終から今世紀の初にかけてドイツへ接近しようと努めて來たのである。然るに

驚いたことには、ドイツ政府は、イギリスの誘ひに乘ずればイギリスのために火中の栗を拾はなければならなくなるかの如く考へて誘ひを却けた。同盟といふものは元來が相互の取引を基礎とするもので、而もイギリスくらゐ相互の取引をうまくやる國は少い。イギリスの外交當局は常に甚だ賢明であつて、此方からは何も遣らないで先方からばかり取らうなどとはとても出來ぬ相談であることをよく心得てゐる。然るにドイツ政府にはこれが分らなかつたらしい。

ドイツ政府がもつと賢明で、イギリスと手を握つて一九〇四年に於ける日本の役割（ロシアとの戰爭）を引き受けたとすれば、それがドイツに齎した結果は殆んど測り知るべからざるものがあつたであらう。必ずや『世界大戰』などは起らなかつたに違ひない。若し、ドイツが一九〇四年にロシアと戰つたとすれば、その犧牲は一九一四年乃至一九一八年の大戰に於ける犧牲の十分の一で濟んだであらう。そして、世界に於けるドイツの地位は今日隆々たるものがあつたであらう。

かやうに考へて來ると、オーストリアとの同盟は全く意義の無いものになる。

一體、この木乃伊のやうなオーストリアがドイツと同盟を結んだのはドイツと相携へて戰爭を遂行するためでなく、永遠の平和を維持するためであつた。オーストリアは悧口にもこの平和を利用して國内のドイツ民族を徐々に而も確實に剿滅しようとしたのである。

オーストリアが國内のドイツ民族を剿滅せんとしてゐるのに、ドイツにはそれを阻止すべき力も決意もなかつた。そんなドイツにドイツ民族の利益を積極的に擁護することの出來る筈がない。これから考へてもドイツとオーストリアとの同盟は全く意味のないものと言はざるを得ないであらう。民族の自覺も無ければ、一千萬同胞の運命を左右する權力を不合理なハップスブルグ帝國から奪ひ取るほどの決意も無いやうなドイツに、遠大な計畫のある筈がないのである。要するに、オーストリア問題に對するドイツの態度は、ドイツ民族全體の

運命に關する鬪爭に於てドイツの取るべき行動の試金石であつた。

何れにせよ、オーストリアは、その國内にドイツ民族が榮えて居ればこそ、ドイツの同盟國として値打があるのである。故に、ドイツとしては、オーストリア國内のドイツ民族が年を逐うて甚だしく壓迫せられつゝあるのを傍觀してよい筈はない。

然るに、ドイツは手をつかねて何もしなかつた。

ドイツは戰爭を恐れてゐた、そして、最も不利なる時機に於て戰爭に捲き込まれるに至つた。運命から遁れんとして運命に追ひつかれ、世界平和に執着して世界大戰へ到達したのである。

ドイツの將來を考へれば是非とも領土政策を採用しなければならなかつたに拘らず、ドイツがこの政策を棄てて顧みなかつたのも實は戰爭を恐れたからである。新しい土地を得んとすれば東へ進まねばならぬ。それはよく分つてゐるが、さうすると戰爭になる。それでは困る。平和は飽くまでも維持したいので

ある。かくして、ドイツの外交目的は、何時の間にかあらゆる方法によつてドイツの國民を維持することでなくなつて、飽くまでも世界平和を確保することになつた。その結果は世間周知の通りであるが、これに就いては尙ほ後に述べる。

そこで、殘る所は第四の方策だけである。卽ち、工業奬勵と世界貿易、海軍擴張と海外植民、これがドイツの採用すべき方策として唯だ一つ殘ることになつたのである。

この方策は比較的に容易に且つ迅速に實現し得るやうに見える。總じて拓地植民は緩漫な事業であつて、效果を擧げるのに數百年を要することも珍しくないが、その代り手堅いところがあり、一時にぱつと榮えなくても徐々に間斷なく且つ根本から發展する。これに反して商工業は數年にして發展し膨脹し得るが、石鹼玉に似て健實に缺くるところがある。根氣よく困難と戰ひながら土地を拓いて農民を移す仕事よりも海軍を建設する仕事の方が速く捗るに違ひない

が、潰滅することに於ても艦隊の方が農場より速いに違ひないのである。

それにも拘らず、ドイツは此の第四の方策を採用した。それなら、ドイツは此の方策も何時か必ず戰爭を惹き起すに至るものと覺悟してかゝるべきであつた。『平和的國際競爭』といへば如何にも尤もらしくて外聞もよいが、そんなものに參加して、愛想よく上品に振舞つて絶えず平和愛好の精神を强調してをりさへすれば國民の生活を安全に確保し得るかの如く信じ、武力に訴へる必要はないと考へたのは、ドイツの迂濶であつた。ドイツが第四の方策を採用すれば、イギリスが何時か必ずドイツの敵になるべきは三尺の童子にも分り切つたことであつた。果して、ドイツの世界貿易が發展するにつれて、イギリスは暴虐な利己主義の本性を現はしてドイツの平和的進出を妨害するに至つた。ドイツはその時になつて初めて憤慨したが、これは憤慨する方がどうかしてゐるのであつて、所詮はドイツが莫迦正直だからそんなことになつたのである。殘念ながらドイツ人はイギリス人ほど目先が利かない。

ドイツがヨーロッパに於て領土を擴張するには上述の如くイギリスと結んでロシアに當らなければならぬが、海外植民や世界貿易に乘り出すには逆にロシアと結んでイギリスに當らなければならぬ。併し、それにはまたそれだけの覺悟が要る。就中、先づオーストリアと手を切らねばならぬ。蓋し、何れの方面から見ても、ドイツとオーストリアとの同盟は既に前世紀の終頃から全く有害無益なものになつてゐたのである。

然るに、ドイツ政府はロシアと結んでイギリスに當ることも、イギリスと結んでロシアに當ることも考へなかつた。それは何れの場合でも戰爭を覺悟せねばならぬからで、ドイツ政府が商工政策を取るに至つたのも、畢竟は此の戰爭が恐ろしいからであつた。ドイツ政府は世界から永久に暴力を排除して諸國を『平和な經濟政策』によつて征服し得るかの如く考へてゐた。併し、果してそんな事が出來るかどうか、不安を覺えざるを得ない場合も屢〻あつたらしく、イギリスから氣味の惡い脅威を受ける毎に自信がぐらついたやうである。そこ

でドイツは海軍を建設することにしたが、それもイギリスを撃滅するためでなく、前に述べた如く世界の平和を擁護し、世界を『平和な經濟政策』によつて征服するためであつた。それ故、ドイツ政府は建艦に當つて艦數をも各艦の噸數や裝備をも總て控へ目にしてドイツ政府の眞意が『平和』にあることを示さうとしたのである。

曾て國策の指導原理として取り上げられたものの中、世界を『平和な經濟政策』によつて征服するといふ原理ほど莫迦げた空論はない。而もこの空論を實行に移し得る證據として憚りもなくイギリスを引合に出すに至つては、愚の骨頂といはざるを得ない。イギリスを以て平和な經濟政策によつて今日の大をなすに至つたものと考へるのは、ドイツの講壇史學に誤られた結果であつて、これほど莫迦なことはないが、これもまた、世人が歴史を『學ぶ』だけでその精神を讀むことを知らず、まるで理解してゐない立派な證據である。イギリスほど平和な經濟政策によつて世界を征服するといふ空論を正面から反駁してゐる

國はない。如何に殘酷な國民でも、イギリスの國民ほど巧妙に武力を以て經濟的征服を準備し、傍若無人にこれを遂行し、これを維持した國民はない。武力を伴ふ外交によつて經濟的利權を獲得し、增大した經濟的勢力を直ちに再び外交に利用するのがイギリスの政治の特徵ではないか。イギリス人は人間としては非常に臆病であるから、經濟政策のために自分の血を流すやうなことはないと考へるのは大變な間違ひで、成る程、イギリスには徵兵制度に依る『國軍』は無いが、そんなことは反證にならぬのである。軍隊の制度は時代によつて變遷し得る。國家に取つて大切なことはかやうな軍制の形式でなくて、現存の武力を擧げて戰ふ覺悟の如何である。イギリスは古來常に必要な軍備を有してゐた。イギリスは常に勝利を收むるに足るだけの武器をもつて戰つて來たのである。傭兵で事足りる場合には傭兵を以て戰ひ、もつと大きな犧牲を拂はなくては勝てないとなれば、全國民の貴い血をも流して惜まなかつた。何れにしても戰爭を强靭に且つ斷乎として遂行せんとするイギリスの覺悟は古來一貫して終

始末らないのである。

然るに、ドイツ人は、學校、新聞、漫畫などによつてイギリス人やイギリス帝國の本質に就いて間違つた觀念を植ゑ付けられ、延いては甚だしい自己欺瞞に陷り、だんだんとイギリスを見縊びるやうになつた。その天罰は覿面であつた。ドイツ人はイギリス人を以て商人としては狡猾で拔け目がないが、人間としては非常に臆病なものと思ひ込んでゐたが、これが大變な間違ひであつた。あれほどの世界帝國を築き上げたイギリス人に膽つ玉のない道理がない。然るに遺憾ながらドイツの識者にはこれが分らなかつた。偶〻警告する者があつても耳を藉さなかつたのである。後年、世界大戰の折、自分等はフランドルで初めてイギリス兵と顏を合せたが、その時戰友の顏に現はれた驚愕の色は今でもはつきり自分の眼に殘つてゐる。戰ひを交へてから間もなく、イギリス兵は自分等が漫畫や新聞で敎へ込まれてゐたやうな弱い者でないといふことがドイツ兵の誰にも分つて來た。

自分が宣傳の忽せにすべからざるを知つたのも此の時であつた。

虚説もそれを流布する者には何か利するところがあるに違ひない。イギリス人は商人であつて臆病であるといふ虚説を流布したのも實は世界の經濟的征服といふ空論を辯護するためであつた。ドイツ人は迂濶にもかやうな虚説を信じて、イギリス人に出來ることならドイツ人にだつて出來るに違ひないとか、イギリス人には『背信』といふ特別の短所があるが、ドイツ人には律儀で正直といふ立派な長所があるから、弱小諸國の好意は勿論、大國の信頼を得ることも容易であらう、などと考へるに至つたのである。

外國人はドイツ人の律儀を警戒してゐたが、ドイツ人にはそれが分らなかつた。ドイツ人の方では何もわざと拵へてゐるのでなく、全く大眞面目なのであるが、外國人はさういふ態度を狡猾な僞裝と見てゐた。それ故、外國人は革命によつて初めてドイツ人の底知れぬ莫迦正直を知つて吃驚りしたのである。

世界を『平和な經濟政策によつて征服する』といふのが妄想であると分れば

三國同盟が妄想であることも直ぐ分る。ドイツは、まあ、何といふ國と同盟を結んだのであらうか。オーストリアと結んでゐるのではヨーロッパに於てさへ戰爭を企てることは出來ない。三國同盟の弱點はこゝにある。同盟成立の最初からこゝに弱點があつた。ビスマルクほどの人物ならこんな同盟をも十分に操つてゆけようが、凡庸な政治家にそんな眞似は出來ない。況して、ビスマルクがオーストリアと同盟を結んだ時とは既に根本の條件が違つて來てゐるのである。ビスマルクの時代では、オーストリアはなほドイツ民族の國と見てもよかつたが、普通選擧實施以來のオーストリアは議會の支配する國であり、ドイツ民族以外の民族が横行跋扈して混雜を極めた國であつた。

オーストリアとの同盟は民族政策から見ても甚だ有害であつた。ドイツと境を接するオーストリアには、スラヴ民族の國が新たに成長しつゝあつたのである。やがてスラヴ民族の國になり終るべきオーストリアが晩かれ早かれドイツから離れてロシアに近づくに至るべきは言を俟たないところである。のみなら

ず、オーストリア國内に於てドイツとの同盟を支持してゐた者は次第に勢力を失つて樞要の地位から追はれ、從つて同盟そのものも年を逐うて空虛な存在になつてゐた。前世紀の終から今世紀の初にかけての頃に、既に、ドイツとオーストリアとの關係はオーストリアとイタリアとの關係と同じな水臭い關係になつてゐたのである。

オーストリアに對するドイツの態度としては、ハップスブルグ帝國と同盟を續けてゆくか、それとも同盟を解いてドイツ民族の抑壓に就いて抗議をなすか、この二つしかない筈であつた。勿論、抗議をなす以上は戰爭をも覺悟しなければなるまい。

三國同盟は心理學から見ても値打のないものであつた。すべて同盟はその目安を現狀維持に置いて保守に傾くと弱いものになり、之に反して各締約國に國力の發展とか何とか明白な希望を抱かせることが出來れば强いものになる。何でもさうであるが、同盟でも守勢よりも攻勢に强味がある。

このことは當時既に一部世間の認めてゐたところであるが、殘念ながら所謂『當局者』はこれに氣が付かなかつた。一九一二年に、當時ドイツの參謀本部に勤めてゐたルーデンドルフ大佐が建白書によつてこの三國同盟の缺陷を指摘したことがあるが、『爲政者』はこれに一顧の價値だに認めなかつた。普通人には明白な常識でも『外交家』にはさうでないらしい。

一九一四年の世界戰爭が先づオーストリアに始つてハップスブルグ家をその渦中に捲き込んだのは、ドイツにとつて勿怪の幸であつた。若し、逆にドイツの口火で戰爭になつてゐたら、ドイツは孤立したに違ひない。ハップスブルグ帝國はドイツの惹き起した戰爭には參加することが出來ず、また參加しようとしなかつたであらう。後日ドイツ人はイタリアの態度に憤慨したが、戰爭がドイツの仕かけたものであつたら、オーストリアもイタリアと同じく『中立』を守つたであらう。さもなくばオーストリアには革命が起きたに違ひない。ドイツの惹き起した戰爭であるに拘らず、オーストリアを助けて立たんとすれば、

オーストリアのスラヴ民族は忽ち騒ぎ出して、他日を俟つまでもなく既に一九一四年にオーストリアを亡ぼしてゐたに違ひないのである。

オーストリアとの同盟は、ドイツに取つて非常に有害で厄介なものであつたが、それに氣の付いてゐたものは甚だ少かつた。何故有害で厄介なものであつたかといふと、第一に、オーストリアには敵が多かつた。此の老朽帝國を倒してこれに取つて代らんとするものが多かつた。そして、これ等の敵はオーストリアが倒るべくして倒れないのもドイツがゐるからであると考へ、だんだんとドイツを憎むやうになつた。ウィーンへ行くには廻り路でもベルリンを通らねばならぬと考へるに至つたのである。

第二に、ドイツはオーストリアと結んだがためにドイツに取つて最も都合の好い國と手を握ることが出來なくなつた。出來なくなつたばかりでない。ロシアとの關係は勿論、イタリアとの關係さへだんだんと險しくなつた。當時のイタリア人はオーストリアを憎んでゐて、深い反感を露骨に示すことも珍しくな

かつたが、ドイツに對しては一般に親しみを抱いてゐたのである。

ロシアにしても、ドイツが領土政策を捨てて商工政策を取ることになつた以上は、最早やドイツと戰ふべき理由はない筈である。從つて、ドイツとロシアとの戰爭を喜ぶものは兩國の敵でなければならぬ。事實に於て、兩國間の戰爭をあらゆる手段によつて煽動してゐたものは、主としてユダヤ人とマルクス主義者とであつた。

第三に、ドイツがオーストリアと結んでをれば、ビスマルクの建設したドイツに對して深い敵意を抱く國がオーストリアを好餌として諸國を釣り、これを動員してドイツを包圍するに至る虞があつた。此の第三の危險はオーストリアとの同盟に附隨する危險の中でもドイツに取つて最も重大なものであつた。

ドイツを包圍するには先づ東ヨーロッパの諸國、特にロシアを、それからイタリアを、オーストリアに對して嗾しかける必要があつた。エドワード王によつて企てられたドイツ包圍政策も、ドイツの同盟國たるオーストリアといふ好

餌がなかつたら實現し得なかつたであらう。利害の一致しない諸國が共同戰線を布くことが出來たのは、共同してドイツに當ればオーストリアを分割して貰へると思つたからである。かやうなオーストリアと同盟を結んだのはドイツの失敗であつた。その上に、オーストリアと同じく既に崩れかゝつて他國から覘はれてゐたトルコまで背負ひ込んでゐたらしいから、ドイツとしては愈〻容易ならぬものがあつた。

かやうな狀勢は國際金融財閥のユダヤ人にも乘ずべき機會を與へた。世界の各國を國際金融乃至經濟統制の下に置かんとするのが國際ユダヤ人の計畫である。然るにドイツはこの統制に服しようとしなかつた。そこでユダヤ人としてはどうしてもドイツを叩き潰す必要があつた。それにはドイツを繞る國際狀勢を利用するに如くはない。かくしてドイツを目の仇にする諸國はユダヤ財閥をも加へて聯合し、百萬の大軍を揃へて遂に不死身のジーグフリードにも似たドイツを攻擊するに至つたのである。

自分はウィーンにゐた頃からドイツとオーストリアとの同盟に不滿を感じてゐたが、その後だんだんと研究するにつれて同盟に對する自分の疑念は益〻深くなるばかりであつた。

瓦解するに決つてゐる國と碌でもない同盟を結んでゐては、ドイツもそのそば杖を受けねばならぬ。それが厭なら今の內に同盟を解くべきである。自分はかやうに考へてゐたから友人に對しても常にこれを說いたものである。此の信念はその後も愈〻固く、一度も動搖したことはなかつた。その間に國を擧げて戰爭の嵐に吹きまくられ、靜かに反省する者がゐなくなり、落ちついて現實を觀察すべき學者すら興奮で夢中になつてしまつたが、自分の信念は微動だもしなかつた。嬲て自分も出征するに至つたが、戰場でも自分は機會さへあれば持論をもち出して、オーストリアとの同盟を破棄すること一日早ければドイツに取つて一日の利があり、オーストリアと手を切ればドイツを目の仇にする國も少くなるから、オーストリアを失つても差引き損にはならぬ筈で、數百萬のド

イッ兵が鐵兜を被つたのも倒れかゝつた王家を支へるためでなく、ドイッを救ふためであるといふ信念を述べたものであつた。

確かに一部の識者は、世界大戰の始まる前からドイッの同盟政策に對して疑念を抱いてゐたやうである。ドイッ保守黨の中にもこの同盟に賴り過ぎることの危險を警告するものがあつたが、道理といふものはなかなか耳に入らぬもので、これもどこを吹く風かと聞き流されてしまつた。當時は一般に所謂『經濟的征服』を以て其の效果甚大にして犧牲の極めて少い『世界征服』の正道であるかの如く考へてゐたのである。

所謂外交の『素人』は、所謂外交の『玄人』が恰も町の子供を引き連れたハメルンの鼠捕（註1）の如く國家國民を率ゐて驀地に滅亡の淵へ飛び込んで行くのを眼の前に見ながら、どうすることも出來なかつた。

卐

『經濟的征服』を政治の正道とし、『世界平和』の維持を外交の唯一の目的とするが如きは狂氣の沙汰であるが、國を擧げてこれを訝まず、これを道理と考へるに至つたのは、一般に國民の政治思想が麻痺してゐたためである。

ドイツの工業が著しく進歩したのも、ドイツの貿易が目覺ましく發展したのも、總て强力な國家の庇護があつたればこそである。然るに、一部の者はこれと反對に國家の存在さへも工業や貿易の賜物であるかの如く考へてゐた。國家も經濟機關の一つであつて經濟を離れては存在するを得ず、その施政は專ら經濟の發展を目標とすべきもので、それが國家として最も健實にして最も自然な狀態である、といふやうに考へてゐたのである。

併し、國家はそんなものではない。經濟の發展ばかりを目標とするものではないのである。

國家とは商賣のために一定の領域に寄つて來た商人の集團をいふのでなく、種族を同じくする人間がその種族を保存し、その種族固有の使命を達成するた

めに組織した共同體をいふのである。種族の保存と種族の使命の達成、これが、唯だこれだけが國家の目的であり、存在の理由であつて、經濟はこの目的を達成すべき手段の一つであるに過ぎぬ。國家の基礎が最初から不自然で經濟に賴る外に仕方がなければ別であるが、さうでなければ、經濟は決して國家の存立の理由とはなり得ず、目的ともなり得ないのである。國家は必ずしも一定の領域を所有しなくても成立し得るといふが、それは不自然な國家のことであつて、自力で種族の生活を確保し、自力で働いて存立のために戰はんとする民族は領土を必要とする。唯だ、寄生蟲の如く他民族へ喰ひ込み、色々な口實を設けてその生血を搾り取る民族だけが、自身の生活圈として一定の地域を領有しなくても國家を形成し得るのである。其の適例はユダヤ民族であつて、今日では正直な民族は總てこの民族に寄生せられて苦しんでゐる。

ユダヤ人の國家は、地域の制限を受けずして世界に擴がり、唯だ民族の繋がりで出來てをればよい。これ、ユダヤ民族は他民族の國家の內に國家を造ると

いはれる所以である。此の如き國家を恰も『宗教』であるかの如く裝つて、アーリア民族が信仰の自由を認めて如何なる宗旨に對しても寛容であるのに乘じたのは、古今無類の奸策と言はねばならぬ。何故かといへば、モーゼの教なるものは畢竟ユダヤ民族の保存を目的とせるものであつて、宗教のみならず、社會、政治、經濟など、一般にユダヤ民族を保存するに必要なあらゆる部門を包括してゐるからである。

そもそも、人間が共同體を造るのは主として種族保存の本能に基くのであるから、國家は民族的有機體であつて、經濟的團體ではない。此の民族的有機體と經濟的團體との間には雲泥の差があるが、今日の所謂『爲政者』にはこれが分らぬらしい。それ故、彼等は國家を專ら經濟によつて築き得るかの如く考へてゐる。それは誤りで、國家は人間の性能が種族保存の意志の下に働いて造り上げたものである。種族を保存せんとすれば個人を犧牲にする覺悟が要る。それ故、種族保存の意志の下に働く性能といふのは種族のために自分の生命を棄

てて顧みざる大勇猛心のことであつて、利己主義の商賣人根性ではない。詩人が『生命を的にかけずば生命は得られない』(註2)と歌つたのもこゝのことで、種族を保存するには個人の生命を投げ出さなければならぬといふのである。即ち國家存立の根本條件は同一の種族といふ共通觀念と、種族保存のためにはあらゆる犧牲を拂つて惜まざる覺悟とである。この觀念と覺悟とが領土を有する民族にあつては崇高な勇氣となり、寄生民族にあつては狡猾な僞善と陰險な殘忍とになる。此の如く、國家は種族のために個人の生命を棄てて顧みざる大勇猛心によつて出來るものである。それ故、折角國家を造つても、その後の激烈な生存競爭に於て大勇猛心を發揮し得ず、或は敵意ある寄生民族の奸策に對抗し得ないやうな民族は必ず敗れ、早晩滅亡せざるを得ない。寄生民族にあめとしてやられるのも悧口でないからではないので、人道主義で表面を繕つてはゐるが、其の實、優柔不斷で勇氣が足りないからである。

國家を形成し國家を維持する性能と經濟との間には何の關係もない。その證

據に、國家の所謂經濟的繁榮が國家の健實な元氣の表象である場合は極めて稀れで、寧ろ國家崩潰の前兆をなしてゐる場合が甚だ多い。若し、經濟上の利害が國家成立の根本原因であれば、經濟的繁榮は國家の元氣の增强を示すべきであるが、事實はその反對である。

國家を形成し、國家を維持するものは經濟力であるといふ思想は宛ら信仰の如く到る所に行はれてゐる。併し、建國以來の歷史が明々白々に此の思想を否定してゐる國に於ても、これが盛んに行はれてゐるのは特に異とすべきであらう。プロイセンの如きは、國家を形成し得るものが物質力でなく、精神力であるといふ事實を極めて率直に明示してゐる。プロイセンでは、經濟は國家の元氣が盛んになると共に榮え、元氣が無くなると共に衰へた。殘念ながら、これは現に我等が自分の眼で見て知つてゐる事實である。國民の物質的繁榮は國民に精神的元氣があつて初めて期待し得ることで、經濟的利害が國家を支配するに至れば、これは主客轉倒であるから國家は滅び、從つて經濟もまた亡びる。

ドイツの歴史で見れば、國家が武斷政策によつて强盛になると經濟もそれに連れて發展し、經濟が國民の全生活を支配して精神方面を抑壓すると、國家は瓦解し、經濟もまた從つて衰微してゐる。

これを要するに、國家を形成し、或は國家を維持する力は、全體のために個人の生命を棄てて惜まざる犧牲の精神であり、犧牲の覺悟である。かやうな精神と經濟との間に何の關係もないことは明白で、其の證據に、經濟上の利害のために進んで生命を棄てる人間は一人もゐないではないか。人間は理想のためなら喜んで死ぬるが、商賣のためには死なぬものである。イギリス人は心理學者の如く國民の心理を洞察することに優れてゐるから、戰爭をするにも尤もらしい理窟をつける。ドイツでは麵麭のために戰ふのだと言つてゐたが、イギリスでは『自由』のために戰ふのだと敎へてゐた。その自由もイギリスの自由でなく、弱小諸國の自由だと言つてゐた。ドイツ人はイギリス人のかやうな厚顏無恥を嘲笑したり憤慨したりしてゐたが、それこそドイツの所謂政治なるもの

が戰前に於て既に思慮分別のない莫迦げたものになり切つてゐた證據で、政府當局は國民をして喜んで死地に赴かしめ得る力の何たるかをまるで知らずにゐたのである。

一九一四年のドイツ國民も理想のために戰ふのだと思ひ込んでゐる間は强かつたが、日常の麵麭のために戰ふのだと知ると何も彼も投げてしまつた。

ドイツの聰明な『爲政者』は、國民の氣持がどうしてそんなに變つたのか分らず、唯だ驚いてばかりゐたが、要するに、人間は經濟上の利害のために戰ふのだと知れば成るべく死を避けるやうになるものだといふこと、生命あつての物種だといふことに氣が付かなかつたのである。子供の生命に係る大事となれば纖弱い母でも男も及ばぬ勇氣を振ひ起すではないか。種族を保存せんがため或は種族を保護する家庭や國家を維持せんがために戰ふのでなければ、國民は喜んで死地に就くものではない。

以上述べて來たことは萬古不易の眞理であつて、これを要約すれば左の通り

になる。

凡そ、世の中に平和な經濟によつて建設せられた國家なるものはなく、國家はすべて種族保存の本能によつて建設せられたものであつて、唯だこの本能が或は大勇猛心になつたか、或は奸譎な詐術になつたかの差別があるだけである。大勇猛心によつて建設せられたのはアーリア民族の勞働乃至文化國家であつて、詐術によつたのは寄生民族たるユダヤ民族の國家である。如何なる民族にせよ、國家にせよ、經濟が種族保存の本能を凌駕し始めると、その民族や國家はだんだんと衰微して遂に他の民族又は國家に征服せられ、その奴隷になるやうになる。

世界大戰以前に於てドイツが貿易を盛んにし、海外に植民地を開拓するなどの平和な方法によつて世界を左右し、或は世界を征服し得るかの如く信じてゐたのは、國家を形成し維持する健全な道德を忘れ、この道德から生れるところの見識、意力、決斷などを悉く失つてゐた立派な證左であつて、その必然の結

果があの世界大戰であり、あの慘敗であつた。

ドイツ國民が一般に精神的元氣を忘れて物質的繁榮に走つたといふことは、一見不思議な謎である。ドイツこそ純然たる武斷政策によつて打ち建てられた國家の標本ではないか。ドイツの胚種ともいふべきプロイセンの建國は赫々たる武力によるものであつて、金融によるものでもなければ商賣によるものでもなかつた。ドイツもまた、武斷政策の實行と軍人の大勇との立派な結實にほかならぬのである。此の如きドイツ國民の政治本能がどうしてあのやうに麻痺したか。墮落したのが國民の一部なら兎も角、さうでないから不思議である。何か知ら腐敗菌ともいふべきものがあつて、それが宛ら鬼火の如く數限りもなくめらめらと燃え上つて國民の身體を燒き、或は惡質の腫瘍の如く所構はず國民の身體を蝕んでゐるやうで、その毒素が何か祕密な力によつて絶えず血管に注がれ、曾ては尙武を以て鳴つた國民の身體の毛細管の端まで浸み込んで、健全な理性をも、單純な自己保存の本能をも、だんだんと麻痺せしめたかのやうに

見える。

自分は一九一二年から一九一四年にかけてドイツの同盟政策や經濟政策を檢べながら上述の謎を繰り返して考へてみたが、その唯一の回答としていつでも出て來るものは、自分が曾てウィーンにゐた頃に既に別の方面から知ることの出來た勢力、卽ちマルキシズムであつた。ドイツ國民を腐敗せしめたものはマルクスの教義、その世界觀、その組織力である。

そこで、自分は再び此のマルクス主義といふ破壞の教義を研究した。今度は日常の環境に左右せらるゝことなく、政界の時事を觀察しながら教義を研究した。マルクスの理論と、これに基いて政治、文化、經濟の各方面に行はれてゐる實際運動とを照し合せて、此の破壞の教義の色々な影響を研究した。そして自分は初めてペストの如きこの國際病を克服せんとする努力に對しても注意を拂ふやうになつたのである。

自分は、ビスマルクの社會主義取締法を研究してその目的や結果を仔細に調

査し、マルクス主義に關する自分の意見の誤りにあらざることを深く確信するに至つた。爾來、マルクス主義に關する自分の持說は寸毫も變らないのである。尙ほ、自分は更に進んでマルキシズムとユダヤ人との關係をも根本的に研究した。

曾てウィーンにゐた頃の自分は、ドイツを以て確固不動の堂々たる大國と思つてゐた。然るに今や、自分は色々な不安に囚はれざるを得なくなつた。自分はよく友人とドイツの外交に就いて論じ合つたが、同時に、ドイツがマルキシズムを甚だ手輕に取り扱つてゐることに就いても論じ合つたものである。マルキシズムはドイツに取つて重大な問題であり、一大憂患である。放置して意のまゝに橫行させたら、其の結果は測り知るべからざるものがあるに違ひない。然るに拘らず、國を擧げて盲目の如く躊躇として危險な深淵に近寄つて行くのは何としても不可解といはねばならぬ。哀れな卑怯者は『何でもない、何でもない』といふが、この『何でもない』が危いので、自分は今日世間一般に對し

てこれを警告してゐるが、當時に於ても友人に對して同じやうに警告してゐたのである。古來、かやうな心の油斷で亡びた國は少くない。獨りドイツだけがこの例に洩れて亡びない道理はなからう。

一九一三年から一九一四年にかけて、初めて、自分は色々な方面の人々にマルキシズムの危險を指摘し、ドイツ國民の今後の問題がマルキシズムの打倒にあることを說明した。その人々の一部は今日忠實に國民社會主義運動を支持してゐる。

ドイツの誤れる同盟政策も畢竟はマルキシズムの害毒にほかならぬ。マルキシズムの恐るべきは、その害毒が何時の間にか健全な經濟觀や國家觀の根柢を悉く破壞し、而もこの害毒に犯された者が彼等自身の行動も意欲も健全な人類の必ず峻拒すべき世界觀、卽ちマルキシズムの展開であることに氣付かずにゐるところにある。

ドイツ國民の精神はだいぶ以前から墮落してゐた。唯だ、人生に屢〻これを

見る如く、誰もが自分の生存を破壞するものの正體を明かに知り得なかつただけである。病氣の治療に着手したことも時にはあつたが、症狀に誤られて病源を知らなかつた、また知らうともしなかつた。それ故、マルキシズムに對する闘爭は藪醫者の無駄口と同じで何の效果もなかつたのである。

註1　ハメルンの町に鼠が澤山出て始末に困つてゐた時、不思議な人間が現はれて町中の鼠を笛の音で誘き寄せて捕へてしまつたが、最後に町中の子供をも誘ひ寄せて海中へ連れ去つたといふ傳說。（譯者）

註2　シルレルの「ワルレンシュタイン」中の一句。（譯者）

第五章　世界大戰

自分は、小さな腕白の頃から、商人や役人ばかりが幅を利かす現代に生れ合せたことを殘念に思つてゐた。歴史に殘つてゐるやうな華々しい戰爭などは二度と見られず、これからは『平和的國際競爭』の時代であり、力づくで國を守るのを止めて、お互に穩かに瞞し合ふべき時代であるやうに思はれた。國といふ國がだんだんと企業家を氣取りだし、地盤を爭ひ、顧客に媚び、註文を取り合ひ、ひたすら利益を貪るやうになつた。國といふ國が他愛もない大聲を張り上げて競り合つてゐるのである。このまゝ進んで行けば世界はやがて誰にも氣に入るやうな一大百貨店になり、その入口に最も狡猾な手代と最も凡庸な役員との胸像を永久に飾りつけることになるのではなからうかと思はれる。さうなれば、イギリス人は手代になり、ドイツ人は役員になるに違ひなく、そしてユ

ダヤ人は――彼等自身の言ふところに依ると、少しも儲けたことがなく、いつも『出して』ばかりゐて、その上に大抵の言葉を知つてゐるから――損得を考へずに進んで店主をつとめるに違ひなからう。

自分は同じ生れるなら百年も前に生れて來ればよかつたと思つた。例へば、あの解放戰爭のあつた頃はまだ『商賣』を離れても生き甲斐のある時代ではなかつたらうか。

どう考へても生れて來るのが遲すぎたやうに思はれて腹の立つことが多かつた。『安寧と秩序と』の外に何もない現代が氣に喰はぬのである。運命といふものは意地の惡いものだと思つた。もともと自分は子供の頃から『平和主義者』でなかつたし、また、誰が何と言つても平和主義者になり得る自分でもなかつた。それ故、南阿戰爭の勃發はその頃の自分には宛ら旱天の遠雷であつた。

自分は來る日も來る日も新聞に齧りついて貪るやうに電報や通信を讀み、記事を通してせめて遠くからでも勇ましい戰爭を眺め得るのを仕合せに思つた。

日露戰爭の勃發した頃には、自分ももうだいぶ成人してゐて、從つて何でも注意して考へるやうになつてゐた。日露戰爭に關して意見を闘はす時には、自分は最初から日本に味方をした。これは、その頃の自分が何事につけても國民とか民族とかの立場から意見を立てるやうになつてゐたからで、ロシアの敗北は卽ちオーストリアに於けるスラヴ民族の敗北なりと考へて、日本に力瘤を入れたのである。

日露戰爭からまた幾年かの歲月が流れた。曾て、年少の自分には、此の世界の平和が澱んで濁つて腐つた泥沼の如く思はれたが、それが實は嵐の前の靜寂にほかならなかつたことが漸く分つて來た。自分がウィーンにゐた頃にもバルカンには既に颱風を豫告するあの鬱陶しい蒸し暑さが漂つてゐた。鋭い稻妻も時折り閃めいたが、それは直ぐ消えて、天地はまた不氣味な暗黑に還つた。と思ふと、やがて、第一次バルカン戰爭が起きて猛烈な突風がヨーロッパの天地を吹きまくつた。それ以來、ヨーロッパでは誰も彼も神經過敏になり、重苦し

い惡夢に魘され通しで、明日にも戰爭になりさうで不安で不安でたまらず、遂には、とても避けられぬ戰爭なら、いつそ早く始つて呉れたがよいと、却つて戰爭になるのを願ふやうになつた。その時、早くも、凄まじい電光が大地をつんざいて空が荒れだした。世界大戰の砲聲がとゞろき始めたのである。

オーストリアの皇儲フランツ・フェルディナンド太公暗殺の報がミュンヘンに傳つた時、自分は丁度家にゐて、事件の顚末に就いては唯だ大體のことしか分らなかつたが、何よりも先づ心配したのは、短銃を放つたものがドイツの學生ではあるまいかといふことであつた。フェルディナンド太公は常にオーストリアのスラヴ化に努めてゐられたから、これに憤慨した學生が太公をドイツ民族の敵と認め、太公を除いてドイツ民族を救はんとしたのかも知れない。若しさうだとすると、結果は大變な事になる。オーストリアのドイツ民族は必ず新しい迫害を受けるに違ひない。ドイツ民族は全世界が擧つて『尤もな理由のあるものとして是認する』ところの迫害を新たに受けるに違ひないのである。併

し間もなく下手人らしい者の名前を聞き、彼等がセルビア人であることを知るに及び、自分は今更ながら天命の怖ろしさを知つて思はず身慄ひを覺えた。

スラヴ民族の最大の友は狂熱的なスラヴ主義者の彈丸に仆れたのである。

オーストリアとセルビアとの關係は當時既に騎虎の勢ともいふべく、行く所まで行かなければ收まらない狀態にあつた。これは注意して兩國の關係を觀察してゐた者には明かなことであつた。

今日になつてウィーン政府の最後通牒の形式や內容がどうのかうのと言ふのは誤りである。オーストリアならずとも、あのやうな立場、あのやうな狀態に置かれたら、あのやうにするほかはなかつたであらう。セルビアはオーストリアの南隣にあつて而もオーストリアの不俱戴天の宿敵であつた。頻りにオーストリアに挑戰して一歩も讓らうとせず、オーストリアを粉碎すべき好機の到來を覘つてゐたのである。あの時に事を起さなかつたら、遲くともフランツ・ヨゼフ皇帝崩御の時を待つて事を起したに違ひなく、そんなことにでもならうも

のなら、オーストリアとしては最早や抵抗らしい抵抗をなし得なかつたかも知れない。杞憂でなく、本當にかく憂慮すべき理由があつた。近年のオーストリアはフランツ・ヨゼフ皇帝唯だ一人の力によつて支へられてゐたやうなもので、從つて國運を一身に擔はれた老帝の崩御ば大衆の感情から言へば直ちに國家の滅亡でなければならぬ。實をいふと、崩れかけたオーストリアがヨゼフ皇帝の不思議な魔術によつて支へられてゐるかの如く見せかけたのは、スラヴ民族の術策であつた。皇帝の治績とは似ても似つかぬことを宣傳して、世間を欺くと共に宮廷に諂つたのである。而もこの甘言の中に隱されてゐた毒が誰にも分らなかつた。オーストリアが專ら此の所謂古今の『明君』の英邁なる統治によつて存立してゐるのであれば、オーストリアは他日必ず皇帝の崩御と共に瓦解せざるを得ないといふことにならう。然るに誰もこのことを考へなかつた。否、寧ろ考へようとしなかつたのである。

卽ち、オーストリアなる國家は旣に老皇帝を別にしては考へられないものに

なつてゐた。曾て、マリア・テレジアを襲つたやうな悲劇がこゝに再び繰り返されて、國家は再び分裂するに決つてゐたのである。

故に、ウィーン政府は避けようと思へばなほ避け得る戰爭を避けないで無理に始めたのだ、と非難するのは誤りである。戰爭はどの途最早や避けられなかつたのである。少しく先きへ延ばすことは出來たかも知れぬが、それも長くて一年か二年かである。寧ろ、ドイツやオーストリアの當局は避くべからざる戰爭を無理にも先きへ延ばさうとして、遂に甚だ不利な時機に開戰するの已むを得ざるに至つた。外交としては拙の拙なるものと謂ふべきである。この上に尙ほ平和を維持しようとして何かやつてをれば、戰爭はもつと不利な時機に始つたに違ひない。これは誰も疑ひ得ないところであらう。

ドイツとしても、あの戰爭を避けたら、そのために生じる重大な結果に就いて豫め覺悟してゐなければならなかつたであらう。ドイツが手を引けば、世界を擧げてドイツの敵に廻さねばならぬやうな戰爭にはならなかつたかも知れぬ

が、オーストリアはドイツの參加すると否とに拘らず、結局、どこかの國と戰爭をしなければならなくなつたに違ひなく、その結果はオーストリアの分割といふことになつたであらう。さうなれば、ドイツとしても默つて見てゐるわけにゆかず、默つて見てゐたらオーストリアの分割を成行きに委せなければならなくなるから、否でも應でも戰爭に參加せざるを得ないことになる。卽ち、戰爭はドイツとしてもどの途避けられなかつたのである。

實をいへば、今日になつて世界大戰の勃發を最も激しく呪ひ、悒口さうに批判してゐる連中こそ、最も惡辣な方法によつて戰爭を助成した連中にほかならぬのである。

社會民主黨は以前から卑劣な方法によつてロシアに對する戰爭を煽動し、中央黨は宗敎上の關係から常にオーストリア支持をドイツの外交の眼目としてゐた。世界戰爭はかやうな妄想の結果であるから、社會民主黨や中央黨こそ其の責任を負はねばなるまい。來るべきものは必ず來る。何としても避けることは

出來ないのである。平和を維持することに汲々として開戰の好機を逸し、世界平和を維持せんがために誤れる同盟を結んで、遂にドイツをして英米側聯合國の犧牲たらしめたのは、確かにドイツ政府の罪であるが、世界平和を維持せんとするドイツの努力を阻止したものは世界大戰の遂行を決意せる聯合國であつた。

ウィーン政府の最後通牒がもつと穏かな形式のものであつたにしても、結果は同じであつたに違ひなく、寧ろ、ウィーン政府は國民の憤激を買つて潰れてゐたかも知れない。何故かと言へば、あの最後通牒の文句でさへ國民の眼から見るとまだまだ生温くて、決して苛烈なものでも亂暴なものでもなかつたからである。今日になつて、それは違ふ、そんな筈はない、といふ者があれば、それこそ健忘症の莫迦者か、それとも故意の虚言者である。

一九一四年の戰爭は決して政府が國民に强制したものでなく、國民の方で熱望したものである。

當時のヨーロッパは一般に不安に包まれてゐた。國民大衆は一思ひに此の不安を片付けようと思つたのである。大戰の勃發を見るや否や、ドイツ二百萬の壯丁が進んで軍旗の下に馳せ集り、喜んで最後の血の一滴をも捧げてこれを護らんとしたのもそのためである。

卐

自分はまだ若くて生溫い平和に厭き厭きしてゐたから、開戰の報を聞くと救はれたやうに思つた。今日でも、自分は、あの時に嵐の如き感激に打たれて思はず跪きながら、かうした時代に生れ合せた幸福を天に對して心から感謝したことを公言して憚らぬものである。

前古未曾有の大戰が始つた。解放の戰爭が始つたのである。やがて、大衆の間にも、今度の戰爭はセルビアやオーストリアの運命に關するものでなく、實にドイツ國民の死活に關するものであることが分つて來た。ドイツの國民も漸

くドイツの將來を感知するに至つたのである。それ故、大戰勃發後間もなく、感激の陶醉の中にも一脈嚴肅な氣が流れだした。それでなくても、國民が嚴肅になるといふことは非常に大切であつた。この大戰がドイツ國民の興亡に關するものであることを自覺しなければ、國民の奮起も線香花火に墮し去らざるを得ない。然るに、戰爭が長期に亙るかも知れぬといふことは、當時一般國民の思ひも寄らなかつたところで、國民の大多數は、冬にはまた家へ歸つて來て再び平和な仕事を續け得るに至るであらうと夢みてゐたのである。

人間はその欲するところのものを望み、また信ずるものである。國民の大多數は何時までも續く不安な狀態に厭き厭きしてゐた。さればこそ、オーストリア、セルビア間の紛爭をもなほ平和的に解決し得るものとは信ぜず、武力によつて徹底的に解決せんことを望んだのである。自分もこれを望んだ何百萬人かの中の一人であつた。

皇儲暗殺の報がミュンヘンに傳つた時、自分の頭をかすめたものが二つあつ

た。この事件は必ず戰爭になるであらうといふことが一つ、オーストリアは否でも應でも同盟を續けてドイツと一緒に戰はねばならなくなつたといふことが一つである。自分が從來常に惧れてゐたことは、オーストリアが直接の動機とならなくても、ドイツは何時かこの同盟のために戰爭を始めることになるかも知れぬが、その場合、オーストリアは內政上の理由から逃げはしないか、ドイツを援けることは出來ぬのではなからうかといふことであつた。ドイツを援けようとすれば、國內で多數を占めてゐるスラヴ民族が直ちに妨害を始めるに違ひない。スラヴ民族としてはドイツを援けるよりもオーストリアの瓦解を圖りたいのである。然るに、今やオーストリアが直接の動機となつて事件が起きたのであるから、自分の心配は杞憂に終つた。オーストリアは欲すると欲せざるとに拘らずドイツと一緒に戰はねばならなくなつたのである。

オーストリア、セルビア間の紛爭に關する自分の意見は簡單明瞭であつた。此の戰爭は、單にオーストリアがセルビアを膺懲するために行ふべきものでな

く、ドイツがその存亡のために戰ひ、ドイツ國民がその死活のために、その自由と將來とのために戰ふべき戰爭である。ビスマルクの建設したドイツは今こそ戰はなければならぬ。祖先が曾てワイセンブルグ、セダン、パリなどの會戰に於て鮮血を以て獲得したところのものを若きドイツは玆に更めて獲得しなければならぬ。この戰爭に勝てば、ドイツは領土も廣く人數も多い眞の大國として再び世界の列强に伍し、再び平和の大守護神となり得べく、平和を維持せんがために國民の食物を制限しなければならぬやうなこともなくなるのである。

自分は、子供の頃から、自分の國民的感激が決して空虛な妄想でないといふことを少くとも一度は行爲によつて證明したいと思つてゐた。本當の資格もなくて萬歲を叫ぶのは罪惡であるやうに思へてならなかつた。戲れといふ戲れが悉く影を潛めて運命の冷酷な手が人間の志操の眞僞や强弱を秤り始める、その嚴肅な戰場で一度でも試された者でなければ萬歲といふ言葉を使つてはならぬのではないか。自分にはまだその資格が無いと思ふと實に厭な氣持がした。だ

から自分も幾百萬の人々と同じく、たうとう此の厭な氣持から救はれる時に巡り合つた喜びに胸を躍らせたのであつた。自分は何度もドイツの國歌『ドイッチュランド・ユーバー・アルレス』を唱ひ、聲を張りあげて萬歳を叫んだ。自分も遲ればせながら恩寵に與つて、國民の一人として自分の抱いてゐる志操の眞實を立證せんがため、永遠の審判者たる神の法廷に立ち得るやうになつたらしく思つたのである。自分は最初から戰爭は避けられないものと思つてゐたが、いよいよ戰爭になつたら書物なんか直ぐ棄ててしまふ積りでゐた。そして、また、自分の働くべき場所は曾て內心の聲がはつきり指し示して呉れた場所、卽ちドイツでなくてはならぬことも自分にはよく分つてゐたのである。

自分は主として政治上の理由からオーストリアを去つたのであるから、いよいよ戰爭が始つた時にも、自分はやはり自分の信念に從つて行動した。これは言ふまでもないことである。オーストリアのためには戰ひたくなかつたが、ドイツ民族のためなら、ドイツ民族を代表するドイツのためなら、自分はいつで

も死ぬる覺悟でゐたのである。

自分はどこかバイエルンの聯隊に入れて貰ひ度いと思ひ、バイエルン國王ルードウィヒ三世陛下に對して願書を差し出した。それは八月三日のことであつた。當時、政府は確かに多忙を極めてゐたから、請願はしたもののなかなか許可は下るまいと思つてゐると、案外にも其の翌日に早くも回答が來た。その時の自分の喜びは非常なものであつた。震へる手で封を開き、願ひの通りバイエルンの或る聯隊に出頭するやうにと書いてあるのを讀んだ時には、胸の底から歡喜と感謝とが溢れて來た。それから數日後に自分は初めて軍服を着たが、再びそれを脱いだのは約六年後のことであつた。

ドイツ人なら誰でもさうであつたらうと思ふが、自分にも生涯を通じて最も忘れ難い時代がこゝに始つたのである。この大戰の樣々な事件に較べれば、過去の一切は殆んど無にも等しい。大戰の十週年を迎へた今日この頃、自分はドイツ民族の悲壯な鬪爭——幸にして自分も參加することの出來たこの大戰——

の始つた頃のことを思ひ出して、誇りと共に悲しみを覺えざるを得ない。

色々な光景がつい昨日の事のやうに次から次へと眼前に浮んで來る。愛する戰友に伍して軍服を着け、初めて行進し、初めて敎練し、それから尙ほ樣々なことをして遂に出征するに至つた自分の姿も見える。

他の連中もさうであつたらうが、自分にも當時唯だ一つ心配なことがあつた。それは戰線へ出遲れはしないだらうかといふことである。これだけが氣にかゝつて動もすると落ちつけなかつた。だから、新しい戰果を聞いて歡聲をあげても、自分は同時に何かしらほろ苦いものを感じた。新しい勝利を聞くたびに、自分等は間に合はぬかも知れぬぞと思はざるを得なかつたのである。

併し、そのうちに、ミュンヘンを發つて義務を果すべき日が來た。自分は此の時に初めてライン河を見た。ライン河はドイツの河の中の河である。自分等はこの河を貪婪な仇敵に對して護らんがために靜かな流に沿つて西に走つた。昇り始めた朝日の和かな光が朝霧の柔かな帷帳を通してニーデルワルドの普佛

戰爭記念碑を仄かに照し出した時、果てもなく長い輸送列車の中から聞き慣れた『ラインの守り』の歌が曉の空へひゞき渡つた。自分の胸は感極つて張り裂けさうであつた。

軈て、じめじめした寒いフランドルの夜になつた。自分等は夜を徹して默々と行軍した。霧が晴れて夜が明け始めると、俄かに一發の砲彈が朝の挨拶をするためででもあるかの如く唸り聲を立てて飛んで來た。小さな彈片が濕つた地面を叩きながら鋭い音をたてて隊伍の間に飛び散つた。そして、小さな雲のやうな硝煙がまだ消えやらぬ間に、二百人の戰友が喊聲をあげて最初の突擊を始めた。それからは、唯だもう、鳴る、響く、唸る、咆えるの戰さであつた。誰も彼も熱つぽい眼をして前進した。足はだんだん速くなつた。そして、遂に、蕪畑や生籬を越した所で白兵戰を始めた。すると、遠くの方から國歌が聞えて來た。それがだんだん近づいて中隊から中隊へと傳つて來た。そして、自分等の戰列があはや死神の餌食になるかと思はれた時に、自分等も遂に敵を退けて歌

ふことが出來るやうになつた。自分等もまた『ドイツよ、比ひなきドイツよ、世に比ひなきドイツよ』と歌ひ續けたのである。

自分等は四日後に歸つて來たが、その時にはもう歩き方まで變つてゐた。十七歳の子供までが大人の如く逞しく見えるやうになつてゐた。

リスト聯隊の志願兵はまだ十分な戰鬪教練を受けてゐなかつたが、決死の覺悟に於ては古參兵に劣らなかつた。

これが自分の初陣であつた。

かくして一年又一年と過ぎ、戰爭に關した甘い空想は消えて戰慄が現はれて來た。感激は次第に冷却し、熱烈な歡呼の聲も死の恐怖に壓し潰された。國のために死ぬるのは各人の義務であるが、自己保存の本能は死ぬるのを嫌がる。誰もが此の本能と義務との板挾みになつて悶えねばならぬ時が來たのである。自分も此の本能と義務との葛藤を免れなかつた。死神に追ひかけられるたびに何時も妙なものが頭をもたげて來た。臆病といふ奴である。如何にも理性であ

るかの如く裝つて弱い肉體を欺かうとするが、その實理性でなく理性の振りをして人を惑はす臆病である。これが自分を惑はさうとして極力引っ張る、警告する。さういふ場合に自分を誘惑から救つて呉れたものはなほ殘つてゐる良心であつた。理性を裝ふ臆病が頻りに用心を促し、だんだん聲を高くして、しぶとく、厚かましく誘ふと、良心の反抗もだんだんと激しくなつた。かうして永い間内心の葛藤をつゞけた後に、遂に、義務の觀念が死の恐怖を征服して勝利を占めたのである。一九一五年から一九一六年にかけての冬には、自分の肚はもう決つて生死に動かなくなつてゐた。出征の初め頃には歡聲をあげ、笑聲を立てながら突擊に參加したものであつたが、今では冷靜になり剛毅になつた。爾來、この態度は少しも變らなかつた。今こそ自分も神經を亂されず、思慮を失はずに、運命の最後の試煉を受けることが出來るやうになつたのである。

かくして、若い志願兵は何時の間にか古參兵になつてゐた。

併し、かやうに變つたのは自分一人でなく、全軍皆さうであつた。誰もが不

斷の戰鬪によつて老練になり、剛毅になつた。唯だ、嵐に堪へ得ざる者だけが嵐に倒れたのである。

軍隊もかうなつて初めて値打が出る。二年も三年も、兵器、兵數共に優勢な敵軍を對手にして間斷なく彼方此方に轉戰し、饑餓を忍び、缺乏に堪へてこそ無雙の軍隊の眞價が現はれるのである。

今後幾千年の歳月が流れ去らうとも、世界大戰に於けるドイツの軍隊を忘れては軍隊の勇敢を語ることは出來ぬであらう。ドイツの軍隊を想へば、過去の帷帳の中から灰色の鐵兜の立ち並ぶ鋼鐵の戰線が現はれて來る。搖がず、退かず、これこそ不滅の記念碑である。苟もドイツ人にして此の世に存する限り、この軍隊こそドイツ民族の壯丁であつたことを忘れないであらう。

當時、自分は軍人であつたから政治に頭を突つ込まうとは思はなかつた。また實際にそんな時でもなかつた。併し、今日でもなほ自分は、あの頃の最下層の荷馬車挽きの方が祖國に對する奉公に於ては最上層の人々卽ち『議會人』よ

りもずつと優れてゐたと信じてゐる。眞面目な人間が言ふべき事も言はずに默默として戰線に、銃後に各〻その義務を果してゐる時に、唯だ饒舌のみを事としてゐる議會人ほど憎むべき者はなかつた。事實、自分は當時これ等の『政客』なるものを惡んだ。出來ることなら自分は議會人によつて鍬兵大隊を編成したであらう。さすれば、彼等議會人も眞面目で正直な世間を惱ますこともなく、毒することもせず、お互の間で好きなだけ心ゆくまで喋言ることが出來たであらう。

今言つた通り、當時、自分は政治のことをかれこれ言はうとは思はなかつたが、事一度國民の運命に關するとき、特に我等軍人に關するときは、知らぬ顏ばかりもしてゐられなかつた。

當時自分の默視し得なかつた有害な事柄が二つあつた。

その一つは、勝利の報道が來始めて間も無く、一部の新聞が早くも國民の感激へ水を差し始めたことである。大抵の人は暫くそれに氣が付かなかつたやう

であるが、さも好意から、或は善意から、或は親切な老婆心からでもあるかの如く裝つて徐々に水を差したのである。勝ち祝ひに夢中になるのはどうかと思ふといふのである。仰々しい祝賀などは大國民の襟度に相應しくないと思ふが、どうか。ドイツの軍人が勇猛果敢なのは言はでも知れたことであるのに、それを今更夢中になつて喜び騒いでは外國に對しても面白くない。狂喜して度を失するよりも靜かに上品に祝ふ方が外聞がよいではないか。のみならず我等ドイツ人が今日でもなほ忘れてならぬことは、戰爭はもともとドイツ人の望むところでなかつたといふことで、それ故いつでも媾和の用意のあることを男らしく公言するのは少しも恥でない。仰々しく騒ぎ立てるのは軍隊の純粹な功業を汚し、外國の誤解を招く所以であるから宜しくない。眞の英雄は己れの功業を誇らず、默つて靜かにそれを忘れるものである。此の謙讓の美德ほど歎稱すべきものはない。偉大な事業は總て謙讓の美德から生れるのではないか。——かやうなことを言つて水を差したのである。

國民のお祭り騒ぎは三文文士の美的感情に對する侮辱であつたらしい。そんな三文文士をいつそ磔柱にでもかけてやつたら二度とそんな侮辱を感じさせないで濟んだであらうに、ドイツではそんなことをせず、却つて三文文士の言ふまゝに『相應しくない』勝ち祝ひを戒め始めたのである。

誰も氣が付かなかつたやうであるが、感激といふものは一度冷めてしまふと最早や必要に應じて喚び起すことは出來ないものである。感激は興奮であるから興奮狀態のまゝでなければ續かない。興奮があつてこそ國民もその精魂を傾けて戰爭をやり遂げ得るのである。感激を抑へて戰爭に勝てるわけが無い。

鐵は熱してゐる間にこれを鍛へねばならぬが、鐵を燒く火が『美的』感情などで熾んに燃え立つものでないことは、大衆の氣持を知り過ぎるほど知つてゐる自分にはよく分つてゐた。情熱を搔き立てようとしないで、唯だ手を拱いてゐるなどは狂氣の沙汰としか思へず、幸にもなほ燃えてゐる情熱にさへ水を差さうとするに至つては言語道斷と言はねばならぬ。

これが自分の默視し得なかつた事柄の一つであるが、いま一つ憤慨に堪へなかつたことは、マルキシズムに對する世間の態度である。世間はこのペストの如きマルキシズムに就いて何も知らずにゐるとしか思へない。政府が今後は政黨政派の別なく擧國一致して外敵に當らねばならぬと言ひさへすれば、マルキシズムの諸派も承知して政爭を遠慮するであらうと大眞面目に考へてゐたやうに思はれる。

ところが、このマルキシズムなるものはもともと政黨政派でなく、全人類を破滅せしめざればやまぬ教義である。世間にはこれが分らなかつた。尤もユダヤ化した大學では、マルキシズムが人類を破滅せしめる教義だなどといふことは教へないし、世間の人々、特に高級の役人は概ね莫迦げた自惚に囚はれてゐて、大切な事は既に何もかも大學で習つてしまつた筈だし、大學で教へぬやうなことは碌でもないことに違ひないから、そんな事を書いてある本をわざわざ探し出して勉强するには當らないと思つてゐるから、分らぬのも無理はなかつ

た。偉大な變革もかやうな『頭腦』には馬耳東風である。國家の施設が概ね私人の施設に遲れるのもこれがためである。百姓は自分の知らぬものを食べないといふ俚諺があるが、かやうな『頭腦』のことを言つたものであらう。勿論これにも少數の例外はある。

一九一四年八月の開戰當時になほドイツの勞働者をマルクス主義者と同一視してゐたのは全く沙汰の限りであつて、ドイツの勞働者は當時既にこの厄病神と袂を分つてゐたのである。さもなくば、ドイツの勞働者は決して出征を肯んじなかつたであらう。然るに、愚かにも世間ではマルクス主義者が『國民主義者』になつたかの如くに考へた。これほど大きな誤りは無いが、これも要するに國家を指導すべき役人がそれまで一人としてマルキシズムの本質を研究してゐなかつた證據である。さもなくばかやうな誤りを犯す筈がない。

マルキシズムの究極の目的は非ユダヤ的な民族國家の絕滅である。それ故、一九一四年の開戰と同時に從來マルキシズムに染つてゐたドイツの勞働者が多

年の惡夢から醒めて敢然として祖國の急に赴くに至つたのを見ると、マルクス主義者は愕然として色を失つた。國民を欺瞞してゐたマルキシズムの破廉恥な出鱈目も僅か數日の間に潰え、六十年に亙つて大衆に注ぎ込んで來た妄想も跡も無く消え失せて、後には唯だマルクス主義の指導者たるユダヤ人のみが獨り淋しく取り殘されてゐたのである。この時ほどドイツの勞働者階級を欺瞞してゐた連中の當惑したことはない。併し、彼等指導者はその身に迫る危險を認めるや否や忽ち僞つて態度を變へ、厚顏にも國民の眞似をして國民と共に感激して見せたのである。

この時にこそ、ドイツは國民を毒する詐欺師仲間のユダヤ人を一掃すべきであつた。ユダヤ人が如何に絶叫しようと、悲鳴を上げようと、それには頓着しないで、ドイツは此の機をはづさずにユダヤ人を手つ取り早く片付けてしまふべきであつた。一九一四年八月には、國際的連帶といふ妄想はドイツの勞働者の頭からきれいに消え去り、その數週間後には、アメリカ製の榴霰彈が行軍部

隊の鐵兜へ四海同胞の祝福を注ぎ始めてゐたのである。ドイツの勞働者が再び民族精神を取り戻したこの時に、この民族精神を攪亂せんとした者を容赦なく掃滅するのは憂國の政府の義務でなければならぬ。

戰線では國民の貴重な子弟が斃れてゐるのである。銃後でも毒蟲ぐらゐは驅逐してもよい筈である。

然るに、ドイツの皇帝はさやうな事を爲されず、昔も今も變らぬ罪人に親しく手を差し伸べられ、國民を暗殺する老獪な惡黨に保護と安心とを與へられたのである。

かくして佞奸の曲者は再びその陰謀を續け得るに至つた。その活動は從來に於けるよりも用心深くなつたが、それだけにまた一層危險になつた。莫迦正直な連中が擧國一致を夢みてゐる間に僞誓の罪人は革命を企ててゐたのである。

當時、自分は政府の態度がかくの如く中途半端でさつぱり煮え切らぬのを見て憤懣に堪へなかつたが、併し、その結果があれほどの大事にならうとは流石

に自分も思ひ及ばぬところであつた。

然らば如何に爲すべきであつたか。運動の指導者を牢屋に叩き込み、裁判にかけ、國民の邪魔物を一掃すべきであつた。かやうな厄病神を剿滅するためなら軍隊の力を用ひても差し支へなかつたのである。政黨も解散しなければならぬ。議會は若し必要とあらば銃劍を突きつけてでもその性根を叩き直すべきであるが、直ちに廢止するに越したことはない。ドイツが共和國になつた今日でさへ政府は政黨を解散することが出來る。況してあの大戰當時のことである。もつと立派な理由によつて政府は政黨を解散することが出來た筈である。事は實に國民の死活に關してゐたではないか。

或は、こゝで疑つて、一體、思想は武力で撲滅し得るものであらうか、野蠻な腕力で『世界觀』を克服し得るであらうかと言ふ者もあらう。

これに就いては自分も當時再三自問したものであつた。そして、史上、特に宗教方面に於ける類例を研究して次の如き確信に到達したのである。

總て觀念とか、思想とか、或は何か精神的な運動とかいふものは、間違つたものであらうと、なからうと、一旦ある程度まで出來上つてしまふとなかなか壞れないもので、それを技術的な手段で破るには、權力で彈壓すると共に、彈壓すべき理想に執つて代るべき新しい理想なり世界觀なりを用意してかゝらねばならぬ。こちらに執つて代るべき理想がなくて唯だ暴力だけを使ふのでは決して對手の理想を撲滅し得るものでなく、その傳播を阻止し得るものでない。尤も、その理想の信者を一人殘らず潰滅し、その傳統を剩すところなく破壞するならば、これはまた別であるが、併し、こんな事をすると、その國家は久しきに亙つて、或は場合によつては永久に、强國の地位から轉落してしまふことが多い。何故かといへば、經驗に依ると、かやうな場合に犧牲となつて鮮血を流す者は常に國民の最良分子であるからである。總て顧みて自己の精神に何等納得の出來ぬ迫害は一般に道德上不當なものとしか思はれず、從つて國民中の最良分子を刺戟して迫害に反抗させ、不當な彈壓を受けてゐる運動の精神に好

意を寄せさせるやうなことになる。如何なる理想でもこれを唯だ無茶な暴力だけで制壓しようとすると、大抵の場合反感を生じてこんなことになるのである。信者の數は迫害の加はるにつれて增すから、新しい教義を剩すところなく覆滅するには彈壓の方法をだんだんと擴大强化しなければならなくなり、その結果、遂に國民の最も貴重な分子を犧牲にしてしまふことになる。これが所謂『國內肅淸』であるが、それには一般的無力化といふ代償を拂はねばならぬから應報は覿面である。何れにせよ、彈壓すべき教義が既に或る程度を超えて廣く普及してゐる場合には、かやうなやり方も初めから無駄である。それ故思想でも、教義でも、植物と同じくまだ繁らない雙葉の間が摘み取るに良い時で、年を經るにつれて抵抗力が增し、老衰するに及んで再び若い新しいものと代ることになるのである。

事實に徵しても、精神上の根據も無く唯だ暴力だけによつて或る教義なり、その結果なりを撲滅しようとする企ては殆んど悉く失敗してゐる。否、期待し

たところと反對の結果に終つてゐることすら珍しくない。其の理由は次の通りである。

凡そ腕づく力づくで思想を彈壓せんとするには非常な根氣が要る。一度彈壓を始めたらそれをどこまでも續け、決して中途で止めたり緩めたりしてはならぬ。さもなくば如何なる思想も根絶し得るものでない。少しでも躊躇して、時に權力を用ひ、時に寛容を見せたりなどすると、彈壓すべき教義が再び勢を盛り返すのみならず、迫害を受ける毎に却つて強くなる。何故かといへば、彈壓の手が緩むと、苦難を堪へ忍んだことが一般の感激をそゝつて新しい信者が出來るやうになり、古い信者は彈壓者に對する反抗や憎惡の念をいよいよ強めて教義を堅持し、先に變節して離反した者までが危險の去つたのを見てまた元の信仰へ歸らうとするやうになるからである。それ故、暴力を用ひるならば、飽くまでもこれを用ひつゞけて中途で止めたり緩めたりしないやうにすることが成功の根本要件である。ところが、根氣といふものは何等かの信念が無ければ

出て來ぬもので、精神上の根柢を缺く暴力は必ず動搖して安定しない。卽ち、狂信的な世界觀（Fanatische Weltanschauung）に見る如き强固な安定性が無いのである。暴力は個人のその時々の精力と決斷とから出て來るもので、從つて人格や人柄乃至性格の强弱などによつて相違せざるを得ない。

その上に尙ほ左の如き事情もある。

總て世界觀は宗敎的なものでも、政治的なものでも——この二つは、はつきり區別することの出來ぬ場合が多い——消極的に對手の理想を打破するために戰ふよりも積極的に自己の理想を實現せんがために戰ふべきもので、世界觀の鬪爭は防禦でなくて寧ろ攻擊である。攻擊である以上は、對手の理想を徹底的に覆滅するのみならず積極的に新しい境地を開拓すべきで、さすれば目的を達成した時が自己の理想を實現した時になるから、戰ふにも張合があるが、消極的に唯だ對手の敎義を打破せんとするのでは、かやうな目的は果して何時達成し得るものか、また何時になつたら達成し得たものと見做してよいか分らな

い。單に此の一事から見ても、世界觀は守勢よりも攻勢を取るべきで、その方が一貫して强力に鬪爭し得る筈である。また、一般に常にこれを見る如く、世界觀の鬪爭でも、やはり、攻むるものが勝ち、守るものが負けるに違ひない。權力で思想を彈壓するのは、彈壓すると共にこちらの思想を支持し宣傳するのでなければ、畢竟防禦に過ぎないのである。

これを要するに、權力によつて何等かの世界觀を彈壓するには、それに代るべき世界觀を用意しておいて、これを弘めるために對手を攻擊するといふ遣り方が必要で、さもなくば必ず失敗する。二つの世界觀が互に戰つてゐる場合なら、暴力を根氣よく斷乎として利用する方が勝つ。

マルキシズムを撲滅せんとする運動が今まで常に失敗に終つてゐるのも、その原因はやはりマルキシズムに代り得る理想を用意してかゝらなかつたところにある。

ビスマルクが社會主義取締法を施行して種々努力したに拘らず結局失敗した

のもその理由は同じくこゝに在る。新しい世界觀を弘めるために社會主義と戰ふべきであつたに拘らず、ビスマルクは何等の理想をも與へなかつた。尤も、所謂『國權』とか『安寧秩序』とかいふ讃語が國家國民の存亡に關する鬪爭の精神的動機となり、根柢となり得るなどと考へるのは、所謂高等官僚の智慧でなければ出來ぬことである。

社會主義に對する鬪爭を實際に支持する理想がなかつたから、ビスマルクは社會主義取締法の實施をも、マルキシズムの考へ方から生れた制度の裁量に委ねざるを得ざるに至つた。鐵血宰相がマルキシズムに對する鬪爭の運命をブルジョア・デモクラシーの好意に委ねたのは、恰も猫に鰹節の番をさせたやうなものである。

これは卽ち、マルキシズムに對抗すべき、征服欲の熾烈な、根本から新しい世界觀が無かつたからで、要するに必然の成行きとひはねばならぬ。

かくして、ビスマルクの鬪爭も非常な幻滅に終つたのである。

然らば、世界大戰中や大戰勃發當時はどうであつたか、政府の遣り方はビスマルクのと幾らか違つてゐたかといふと、殘念ながら少しも變つたところが無かつたのである。

社會民主黨はマルクス主義者の集團であるから、政府は同黨に對する態度を變へて思ひ切つた處置を講ずべきである。自分は當時かやうに考へると共にマルキシズムに代り得る理想の持ち合せが當局にないのを非常に殘念に思つた。社會民主黨を倒しても、その代りに大衆に與へ得るものが一つも無いではないか。指導者を失つて歸趨に迷はざるを得ぬ勞働大衆をうまく纏めて統率して行けさうな運動は一つもなかつた。國際主義の狂信者が何かの理由で階級主義の左翼の政黨に別れを告げると直ちに轉向してブルジョアの政黨、卽ち右翼の階級團體に馳せ參ずるであらうなどと考へるのは狂氣の沙汰であり、莫迦の骨頂である。こんなことをいふと色々の團體に嫌がられるかも知れぬが、ブルジョアの政客は、階級上の差別も、彼等政客に政治上の不利益を來すものでなけれ

ば概ね有つた方が良い、有るのが當然であると考へてゐる。これは否むべからざる事實で、これを否む者は莫迦で圖々しい嘘言者だけであらう。

大衆をあまり莫迦にするのはよくない。これは一般に慎むべきことである。政治上の問題に就いては知性よりも感情の方が正しい判斷を下す場合が少くない。中には、大衆が莫迦げた國際主義にかぶれてゐるのは大衆の感情が正しくない證據だと見る人もあるが、そんなことを言へば、ブルジョアにも莫迦なものがあるではないかと言ひ返したくなる。何故かといへば、平和主義のデモクラシーは國際主義に劣らず莫迦げたものであるが、その信者は殆んど悉くブルジョアではないか。何百萬とも知れぬブルジョアが毎日毎朝ユダヤ人の作る新聞を讀んでデモクラシーを渇仰してゐるやうでは、ブルジョアに『同胞』の愚を嘲笑ふ資格はない。『同胞』が嚥み込んでゐるものも、ブルジョアが嚥み込んでゐるものも同じ汚物であつて、唯だ包み紙が違ふだけで、何れにしても製造元は同じくユダヤ人にほかならぬのである。

何事でも事實は事實として一應承認すべく、簡單に否認してはならぬ。選擧が近づくと、階級問題も要するに觀念上の問題に過ぎぬかの如く言ひくるめて瞞着せんとするものが出て來るが、階級問題は決してそんなものではないので、これも否むべからざる事實である。我が國民の大半が身分に就いて抱いてゐる自惚も、特に手工勞働者を輕蔑する氣風も、決して夢遊病者の幻想から生れて來たものではないのである。

この事は暫く別としても、所謂知識階級には、マルキシズムの如き惡疫の猖獗を防ぐ力もないやうなものに、既に離れ去つた勞働大衆を呼び返せる道理がないといふことが分つてゐなかつた。これなども知識階級の思考力の貧弱を示すものである。

『プロレタリア』の大衆を味方に引きつけることは『ブルジョア』の政黨と自稱するものには最早や出來ないであらう。プロレタリアとブルジョアとは對立した二つの世界であつて、半ば自然的に、半ば人爲的に隔離せられてをり、

相互の關係としては鬪爭があり得るだけである。戰へば若い方が勝つ。とすれば、マルキシズムが勝つことにならう。

一九一四年に於ても確かに社會民主主義に對して一大彈壓を下すことが出來た筈である。併し、社會民主主義に代り得るものが事實上皆無であつたことを考へれば、果して何時まで彈壓を續けることが出來たか甚だ疑問である。こゝに大きな缺陷があつた。

自分は世界大戰以前から右のやうな意見を抱いてゐたから、既成政黨に入らうといふ心にもなれなかつたのであるが、更に大戰中に『議會中心』の政黨よりも强力な運動が無いために社會民主黨に對して斷乎たる鬪爭を開始し得ないのを見るに及んで、上述の信念を益〻强めたのである。

親しい仲間に對しては自分は右の意見を屢〻率直に語つてゐた。

また、他日政界に活動しようといふ考へが自分の腦裡に初めて浮んだのもこの頃のことである。

されば こそ、自分は、戰爭が濟んだら仕事をする傍ら辯士として活躍する積りだといふことを仲間に吹聽してゐた。これも決して戯談ではなかつたのである。

第六章　戰時宣傳

政治現象を注意して研究しながら、自分がいつでも深い興味を覺えたのは宣傳のことであつた。社會主義やマルクス主義の團體が極めて巧妙に驅使し利用してゐる道具が卽ちこの宣傳である。宣傳の正しい利用は實際的な技術の一つであるが、ブルジョア政黨はこれに就いて殆んど何も知つてゐない。唯だ基督教社會主義の運動だけは、特にリューゲルが指導した時代に、この道具を相當巧妙に驅使して多くの成果を擧げてゐる。

これ等のことは自分も豫て知つてゐたが、正しく利用した宣傳の威力を眼のあたり見せつけられたのは世界戰爭が始つてからである。併し、遺憾ながらこの威力に就いてもやはり聯合國側に學ばねばならなかつた。ドイツ側の宣傳はまるで話にならなかつたのである。併し、また、ドイツ側の宣傳が全く役に立

たず、その拙さは我々兵卒にさへ眼に餘るものがあつたればこそ、これが動機となつて自分も一層熱心に宣傳問題を研究するやうになつたのである。

當時、宣傳に就いて考へる時間は有り餘るほどあつたが、實物教育は敵の方でやつて呉れた、殘念ながら良過ぎるほどやつて呉れたのである。

ドイツ側で疎かにしてゐた事を、聯合國の方では天才的な工夫をこらして極めて巧妙に行つてゐた。自分も聯合國の戰時宣傳から教へられるところが多かつたが、誰よりも先きにこれから學ばねばならなかつた筈の人々は空しく時を過してゐた。或る者は他に物を教はるほど莫迦でないと自惚れ、或る者は他に物を學ばうとする誠實な意志を缺いてゐたのである。

一體、ドイツ側には宣傳なるものがあつたであらうか。

殘念ながら、自分は『否』と答へざるを得ない。ドイツ側の實施した宣傳は總て最初から不完全であり、間違ひだらけであつて、少しも役に立たず、却つて害になるくらゐであつた。

形式は不完全で、內容は心理學上の誤謬を犯してゐた。自分はドイツの戰時宣傳を仔細に研究してかういふ結論に達せざるを得なかつた。

一體、宣傳は手段であるか、それとも目的であるか、といふことは誰にも直ぐ浮んで來る筈の疑問であるが、これに就いてさへドイツ當局にははつきりしたことが分つてゐなかつたらしい。

宣傳は手段である。從つて宣傳に就いては目的の側から判斷しなければならぬ。それ故に、また、宣傳の形式も目的を達するに都合のよいものでなければならぬ。宣傳を受ける側から見れば、目的にも色々な種類が有り得るし、從つて宣傳にも色々の價値が有り得る。これも言はずして明かなことである。然らば、世界大戰に於てドイツの追求した目的は何であつたかといへば、それは人間の考へ得る最も崇高至大なもの、卽ちドイツ民族の獨立自由であり、將來に於ける食料の確保であり、國民の名譽であつた。國民の名譽に就いては今日種種の反對論を唱へるものがあるが、名譽は甚だ大切なもの、斷じて失つてはな

らぬもので、名譽を知らぬ民族は晩かれ早かれ自由をも獨立をも失はざるを得ない。また、その方が天理にかなふわけであらう。恥を知らぬ賤民に自由を樂しむ資格はない筈で、懦弱な奴隷を以て甘んじる者に名譽は要らぬ。また名譽を與へてはならぬ。さもなくば、名譽はやがて一般の輕蔑するところとならう。

ドイツは國民の存亡のために戰つた。從つて、この戰ひを支持するのが戰時宣傳の目的であつた筈である。戰ひを援けて戰ひに勝たせるのが宣傳の眼目でなければならなかつた筈である。

民族が自己保存のために戰はざるを得ざるに至り、興亡の大事に逢着すれば、正邪も美醜も考へてはゐられなくなる。正邪も美醜も、總て人間の空想から生れた觀念であつて、外界には本來正も無く、邪も無く、美も醜も無い。人間あつての正邪であり、美醜であり、人間が無くなれば正邪も美醜も無くなる。そんなことは自然の關知するところでないからである。また、人類の間でも、

かやうな觀念を持つてゐるのは少數の民族或は人種のみで、それもその民族或は人種の感情が造り出しただけのものである。それ故、假りにこの世界に人類が永久に存在するとしても、從來正邪とか美醜とかの觀念を造り出してこれを堅持してゐた人種なり民族なりが滅びてしまへば、それと共にこれ等の觀念も亦地を拂つて消え失せざるを得ないのである。

即ち民族が自己保存のために戰つてゐる場合には、正邪美醜などの觀念はすべて第二次的な意義しか有し得ない。否、民族が戰前にこれ等の觀念に囚はれて自己保存力の麻痺を來し、延いて戰ひに負ける虞のある場合に立ち到ると、これ等の觀念は全く棄てて顧みられなくなる。戰さの形式の正邪美醜など言つてゐられなくなるのである。これは常に何處にも見ることの出來る明瞭な事實である。

正邪善惡など所謂人道の問題に關しては、既にモルトケも、戰爭では手つ取り早く片づけるところに人道がある、即ち最も熾烈な戰法が最も良く人道にか

なふと喝破してゐる。

それでもなほ美だとか、醜だとか、取るに足らぬ議言を弄ぶものがあれば、それに對しては唯だかう答へてやればよからう。民族の死活に關する戰爭となれば、美も醜も言つてはゐられない。人世に於て何が醜いといつて奴隷になることほど醜いことはないではないか。それとも、頽廢した三文文士にはドイツ國民の今日の悲運が『美しく』感じられるのであらうか。尤も、この美學とかいふ文化香油を新しく工夫したユダヤ人を對手に何も眞面目になつてかれこれ言ふことはない。ユダヤ人の存在自體が神の似姿たる人類の美學に對する具體的な抗議にほかならぬではないか。

かくの如く、戰爭に正邪美醜などの觀念が不要であるとすれば、宣傳もこれ等の觀念に囚はれてはならぬ筈である。

世界大戰に於ける宣傳も目的に對する手段であつた。そして、その目的はドイツ國民の生存のための鬪爭であつた。それ故に、宣傳もこれに當てはまる原

則から出發すべきであつた。如何に殘酷な武器でも速かに勝利を收むるに足るものであれば、それは人道的な武器であり、如何なる方策でも國民を援けて自由の尊嚴を確保せしめ得るものであれば、それこそ美しい方策である。

國民の生死を賭して戰ふ戰時の宣傳は此の如き見地に立脚すべきである。

ドイツの當局者がこの事をよく心得てゐたら、宣傳といふこの武器の形式や利用に就いてあのやうに困ることもなかつたであらう。宣傳も達人の手に握られてこそ初めて眞に怖るべき武器となるのである。

宣傳は手段なりや目的なりやの問題に就いてはこれだけに留めて、次に論ずべき大切な點は、一體誰に向つて宣傳するかといふことである。宣傳は教養のある知識階級に向つて爲すべきものか、それとも教養のない大衆に向つて爲すべきものかといふことである。

宣傳は飽くまでも大衆對手に爲すべきものである。

知識階級や、或は遺憾ながら今日往々知識階級と自稱してゐる連中に必要な

のは宣傳でなくて學問である。宣傳が學問でないことは、廣告が藝術でないのと同じである。廣告の技術は形や色によつて一般の注意を惹きつける考案家の腕にある。美術展覽會の廣告はその展覽會に就いて一般の注意を促せばよく、それに成功すればその廣告は立派だといふことになる。また、美術展覽會の廣告は大衆に對して陳列の內容を傳へなければならぬが、陳列してある美術品の代用品であつてはならぬ。故に、藝術に觸れたい者は廣告を見るだけに留つてはならぬ。單に會場を『見て廻る』だけでは足りず、一々の作品を靜かに眺め、深く味つて、徐ろに正しい判斷を下すべきである。

今日宣傳といふ言葉で表はされてゐるものも、詮じつめれば廣告と同じことである。

宣傳は、大衆の一人一人に學問させるために行ふべきものではない。大衆をして或る事實なり、事件なり、又は或る事件の必要なる所以なりを呑み込ませ、成る程さうか、嘘ではない、その通りだと合點させることが出來れば宣傳

の目的は達せられたことになる。宣傳は宣傳であつて、事實でも事件でもない。宣傳の使命は廣告のそれと同じく大衆の注意を喚起することにあつて、學問の有るものや學問に精出してゐるものを教化するのが目的でないから、宣傳は專ら感情に訴ふべく、所謂知性を目安にして行ふべきではない。

總て宣傳は通俗的でなければならぬ。むづかしいことを言はずに、對手の大衆の最も低級なものにでも良く分るやうになつてゐなければならぬ。從つて、宣傳によつて把捉すべき大衆の數が多くなれば、宣傳の內容は愈〻程度の低いものにならざるを得ない。それ故に、戰爭を完遂せんがために宣傳を行ふ場合の如く國民全體を對手にする時には、高尙な理窟を並べることは大の禁物である。

宣傳が理窟ばらずに專ら大衆の感情に訴へてゆけば、その宣傳は必ず成功する。宣傳の當否は畢竟大衆に及ぼす效果によつて判斷せらるべきものであるから、一部の學者や美學青年の滿足を買つたところでそれで宣傳が成功したこと

にはならぬのである。

大衆の感情を捉へ、心理學的に正しい方法で大衆の注意を喚び起し、進んで大衆の心の奥に喰ひ入るところに宣傳の要諦がある。ドイツの識者にこれが分らなかつたといふことは、とりも直さず彼等識者が思索を懶けてゐたか、それとも自惚れてゐた證據である。

宣傳が人心を收攬する方法であつて專ら大衆を對手にすべきものである以上は、學術の講義か何かのやうに色々なことを一時に並べ立てるのも間違ひである。

大衆は感が鈍く、物判りが惡く、その上忘れつぽいものである。それ故、總て宣傳は、言ひたいことの中から肝心な要點を摑み出し、それを標語の如くに纏めて、どんな頭の惡い者にでもよく分るやうにしてをかなければ效果を收め得ない。此の原則を忘れて何もかも一時に並べ立てれば、大衆はそれを呑み込むことも憶えてゐることも出來ないから、印象が散漫になつて效果が薄く、結

局、その宣傳は何にもならなかつたといふことになる。

宣傳の内容が重大であれば、宣傳の仕方も心理學的に愈〻正しくなければならぬ。

例へば、オーストリアやドイツの漫畫新聞は聯合國の兵隊を滑稽化して見せることに努めてゐたが、これなどは全く誤りである。何故かといへば、戰場で實際に敵兵に出會つて見ると、それまで聞かされてゐたのとはまるで違つてゐるから誰も意外な思ひに打たれ、その結果、恐ろしいことが起きるからである。例へば、ドイツの兵隊は敵兵の抵抗にぶつかつて見て、從來の宣傳が總て嘘へ事であつたのを知り、欺かれてゐたのを悟つた。その結果、ドイツの兵隊の戰意が强固になつたかといふと、なかなかどうして、却つて士氣の沮喪を見るに至つたのである。

これに反して、イギリスやアメリカの戰時宣傳は心理學的に正しかつた。兩國は各自の國民に初めからドイツ人は蠻人だ、匈奴だと言つて聞かせ、各自の

兵隊に初めから戰爭は恐るべきものと悟らせて意外の思ひをさせないやうにしておいたのである。それ故戰場でドイツ軍の恐ろしい兵器に出會つても兵隊は少しも驚かなかつた。成る程、國にゐた時に聞かされた通り、果して戰爭は恐ろしいものであつた、果してドイツ人は恐ろしい蠻人であつたと思ふだけで、却つて非道なドイツ人に對する敵愾心を深めると共に、政府の言ふ事は正しかつたと益々自國の政府を信ずるやうになつた。かくしてイギリスやアメリカの兵隊はドイツ軍が殘酷な兵器を用ひるのも豫て聞いてゐた通りドイツ人が野蠻で『匈奴の如く』慘虐であるからだと考へるに至つたが、聯合軍の方がもつと殘酷な兵器を使つてゐるかも知れない、否、使つてゐるといふことに就いては少しも氣が付かず、考へても見なかつたのである。

だから、特にイギリスの兵隊には、國にゐた時に嘘を敎へ込まれてゐたなどと考へる者は一人もゐなかつたが、ドイツの兵隊は殘念ながら實際に嘘を敎へられてゐたのであるから事毎に幻滅を感じ、遂にドイツ側の宣傳はすべて『瞞

着』であり『出鱈目』であるとして取り合はなくなつた。これは、要するに、ドイツでは宣傳を莫迦にして、宣傳の仕事ぐらゐはどんな愚物（と言つて惡ければ、從來小悧口といはれてゐた連中）にも出來るかの如く考へ、人心の機微を知る天才の必要を知らなかつた結果である。

即ち、ドイツの戰時宣傳は、心理學上の考察を誤つたために逆效果を來すに至つた『啓蒙』の適例である。

四年半の長きに亙つて敵國の方から津浪の如く押しよせて來た宣傳を活眼をもつて觀察し、鋭敏なる感覺をもつて味到した者から言へば、敵國の宣傳には學ぶべきものが非常に多かつた。

然るに、ドイツ側では宣傳なるものの性質が大抵の人に分つてゐなかつた。如何なる事柄を扱ふにしても、宣傳である以上、その事柄に對する態度は原則として主觀的であるべく、一方的であるべきに拘らず、それが分らなかつた。ドイツ側の宣傳は此の點に於て戰爭の初から誤謬の犯し通しである。よくもあ

んな莫迦げた事をやつてゐられたものだと思ふ。實際に無知であつたためにあんな事をやつたのか、それともその間に何か理由があつて故意にやつたのではないかと疑ふほどである。

例へば、新しい石鹸を賣り出す場合に、その廣告で他店の石鹸をも『品質優良』と賞めておいたら世間は何といふか。

誰でも呆れるに違ひなからう。

政治上の宣傳でも同じことである。

例へば、或る權利を主張せんとする場合、宣傳の任務は、色々な權利を較量することでなく、宣傳によつて主張すべき權利だけを强調することに在る。それ故、何事に限らず、それが假令眞實であつても、敵側の利益になるやうなものは、何も純理一點張りの律儀からわざわざ公平に研究して大衆に教へてやる必要はないので、宣傳は常に自分の方の利益になるやうな眞實を大衆に傳へればよいのである。

開戰の責任を論ずるのに、ドイツだけに慘禍勃發の責任を負はすべきでないなどといふやうな言ひ方をするのは根本から誤りで、事實に合致しようがしまいが、一切の責任を殘らず敵側に負はせた方がよかつた筈である。また實際に責任は敵側にあつたのである。

ドイツがあのやうに姑息な態度を取つた結果はどうであつたか。

そもそも、大衆といふものは外交官でもなければ、國法學者でもなく、冷靜な判斷の出來る者ばかり揃つてゐるのでもない。動もすればぐらついて疑惑や不安に陷り勝ちな凡人の集りが大衆であるから、味方の宣傳によつて敵側にも何か正義らしいものがあると敎へ込まれれば、それが基になつて味方の正義を疑ふやうになる。敵側の不正がどこで終つて味方の不正がどこで始まるなどといふ事は大衆の判別し得るところでないから、大衆は敵側にも三分の道理があると聞けば、不安に陷り疑惑に驅られざるを得なくなる。敵側が此方のやうに眞迦げた眞似をせず、一切の責任を此方へ負はせてしまはうとしてゐるやうな

場合には特にさうで、敵側の宣傳は首尾一貫してゐるから、大衆が味方の宣傳よりも敵側の宣傳を信ずるやうになるのは理の當然であらう。それでなくともドイツの國民は所謂客觀性といふ熱病にかゝつてゐて、自國や自國の國民に非常な不都合を來すに拘らず、否、自國や自國の國民の滅亡といふ重大な危險を冒しても尙ほ且つ敵國に對して不義を加へまいと努める國民なのである。敵側の宣傳に乘るのも怪むに足りなからう。

勿論、當局はそんな積りでゐたのではなからうが、大衆には分らなかつた。大衆の大半は素質も心構へも共に女性的であるから、冷靜な分別よりも感情によつて動くことが多い。

而も、大衆の感情は複雜なものでなく、非常に單純で頑固なものである。細かに差別をつけることを知らず、唯だ肯定するか、然らざれば否定する。愛するか、然らざれば憎む。正か、然らざれば邪、眞か、然らざれば僞で、それもさうだがあれもさうだとか、一部はさうだが一部はかうだとかいふやうなこと

は感情の爲さぬところである。

イギリスの宣傳は全く堂に入つたもので、これ等の事をもよく心得てゐて、疑惑を起させるやうな曖昧なことは決して言はなかつた。

イギリスは大衆の感情が素朴單純であることを知つてゐたから、そこで、ドイツ軍の蠻行なるものを巧妙な方法で徹底的に宣傳して、聯合軍が實際に大敗を喫してゐる時でも戰線の敵愾心をかき立てることに成功し、また開戰の責任に就いても、ドイツばかりが惡る者であるやうに徹底的に宣傳した。勿論、ドイツが開戰の唯一の責任者であるといふのは嘘言であるが、イギリスはこの嘘言を終始一貫して執拗に且つ鐵面皮に反復して、極端に走り易い大衆の感情に迎合し、大衆の信用をかち得たのである。

大衆の感情に訴へる宣傳が如何に有效なものであるかは、四年經つた後でもなほ聯合諸國がドイツ人に對する見方を改めなかつたのみならず、ドイツの國民すらドイツ軍が蠻行を働いたかの如く信じ、ドイツが戰爭の責任を負ふべき

ものであるかの如く考へるに至つたのを見ても明白であらう。

ドイツの宣傳がかやうな成果を收め得なかつたのは怪むに足りぬことで、內容が曖昧だから失敗するのが當然であつた。內容が曖昧では必要な印象を大衆に植ゑつけることが出來ない。氣の拔けた平和主義の含嗽水で人間を死ぬほど醉はせようなどと考へたのはドイツの迂濶な『爲政者』だけであらう。

ドイツの宣傳は洵に憫むべき代物であつた。その結果は徒勞であつたのみならず、寧ろ有害であつた。

宣傳には宣傳の原則があるのであるから、これを無視しては如何に宣傳の天才でも成功を收め得ない。前にも述べた如く、宣傳は肝心な要點だけを揭げて何度も反復して行はなければならぬ。世間の事は何でもさうであるが、宣傳でも根氣よく續けるといふことが成功の祕訣である。

文學青年や退屈した連中に引きずられてはならぬ。文學青年に引きずられると、宣傳の表現や形式が文學青年のお茶の會向きになつて、大衆には何の魅力

も無いものになる。また、退屈した連中は新鮮な感覺を失つてゐて絶えず新しい刺戟を求めるものであるから、これに對しても十分に警戒しなければならぬ。かやうな連中は何事にも直ちに飽き、變化ばかり求めて、まだ彼等ほど厚顏無恥になつてゐない同胞の欲求を我が身に移して考へようとせず、或はまるで理解しようとしない。宣傳が、或は宣傳の內容が陳腐だとか、空疎だとか、時代遲れだとか、などと毒づいて眞つ先に批評するのは何時もかやうな連中である。絶えず新奇を望み、變化を求めて止まぬから、大衆の理解に訴へる有效な政治宣傳から見れば、かやうな連中は不俱戴天の仇敵である。宣傳の組織や內容がかやうな連中の要求に應じ始めると、その宣傳は忽ち纏りを失つて崩れざるを得ない。

元來、宣傳は退屈した連中に面白い變化を作つてやるために行ふものでなく、說得するために、それも大衆を說得するために行ふものである。ところが、大衆は鈍重であるから、何か一つの事柄を呑み込むのには相當の時間がか

かる。極めて單純な概念でも何回となく繰り返して聞かされぬとなかなか覺え込まないのである。

宣傳にも目先きの變化はあつても良からう。併し、そのたびに宣傳の內容が變つてはならぬ。言つてあることは結局に於て常に同じでなければならぬのである。標語の說明も色々な方面からしなければならぬが、何時でもその標語の所へ返つて來るやうな說明でなくてはならぬ。さもなくば、その宣傳はばらばらで纏りのないものになる。

これが夢にも踏み外してはならぬ宣傳の大道で、この大道を根氣よく進んで行けば遂には必ず成功する。そして、かやうな根氣から生れる結果には殆んど想像に絕するほどの大きなものがあつて、誰でも驚かざるを得ないであらう。

總て宣傳は、商賣上のでも、政治上のでも、同じ事を永く根氣よく續けて行ふのでなければ成功しない。

聯合國の戰時宣傳は、根氣のよいことに於ても模範的であつた。要點を少く

し、專ら大衆を目當にして倦まず撓まず根氣よく續けてゐたのである。宣傳の要旨でも、形式でも、一旦正しいと認めたものは、これを戰爭の終るまで使用して少しの變更をも加へなかつた。聯合國の主張は餘り鐵面皮であつたから、最初は如何にも狂氣じみて見えたが、やがて、それ程でもなく、唯だ不快な感じを與へるに過ぎなくなり、終には、本當であらうかと一般に信じられるやうになつた。大戰四年半にしてドイツに革命が起きたが、その革命の標語は聯合國の戰時宣傳から借用したものであつた。

それからまた、宣傳といふ精神的な武器もふんだんに使はなければ十分の效果を收め得ない。如何に費用がかゝらうとも成功すれば償つて餘りがあるものである。イギリス人はこのことをもよく心得てゐた。

宣傳はイギリスでは上等の武器と見られてゐたが、ドイツでは失業政治家の飯の種であり、凡庸文士の稼ぎ口であつた。

これを要するに、ドイツの宣傳の效果は零であつた。

昭和十七年十月十日印刷
昭和十七年十月十五日發行　（初版五〇〇部）

東京市神田區駿河臺二丁目一番地ノ一
東亞研究所
編輯兼發行者　伊藤斌

東京市神田區美土代町十六番地
印刷者　高木外史
（東東三五）

東京市神田區美土代町十六番地
印刷所　株式會社三秀舍

發行所　東京市神田區駿河臺二丁目一番地ノ一
東亞研究所